

一般国道  
10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

# 上桑野遺跡

宇野代遺跡Ⅱ

福岡県築上郡新吉富村所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

一般国道  
10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

# 上桑野遺跡

宇野代遺跡Ⅱ

福岡県築上郡新吉富村所在遺跡の調査



1号住居跡出土 コップ形土器 (器高11.3cm)



1号墳出土 ガラス丸玉・ガラス小玉

# 序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年度から平成6年度の間に実施いたしました。

本書はこのうち、平成3年度から4年度にかけて実施した築上郡新吉富村垂水に所在する上桑野遺跡、宇野代遺跡の発掘調査の記録であります。

発掘調査の報告としては満足のものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、また学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた建設省北九州工事事務所、新吉富村教育委員会、地元の方々をはじめ関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成10年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

# 例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受けて、平成3年度から4年度に調査を行った築上郡新吉富村に所在する上桑野遺跡、宇野代遺跡についての調査成果を「一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第8集として取りまとめた。宇野代遺跡は、既に刊行した第1集の宇野代遺跡と同一遺跡である。本書では第2次調査分について収録し宇野代遺跡Ⅱとするが同遺跡についての報告は本書で完了する。
2. 出土遺物は、県教育庁文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
3. 掲載写真のうち遺構写真は池邊元明・小川泰樹が撮影し、遺物写真の撮影は九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一の協力を得た。なお、空中写真は（有）空中写真企画に撮影委託した。
4. 挿図のうち遺構実測図は、池邊・小川・飛野博文・笠原勝彦・犬塚カヲル・木下秀子・植山智保子・友田鈴香・是石美知子・原田知代が実測し、遺物実測図は、池邊・小川・杉原敏之・若松三枝子・山本千鶴美・安住美千子・坂田順子・江口幸子・堀之内久美子が実測した。また、図面の浄書には豊福・原カヨ子が、図面等の整理には関久江・土山真弓美・山田智子・辻清子・安永啓子の助力を得た。
5. 挿図で使用する方位は、座標北に統一している。
6. 付編として、長田遺跡（豊前バイパス1-E地点）8号土坑・1号溝出土土器について報告する。これについては杉原が担当した。
7. 本書の執筆は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴを小川が、他を池邊が行い、編集は池邊が行った。

# 本文目次

I 調査の経過と調査組織	1
II 位置と環境	7
III 宇野代遺跡(2次)の調査	
1. はじめに	13
2. 遺構と遺物	13
1) 1号大溝状遺構	13
2) 1号溝状遺構	13
3) 2号溝状遺構	16
4) 3号溝状遺構	16
5) 4号溝状遺構	16
6) 出土遺物	16
3. おわりに	24
IV 上桑野遺跡A地点の調査	
1. はじめに	33
2. 遺構と遺物	34
1) 住居跡	35
2) 土坑	48
3) 溝状遺構	48
4) その他の遺物	51
5) 上桑野1号墳	54
3. おわりに	65
V 上桑野遺跡B地点の調査	
1. はじめに	67
2. 遺構	67
1) 土坑	67
2) 溝状遺構	67
3. おわりに	68

# 図 版 目 次

- 巻頭図版1 コップ形土器  
巻頭図版2 1号墳出土ガラス丸玉・小玉

	本文対照頁
宇野代遺跡	
図版1-1 宇野代遺跡2次調査区全景(北西から) .....	13
-2 1号大溝状遺構、1号溝状遺構(南西から) .....	13
図版2 出土遺物1 .....	16
3 出土遺物2 .....	19
4 出土遺物3 .....	20
上桑野遺跡	
図版1-1 友枝川と宇野代遺跡(南東上空から) .....	33
-2 上桑野遺跡A地点全景(南東上空から) .....	33
図版2-1 II区全景(北東上空から) .....	47
-2 II区南半部(南東上空から) .....	47
図版3-1 II区北半部(南東上空から) .....	47
-2 III区全景(南東上空から) .....	54
図版4-1 I区全景(北東から) .....	35
-2 I区西半部(南東から) .....	35
図版5-1 I区2号住居跡周辺(南から) .....	36
-2 I区3号住居跡周辺(北東から) .....	41
図版6-1 1号住居跡(南東から) .....	36
-2 2号住居跡(南から) .....	36
図版7-1 II区全景(北西から) .....	47
-2 II区全景(南東から) .....	47
図版8-1 上桑野1号墳全景(南東から) .....	54
-2 1号墳石室(北から) .....	56
図版9-1 石室と南側周溝(北西から) .....	56
-2 西側周溝(北東から) .....	56



図版10-1	南側周溝断面	56
- 2	西側周溝断面	56
図版11	出土遺物 1	36
図版12	出土遺物 2	36
図版13	出土遺物 3	44
図版14	出土遺物 4	44
図版15	出土遺物 5	51・56
図版16	出土遺物 6	56
図版17	出土遺物 7	53・64
図版18	出土遺物 8	53
図版19-1	B区全景(南西から)	67
- 2	4号溝状遺構(北西から)	68
図版20-1	4号溝状遺構石除去後(北西から)	68
- 2	1号土坑(北東から)	67

## 挿 図 目 次

I	頁	
第1図	豊前バイパス路線図(1:500,000)	1
II		
第2図	新吉富村周辺の地形と豊前バイパス路線内の遺跡(縮尺1/20,000)	6
第3図	周辺の遺跡分布図(縮尺1/50,000)	8
III 宇野代遺跡		
第4図	宇野代遺跡周辺地形図(縮尺1/2,000)	14
第5図	遺構配置図(縮尺1/200)	15
第6図	出土土器実測図①(縮尺1/3)	17
第7図	出土石器実測図①(縮尺1/2)	18
第8図	出土石器実測図②(縮尺1/2)	19
第9図	出土土器実測図②(縮尺1/3)	21
第10図	出土土器実測図③(縮尺1/3)	22
第11図	出土土器実測図④(縮尺1/3)	23
第12図	出土土製品実測図(縮尺1/2)	24

#### IV 上桑野遺跡A地点

第13図	上桑野遺跡周辺地形図(縮尺1/2,000)	33
第14図	I区遺構配置図(縮尺1/200)	34
第15図	1号住居跡実測図(縮尺1/60)	35
第16図	2号住居跡実測図(縮尺1/60)	37
第17図	1・2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	38
第18図	2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	39
第19図	2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	40
第20図	3号住居跡実測図(縮尺1/60)	42
第21図	3号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	43
第22図	I区ピット出土土器実測図(縮尺1/4)	44
第23図	II区遺構配置図(縮尺1/200)	45
第24図	4号住居跡実測図(縮尺1/80)	46
第25図	4号住居跡断面実測図(縮尺1/80)	47
第26図	土坑実測図(縮尺1/40)	47
第27図	土坑・ピット出土土器実測図(縮尺1/4)	49
第28図	溝状遺構実測図(縮尺1/60)	50
第29図	表採土器実測図(縮尺1/4)	52
第30図	出土石器実測図①(縮尺1/2)	52
第31図	出土石器実測図②(縮尺2/3)	53
第32図	上桑野1号墳地形実測図(縮尺1/200)	55
第33図	周構断面実測図(縮尺1/60)	56
第34図	石室実測図(縮尺1/40)	57
第35図	出土土器実測図①(縮尺1/3)	58
第36図	出土土器実測図②(縮尺1/3)	59
第37図	出土土器実測図③(縮尺1/4)	60
第38図	出土土器実測図④(縮尺1/4)	62
第39図	出土鉄器実測図(縮尺1/2)	62
第40図	出土玉類実測図(実大)	63

#### V 上桑野遺跡B地点

第41図	B地点遺構配置図(縮尺1/200)	66
第42図	1号土坑実測図(縮尺1/20)	67
第43図	4号溝状遺構実測図(縮尺1/60)	68

# 表 目 次

表1 一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表 .....	2
表2 ガラス丸玉・小玉計測表 .....	64

# 付 図

付図1 上桑野遺跡遺構配置図 (縮尺1/300)	
--------------------------	--

# 付 編

## 長田遺跡出土の黒色土器

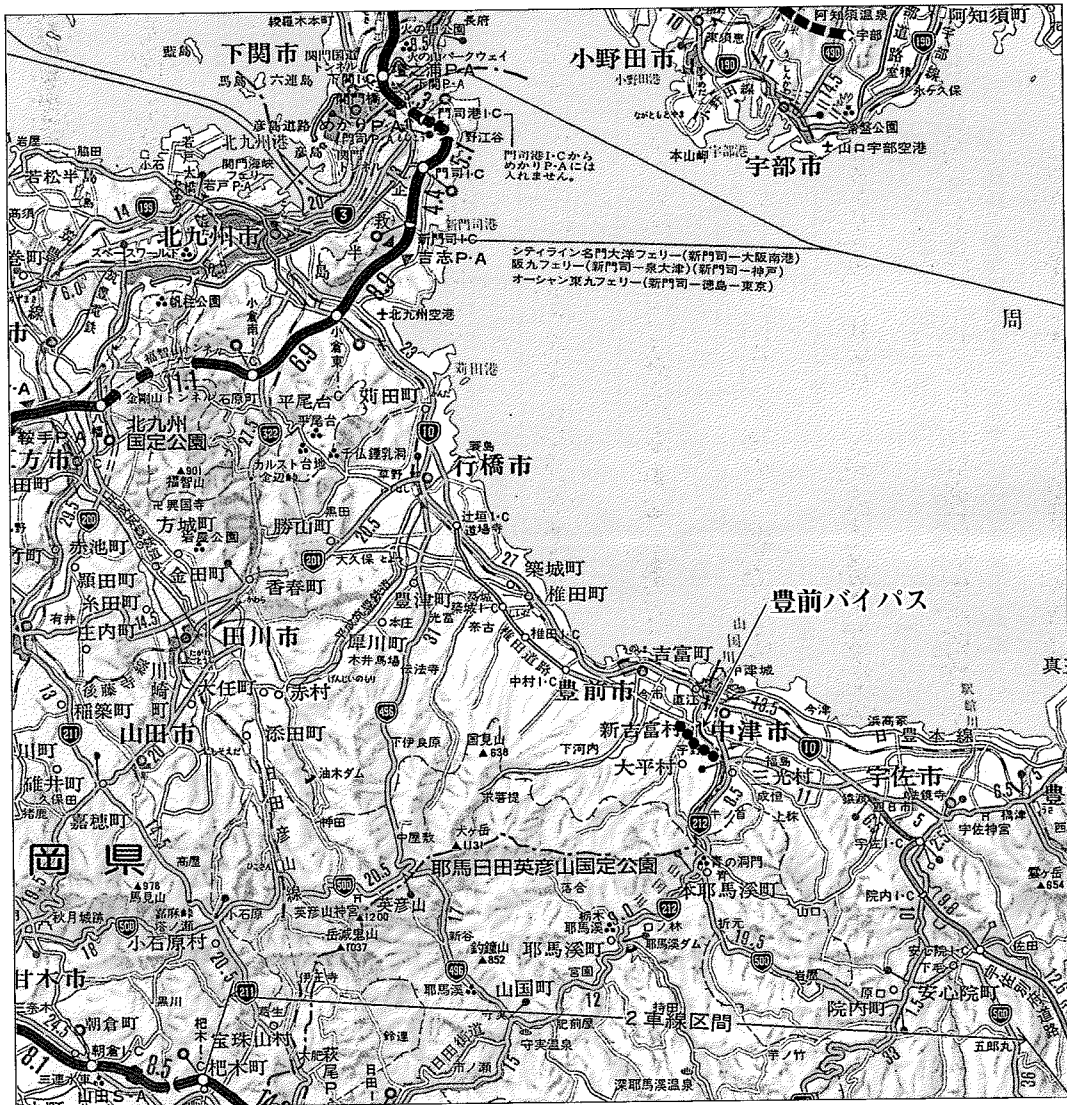
1. はじめに .....	69
2. 遺物について .....	69
3. 小 結 .....	70

図1 長田遺跡8号土坑・1号溝出土土器実測図 (縮尺1/3) .....	69
--------------------------------------	----

# I 調査の経過と調査組織

## 調査の経過

一般国道10号線バイパスは、築上郡新吉富村大字大ノ瀬を起点とし、終点の同郡大平村大字上唐原までの総延長4.4kmを二村に跨り走っている。そして県境である山国川を渡り大分県中津市、下毛郡三光村の中津バイパスに続く。



第1図 豊前バイパス路線図 (1 : 500,000.道路施設協会「九州自動車道」1997.2改変)



近年の人口増加や経済発展による都市周辺への日常生活圏の拡大現象は、国道10号線の走る東九州地域においても認められ、北九州市を起点とする国道10号線の整備は大きな課題であった。その具体的な構想が北九州市中心部から大分市中心部までの約136km・走行所要時間約4時間を約125km・走行所要時間約2時間に短縮する、「北大道路」整備計画であり、豊前バイパスもその中の重要路線の一つであった。

豊前バイパスは平成6年3月27日に全線開通した。この間のルート選定から分布調査、試掘調査、本調査に至る建設省九州地方建設局との協議等の経緯については、『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 宇野代遺跡』に詳しいのでご参照されたい。

豊前バイパスの発掘調査は、表1に示すとおり昭和62年11月2日8-A地点上唐原遺跡の調査から始まり、平成6年7月8日1-G地点竹ノ下遺跡の調査で終了した。平成3年度から4年度にかけては調査が最高潮に達し面積も6万㎡を超える広大なものとなった。

今回報告する宇野代遺跡2次調査は、平成5年1月7日から同年3月26日まで、上桑野遺跡A地点は平成4年4月21日から同年6月19日まで、上桑野遺跡B地点は平成4年1月9日から同年1月17日までの期間発掘調査を実施したものである。

#### 調査の組織と関係者

平成3・4年度の調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	3年度	4年度
所 長	竹中 幸生	竹中 幸生
副 所 長	中山 高虎	中山 高虎
建設専門官	田中 陸憲	田中 陸憲
建設監督官	百田 国広	古賀 義隆
工務課長	溝口 義毅	中川 蔵太
工務係長	平田 政生	徳重 英紀
調査課長	松崎 安則	山田 茂利
調査係長	荒瀬 美和	柴田 智
建設技官	杵掛 孝	杵掛 孝
用地課長	廣田 晋作	廣田 晋作
用地係長	樋口 昭裕	樋口 昭裕

福岡県教育委員会

総括 教育長	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	光安 常喜	月森 清三郎

	指導第二部長	月森 清三郎	松枝 巧
	文化課長	森山 良一	森山 良一
	参 事	森本 精造	松尾 正俊
	参 事	柳田 康雄	柳田 康雄
	課長補佐	国武 康友	石川 元彬
	文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄
	室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘
庶務	管理係長	岸本 実	毛尾 信
	主任主事	安丸 重喜	安丸 重喜
調査	調査班総括	井上 裕弘	副島 邦弘
	参事補佐	副島 邦弘	佐々木隆彦
	技術主査	池邊 元明	池邊 元明
	主任技師	飛野 博文	
	技 師	小川 泰樹	小川 泰樹
	調査補助員	笹原 勝彦 (現川崎町教育委員会)	
	調査補助	末永 浩一 (現大平村教育委員会)	宮崎 亮一 (現太宰府市教育委員会)

発掘調査には、新吉富村、大平村在住を中心とした多くの方々に参加していただいた。また、調査期間中には、濱嶋三司・宮本工・一川淳江・川本義継（福岡県文化財保護指導委員）、小川国男（垂水区長）、宮秋伸一（新吉富村教育委員会）、飛野博文・木村（旧姓尾座本）康子（福岡県教育庁京築教育事務所）、中原三重子（文化課椎田事務所）、丹羽博・栗焼憲児・棚田昭仁（豊前市教育委員会）、高尾栄市（築城町教育委員会）、山本健太郎（椎田町教育委員会）、平田（旧姓植田）由美、坂本喜弘（大分県教育委員会）などの方々のご援助ご指導を得た。

#### 報告書の作成と関係者

出土遺物の整理については、発掘調査の終了した遺跡より文化課椎田事務所で水洗し、順次九州歴史資料館へ搬入して復原作業を実施した。そして、平成9年度には遺物実測作業、報告書作成作業を行った。今年度をもって豊前バイパス各地点の整理作業はすべて終了した。来年度からは地点ごとの成果を活用・公開していくための新たな整理が必要となる。

報告書作成にかかわる、平成9年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所 長	徳永 和幸
副 所 長	高崎 寿男
用 地 官	宮崎 哲夫

建設専門官	入部 秀信
建設監督官	中野 道男
工務課長	田中 常美
工務係長	総崎 祐二
調査課長	田中 敏則
計画係長	桜井 敏郎
調査課主任	田邊 稔
建設技官	大川雄一郎

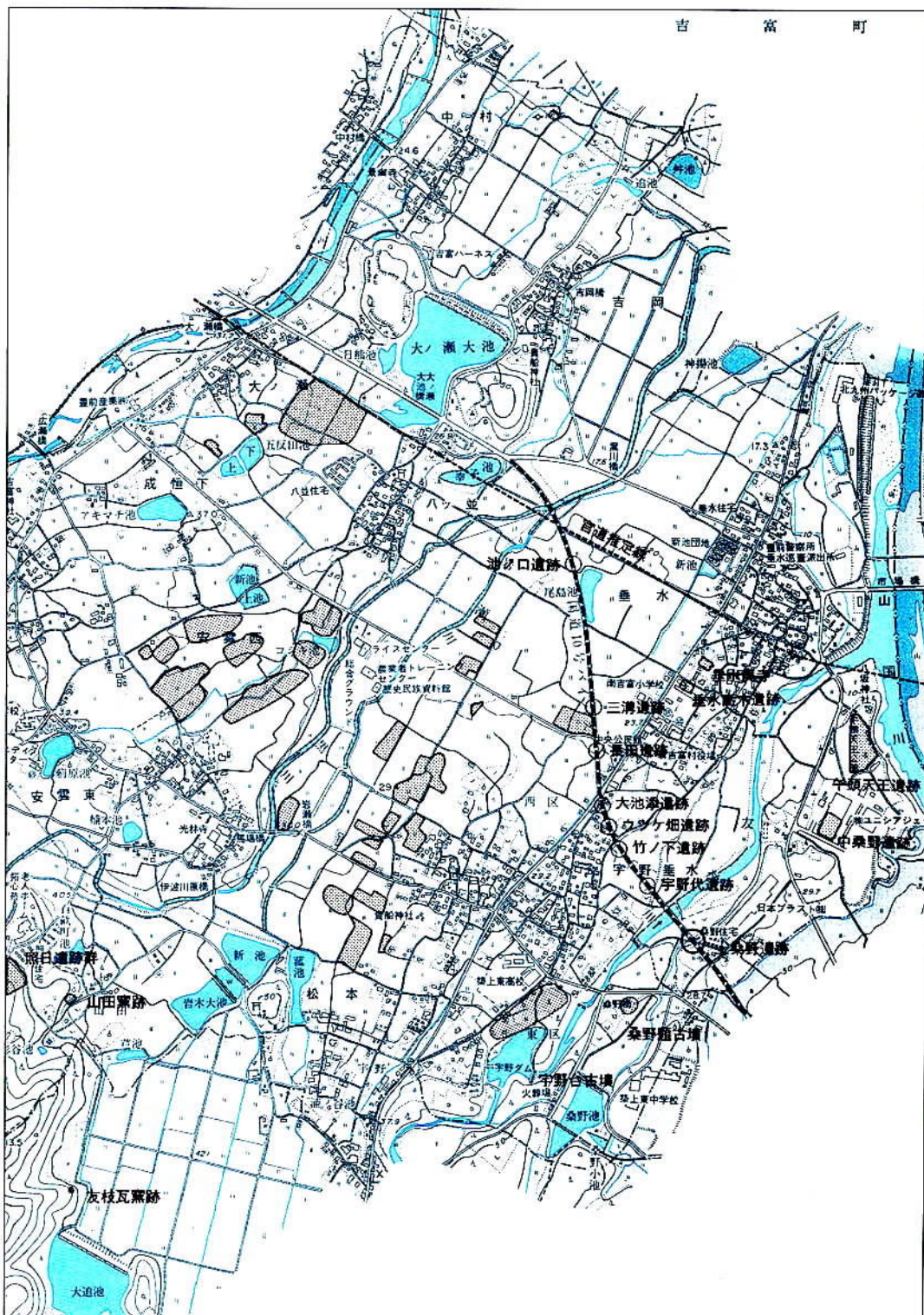
福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 巧
指導第二部長	竹若 幸二
文化課長	石松 好雄
参事	柳田 康雄 (兼文化財保護室長)
課長補佐	城戸 秀明
課長技術補佐	井上 裕弘 (兼文化財保護室長補佐)
参事補佐	橋口 達也 (兼調査班総括)
参事補佐	木下 修
参事補佐	新原 正典
参事補佐	中間 研志
庶務 参事補佐兼管理係長	黒田 一治
事務主査	鶴我 哲夫
整理 福岡教育事務所生涯学習課参事補佐	池邊 元明 (整理・執筆担当)
文化課主任技師	小川 泰樹 (整理・執筆担当)
整理指導員	岩瀬 正信 (接合復原) 平田 春美 (土器実測)
	北岡 伸一 (写真撮影) 豊福 弥生 (整 図)

整理補助 原 カヨ子・関 久江・土山真弓美・若松三枝子・山本千鶴美・安住美千子  
 坂田 順子・江口 幸子・堀之内久美子・山田 智子・辻 清子・安永 哲子・古賀 陽子  
 竹田まち子・砥上トシ子・武藤 睦子・坂口 好子・白水マサエ・若松 和子・辻 光子

報告書作成にあたっては、このほかにも吉村靖徳・秦 憲二・吉田東明・岸本 圭(福岡県教育庁文化課)、横田義章・杉原敏之(九州歴史資料館)、小池史哲(京築教育事務所)、飛野博文(北筑後教育事務所)、矢野和昭(新吉富村教育委員会) 諸氏の協力を得た。





第2図 新吉富村周辺の地形と豊前バイパス路線内の遺跡 (縮尺1/20,000)

## II 遺跡の位置と環境

上桑野遺跡と宇野代遺跡はともに福岡県築上郡大字垂水に位置し、友枝川中流の上桑野遺跡が右岸、宇野代遺跡が左岸の河岸段丘上にそれぞれ立地する。遺跡周辺の地理的・歴史的環境は『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集～第7集に詳しいため、ここでは両遺跡に関係が深い時代のみを述べる。

牛頭天王遺跡と中桑野遺跡は本来同一の遺跡と考えられ、遅くとも弥生時代前期末から中期初頭に始まり、中期中葉までには大型掘立柱建物3棟を含む集落が形成され、中期中葉から後半には集落全体を取り囲む大規模な環濠が掘削されたようである<sup>(註1)</sup>。大平村桑野遺跡は中期前半から後半の掘立柱建物跡、竪穴式住居跡等よりなる<sup>(註2)</sup>。最近大平村下唐原伊柳遺跡では、前期末に始まり中期内にはほぼ収まる集落を調査しており、2×1間の大型柱掘方を伴う掘立柱建物跡1棟をはじめとする多数の掘立柱建物跡と円形竪穴式住居跡等を検出した<sup>(註3)</sup>。墓地としては同じく大平村の大塚本遺跡がある<sup>(註4)</sup>。37基の土壙墓、石蓋土壙墓、石棺墓、甕棺墓からなり、一角には方形周溝墓(墳丘墓)を形成して5基の祭祀土壙がこれを取り囲む。周溝と祭祀土坑からは中期前葉から後葉までの土器が大量に出土した。下唐原伊柳遺跡とは直線距離で約300m程しか離れておらず、両者の関係が注目される。

古墳時代後期は大ノ瀬大坪遺跡で大集落が発見されているが、詳細は不明である<sup>(註5)</sup>。この近くにある村指定史跡の吉岡巨石塚古墳<sup>(註6)</sup>と、線刻画で知られる大平村の国指定史跡穴ケ葉山古墳群<sup>(註7)</sup>はその規模からこの地域の盟主的な集団の墓であろう。この時代は中小の古墳が爆発的に造営される時期であり、発掘調査をされたものだけでも新吉富村桑野題古墳群<sup>(註8)</sup>、宇野台古墳群<sup>(註9)</sup>、宇野代古墳群<sup>(註10)</sup>、大平村金居塚古墳群<sup>(註11)</sup>、上ノ熊古墳群<sup>(註12)</sup>、土佐井古墳群<sup>(註13)</sup>、吉富町天仲寺古墳、広運寺古墳<sup>(註14)</sup>等があり、未調査の古墳、消滅した古墳を加えれば、この地方には数百から千を超える数の古墳があったものと思われる。横穴墓では凝灰岩を掘り込んで彩色を施した大平村百留横穴墓群<sup>(註15)</sup>が古くから知られ、ほかに安山岩風化土層に造営された大平村金居塚横穴墓群<sup>(註16)</sup>や、これと山国川の対岸に位置する5世紀後半代の初期横穴墓を含む80基の横穴墓を調査して全国的にも著名な大分県三光村上ノ原横穴墓群<sup>(註17)</sup>がある。

註1 新吉富村教育委員会 1994「牛頭天王遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第8集

新吉富村教育委員会 1978「中桑野遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第3集

2 福岡県教育委員会 1997「桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集下



第3図 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

1. 楡生山古墳 2. 小石原泉遺跡 3. 巨石塚古墳 4. 大ノ瀨下大坪遺跡 5. 垂水庵寺 6. 垂水縄文遺跡 7. 牛頭天王(中桑野)遺跡 8. 尻高畑田遺跡 9. 照日・山田窯跡群 10. 土佐井遺跡 11. 土佐井ミソソデ遺跡 12. 今蔵遺跡 13. 穴ヶ葉山古墳・穴ヶ葉山遺跡 14. 能満寺古墳群 15. 西方古墳 16. 百留横穴墓群 17. 相原庵寺 18. 永漆遺跡 19. 上ノ原横穴墓群・基助地遺跡・幣旗邸古墳群 20. 佐知遺跡 21. 古代宮道推定線  
 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上ノ熊遺跡  
 H. 金居塚遺跡 I. 郷ノ原遺跡 J. 上唐原遺跡

- 註3 平成9年度に圃場整備事業に伴い大平村教育委員会が発掘調査。末永浩一氏の御教示による。
- 4 福岡県教育委員会 1998「大塚本遺跡」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集
  - 5 平成7年度から圃場整備事業に伴って新吉富村教育委員会が確認調査
  - 6 新吉富村 1990『新吉富村誌』
  - 7 大平村教育委員会 1985「穴ヶ葉山古墳群」『大平村文化財調査報告書』第3集
  - 8 新吉富村教育委員会 1989「桑野題古墳群」『新吉富村文化財調査報告書』第4集
  - 9 新吉富村教育委員会 1990「宇野台古墳群」『新吉富村文化財調査報告書』第5集
  - 10 福岡県教育委員会 1995「宇野代遺跡」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集
  - 11 福岡県教育委員会 1996「金居塚遺跡I」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集
  - 12 大平村教育委員会 1978「上ノ熊古墳群」『大平村文化財調査報告書』第1集
  - 13 大平村教育委員会 1990「土佐井地区遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集
  - 14 吉富町教育委員会 1983「天仲寺古墳・広運寺古墳」『吉富町文化財調査報告書』第1集
  - 15 大平村 1986『大平村誌』
  - 16 福岡県教育委員会 1996「金居塚遺跡I」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集
  - 17 大分県教育委員会 1992「上ノ原横穴墓群」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)



う の だい 遺 跡  
宇 野 代 遺 跡



### Ⅲ 宇野代遺跡（2次）の調査

#### 1. はじめに

宇野代遺跡2次調査区は、築上郡新吉富村大字垂水1131他に位置し、宇野代遺跡1次調査区と友枝川とに挟まれた面積約1,900㎡の部分にあたる。ここは1次調査の段階では未買収のため調査のできなかった地点で、建設省による用地買収終了後の平成5年1月7日から同3月26日の期間、1次調査地点を挟んで150mの距離にある竹ノ下遺跡と同時進行で調査を行った。

調査区は現在北東に流れる友枝川左岸の河岸段丘上に立地しており、調査前から河川による攪乱をある程度は受けているものと予想していた。しかしながら、前年に実施した1次調査では検出した古墳群が2次調査区との境にまで広がっていたため、その範囲確定を主眼に置いて調査を行った。

#### 2. 遺構と遺物

調査の結果、古墳またはこれに関連する遺構を検出することはできなかった。検出した主な遺構は、溝状遺構5条と多数の土坑である。このうち、土坑としたものは全て不整形であり、また埋土や遺物の出土状況をもても、人為的なものとするにはむしろ無理があると思われる。どのような過程を経てできあがった地形かは不明であるが、友枝川の氾濫に由来する地面の凹凸と考えたい。

##### 1) 溝状遺構

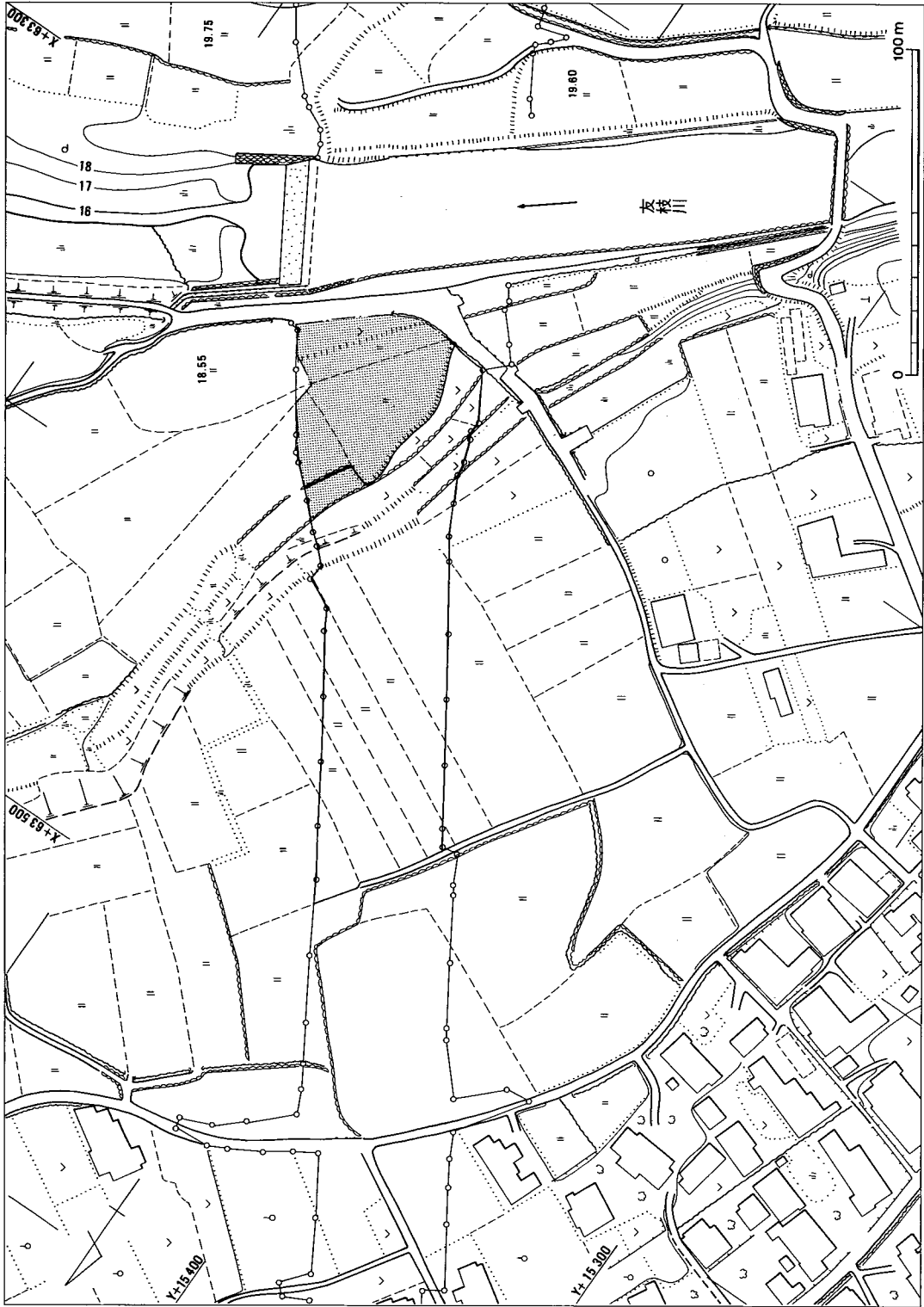
###### 1号大溝状遺構（図版1、第5図）

調査区の中央から東寄りの部分を蛇行しながら南北に貫き、北および南側はさらに調査区外に続く。調査区内で65m分を確認し、幅4～7m、深さ40～70cmの規模で、北側がわずかに低く傾斜する。溝というよりもむしろ自然の流路であり、現在の友枝川との距離が15～20mと近いことを考えれば、こちらがかつての友枝川である可能性が高い。

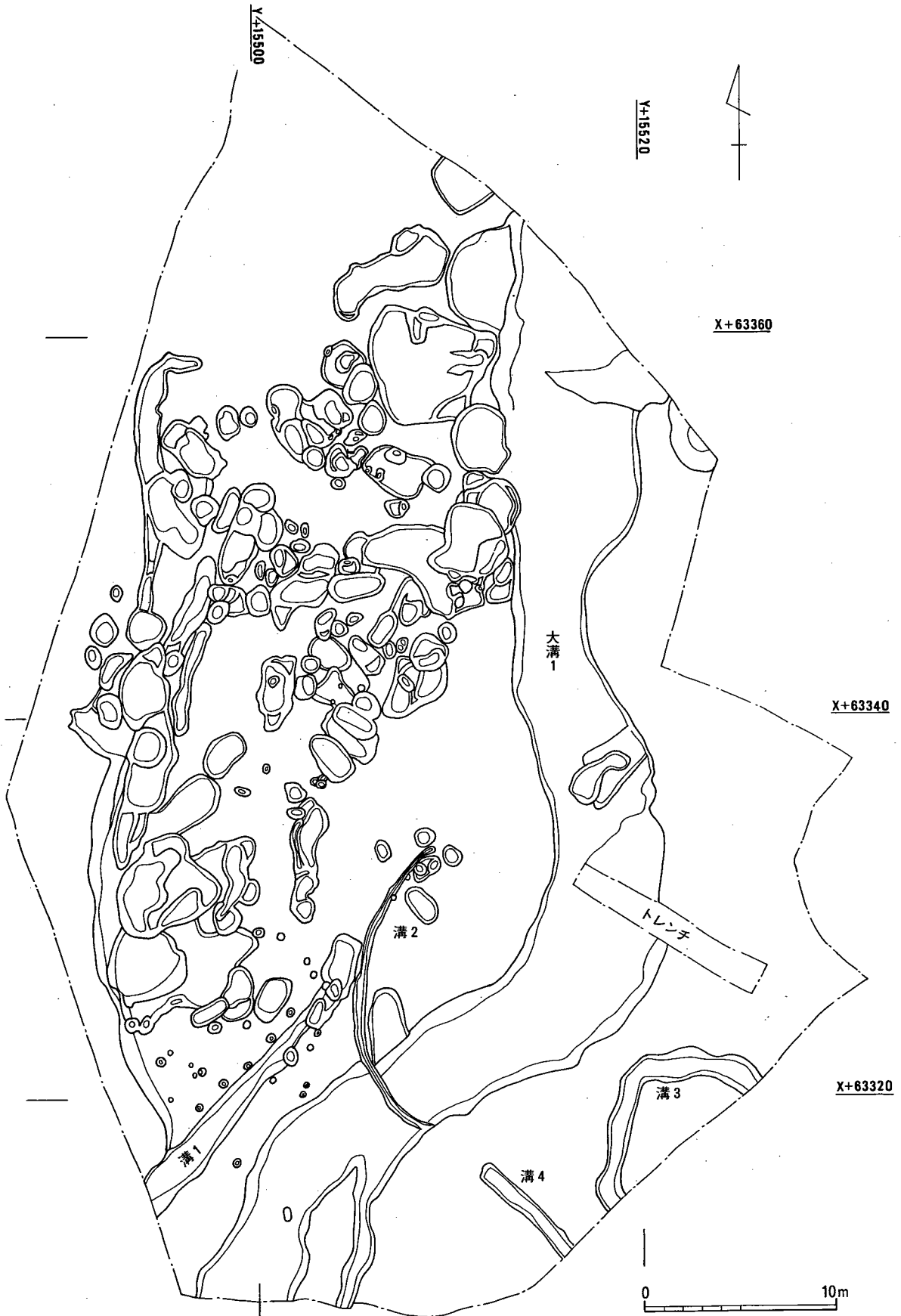
###### 1号溝状遺構（図版1、第5図）

調査区の南側で検出した。1号大溝状遺構の北西側を、これとほぼ平行するように南西から





第4図 宇野代遺跡周辺地形図 (縮尺1/2,000)



第5図 遺構配置図 (縮尺1/300)

北東方向に延びる。南西側は調査区外に延びるが、北東側は2号溝状遺構の脇で途切れる。幅70~200cm、深さ20~50cm。

#### 2号溝状遺構(第5図)

調査区の南寄りの部分にある。弧を描いて曲がっており、南側では1号大溝状遺構と切り合い関係があり、これを切る。幅20~60cm、深さ5~10cm。

#### 3号溝状遺構(第5図)

調査区南東隅にある。溝の両端部は調査区外へと続くが、調査区内だけをみると方形周溝状に角をもって曲がる。幅70~160cm、深さ25~40cm。

#### 4号溝状遺構(第5図)

3号溝状遺構の南西隣にある。6m分を確認した。

#### 出土遺物

##### 縄文土器(図版2、第6図)

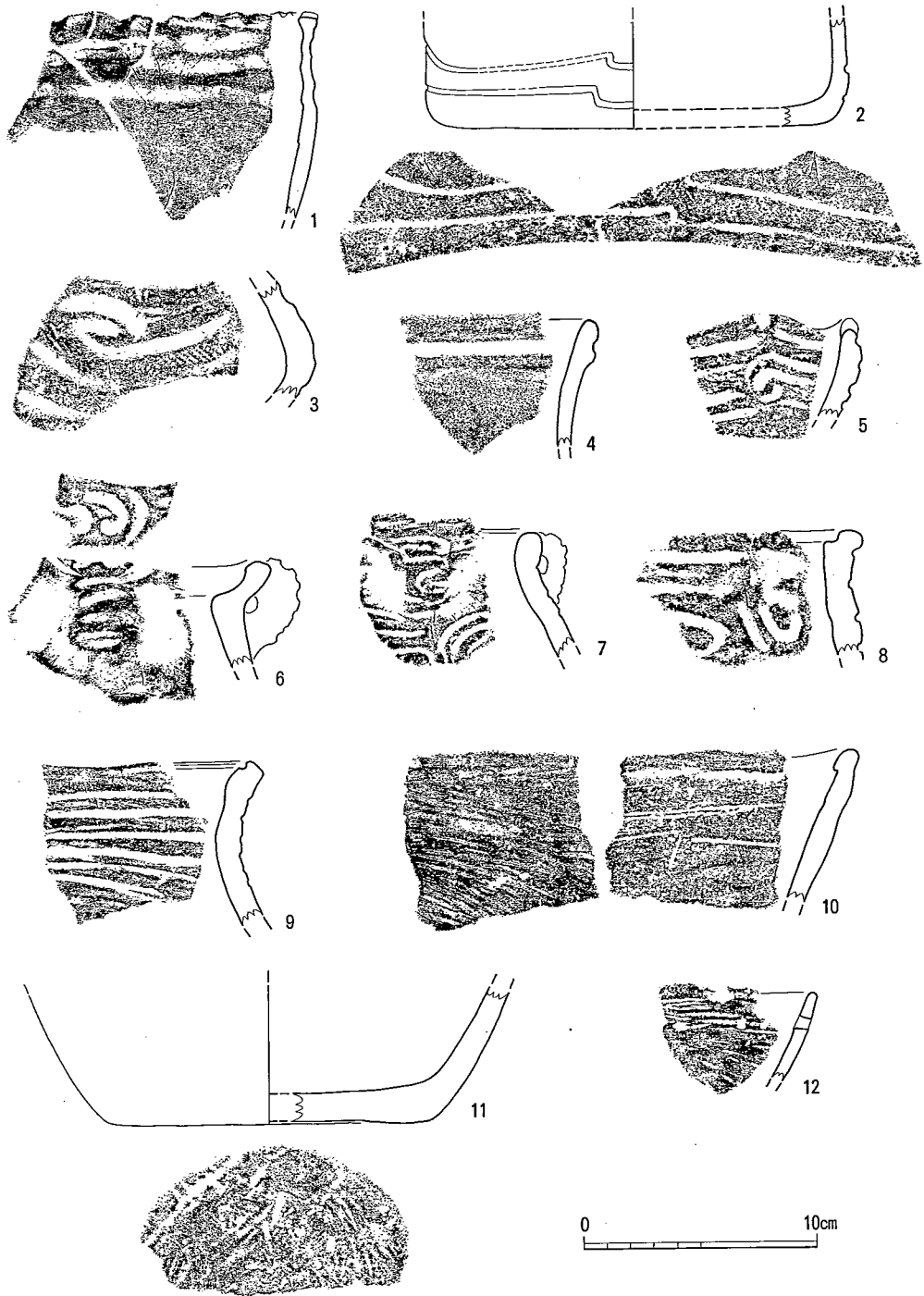
出土した縄文土器は、ほぼ後期の範囲内に納まる。1は阿高式系統の土器で、口唇部に棒状の工具によって刻み目を付けて口縁部を波状にし、口縁部下には指頭による凹線文を施す。2は平底の底部で体部はバケツ形となるものか。沈線によって区画した磨消縄文で器面を飾る。3は肩部破片で、凹線で渦巻文を描く磨消縄文。胎土には角閃石を多く含む。4は口縁部外面を肥厚させ、ここに凹線文を1条めぐらせて2分し、凹線文下には風化のため明瞭ではないが縄文を施す。5~9は口縁部から頸部に沈線文で区画する文様を施す。5は口縁部が内彎して立ち上がり、山形の口縁部の頂部には竹管状の工具を押し付ける。9は頸部が比較的長く、6~8は短く屈曲して開き、7・8は口頸部に環状把手をもつ。10は内外面を二枚貝による条痕によって器面を調整し、内面はさらにナデて仕上げる。11は底部外面に網代痕かと思われる敷物の痕跡が残る。胎土には角閃石を多く含む。12は外面に二枚貝条痕文を施し、内面はナデて仕上げる。口縁部下には焼成前に孔を穿つ。

##### 磨製石斧(図版2、第7図)

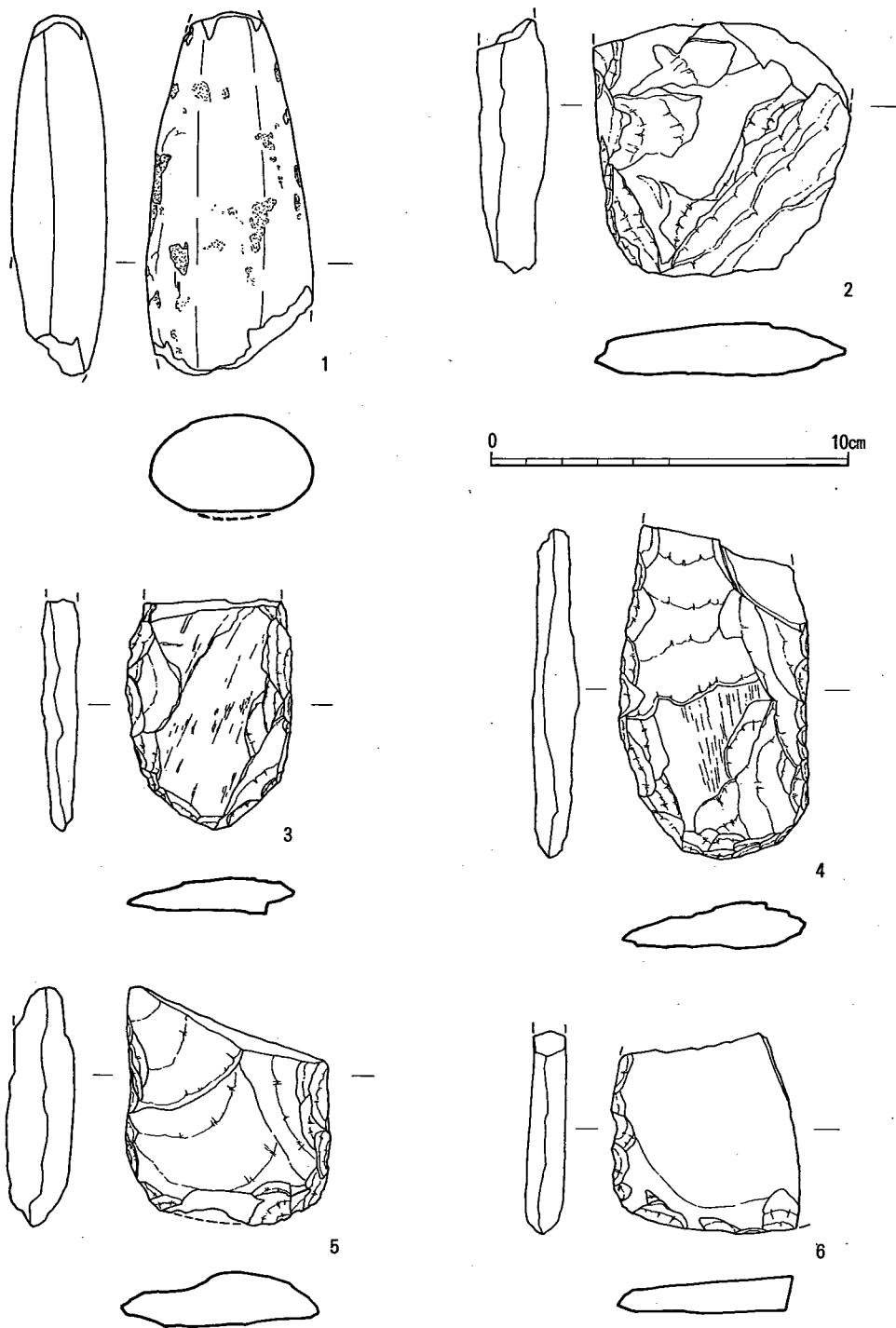
断面楕円形で、刃部を欠くが現状の最大幅4.6cm、厚さ2.6cm。蛇紋岩製。

##### 打製石斧(図版2、第7・8図)

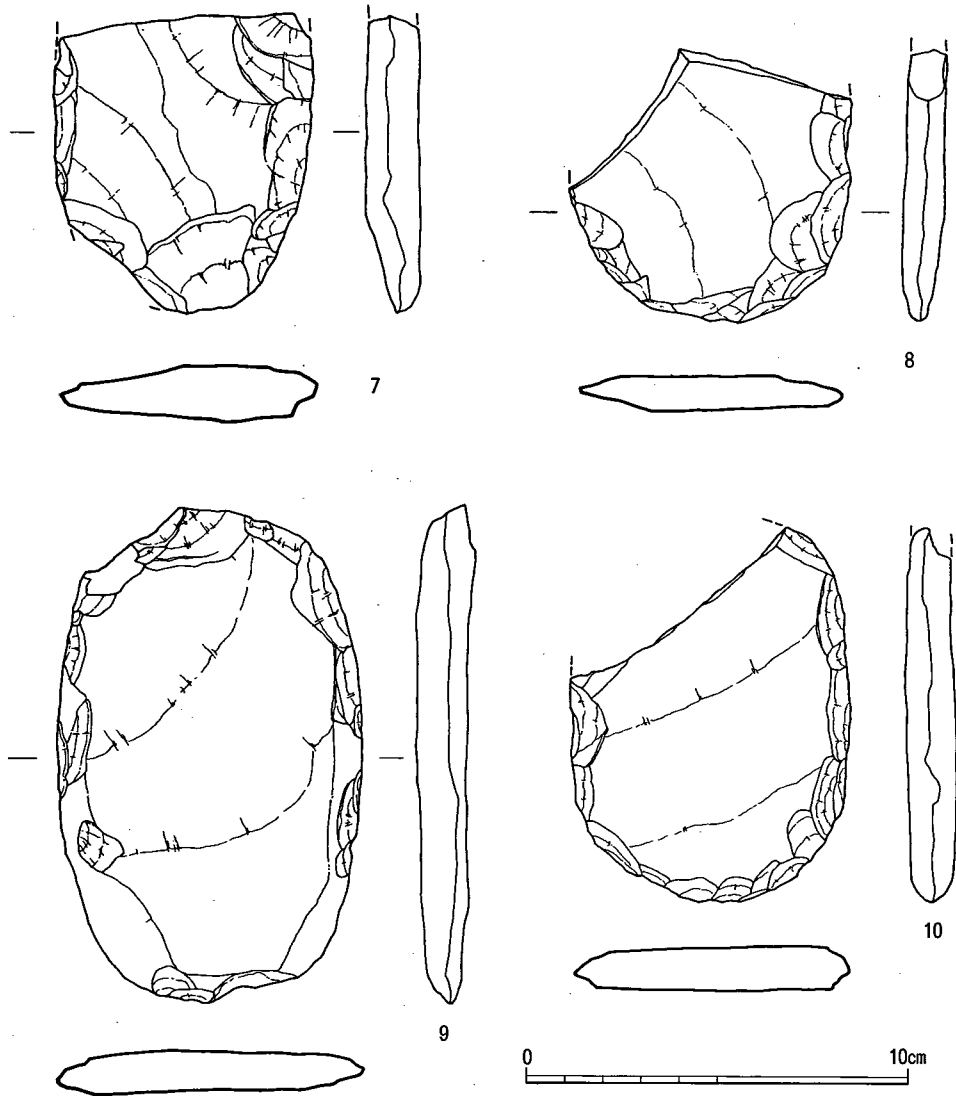
2~4は緑泥片岩、5~10は安山岩系の石材を使用する。2は厚みがあり、主面の一部を磨いている。3~5は細身の短冊形、8~10は幅が広く扁平な小判形のもの。5・6・9は刃部



第6图 出土土器实测图①(縮尺1/3)



第7图 出土石器实测图① (縮尺1/2)



第8図 出土石器実測図②（縮尺1/2）

に磨きの痕跡が残る。

弥生土器（図版2、第9図）

壺(13) 特殊な器形の壺である。わずかに肩の張った胴部に、外反して立ち上がる口頸部をもち、口縁部を欠くが口径は胴部最大径を上回る。胴部外面はヨコナデ調整の後、肩部以下にはヘラ削りを施す。頸部外面は縦方向のハケ目調整、内面は上半部はヨコナデ調整で下半部には粗いハケ目の痕跡が残る。

甕(14~16) 14・15は城ノ越期の分厚く裾の広がった底部で、上げ底になる。16はやや丸味をもった胴部に、底部はほぼ平底であるがわずかに中央部が膨らむ。

#### 須恵器 (図版3・4、第9・11図)

杯 蓋(17~22・45・46) 17は天井部と口縁部の境に段をもち、口唇部はシャープで内面に稜をつくる。復原口径15.1cm、器高4.2cm。18~21は復原口径12.6~14.1cm、器高3.0~3.9cmで、18~20は口縁部が屈曲して下方を向く。22は天井部にツマミが付く。高杯等の蓋であろう。45・46は奈良時代の杯蓋であろう。45は46に比べて器高が高く、口縁部の屈曲が不明瞭である。

杯(23・24・47~49) 23・24とも立ち上がり部は内傾するが、24はより短い。24の底部はヘラ切り未調整。復原受け部径は23が15.0cm、24は14.5cm。47は丸味をもつ体部に外方に開く口縁部が付く。48・49は高台がなく、48は体部が直線的に開き、底部は回転ヘラ切り調整。橙褐色を呈し、体部から底部の外面に火襷の痕跡がある。49は灰白色を呈し、やや軟質である。口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用したものであろう。

高 杯(25・26) 25は杯部破片で、底部から屈曲して立ち上がる体部は直線的に開き、下位に1条の沈線をめぐらす。底部は回転ヘラ削り調整。復原口径14.6cm。26は高杯の脚部であろう。端部は丸く仕上げ、外面を肥厚させる。

椀(27~29) 特殊な器形である。壺の蓋である可能性もあるが、29などは口縁部の締まる器形で、蓋とするにはやや無理があるように思う。ここでは椀として報告する。27の底部は回転ヘラ切りの後静止ヘラ削り調整。28は回転ヘラ削り調整で仕上げる。復原口径8.8~11.2cm、器高5.7~6.4cm。

提 瓶(30) 口頸部と体部の半分程を失っているが、厚味のある器形で、体部全面にカキ目調整を施す。

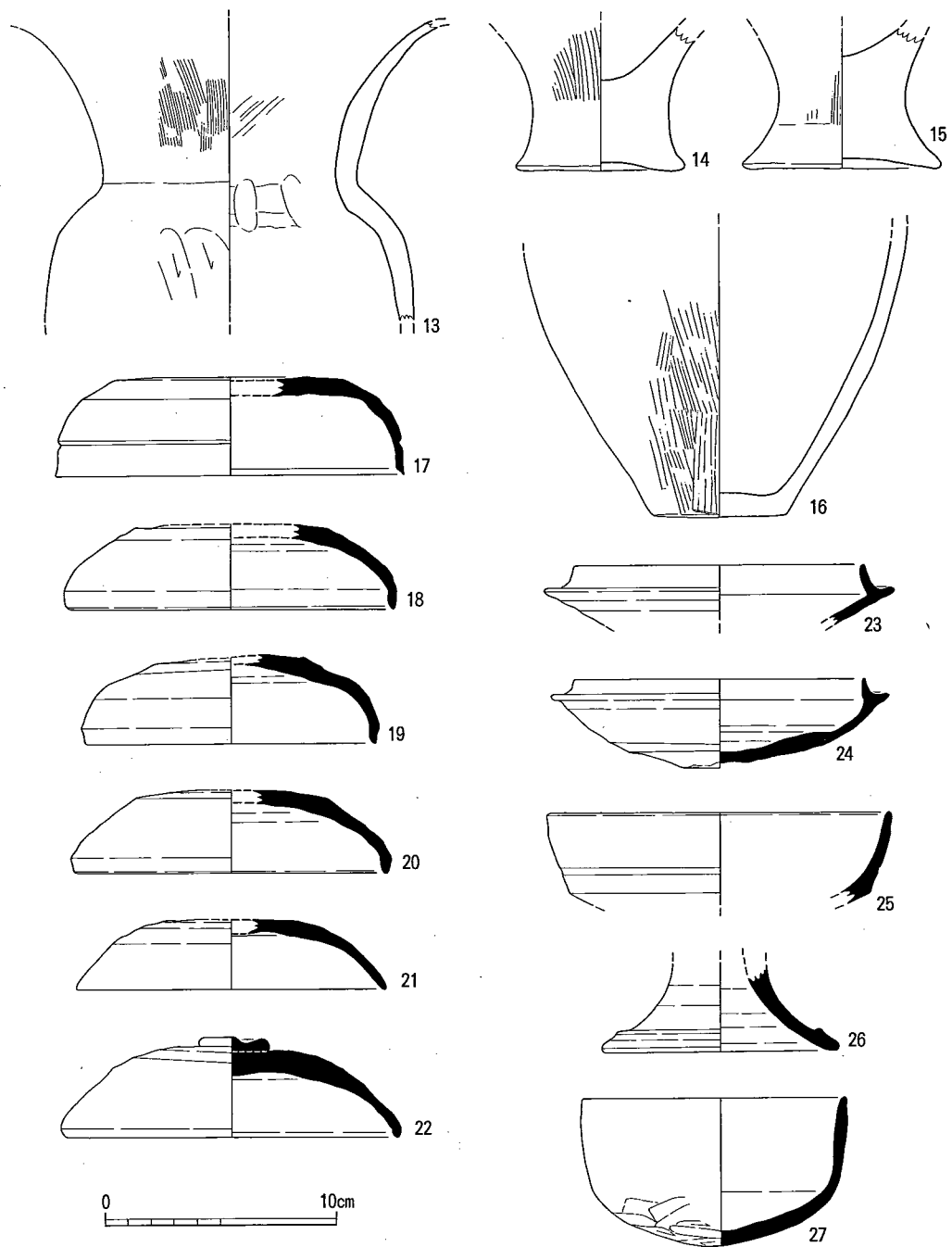
瓶(31~33) 瓶類の口頸部であろう。31・33は口縁部と頸部の境に段を付けて口縁部を上方に立ち上げる。32は外反して開く口頸部。やや軟質で器面が風化している。

甕(34~37) 34・35は頸部が短いタイプ。口縁部を外方に折り曲げ、端部は丸くおさめる。36は口縁部外面を肥厚させて頸部との境をつくる。37は頸部が外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。

#### 土師器 (図版3・4、第10・11図)

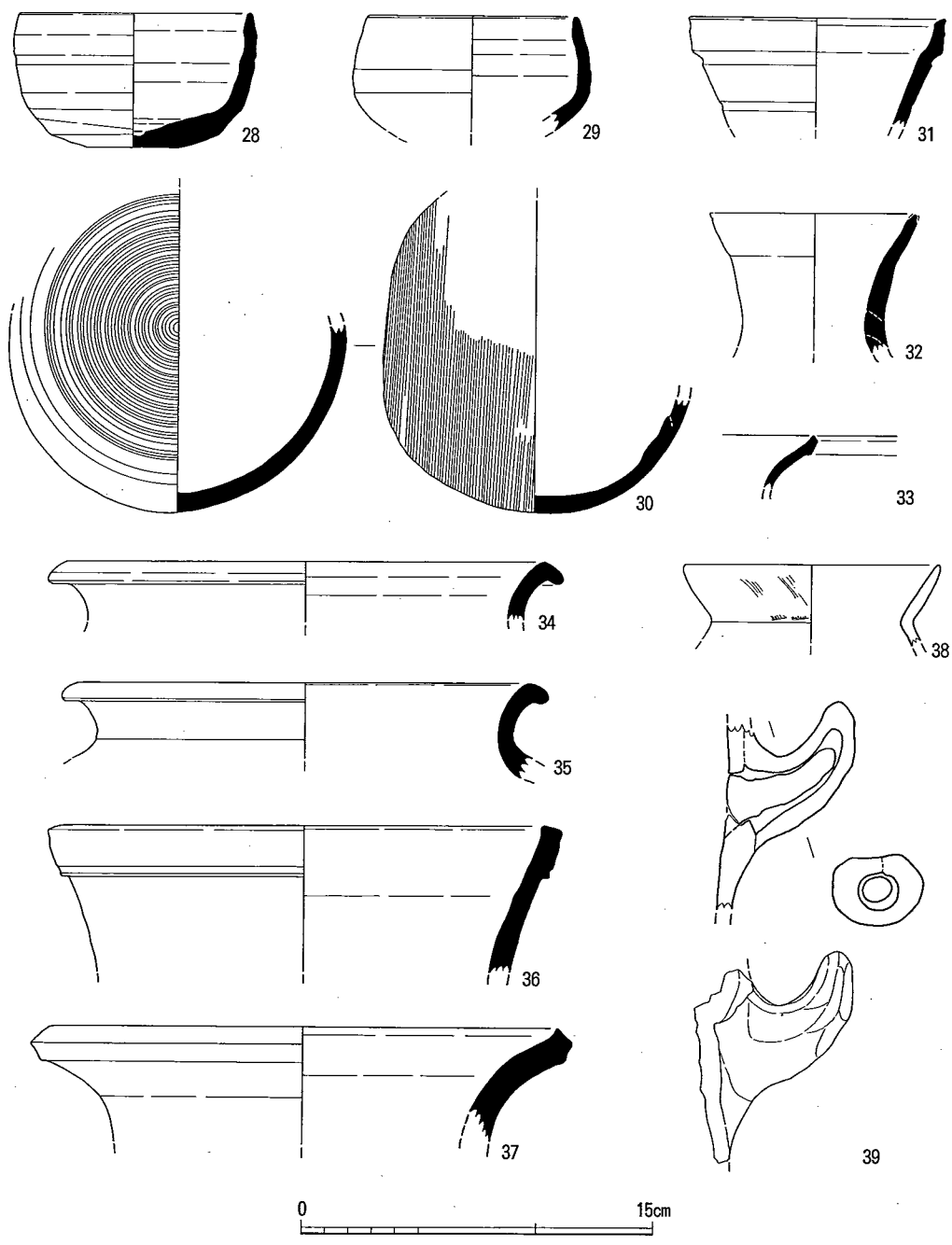
壺(38) 小型丸底壺で、口縁部は直線的に開く。口縁部は外面がハケ目調整の後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整。

甕(40~43) 40は布留系の甕。器壁は薄く、球形の胴部に屈曲して開く口縁部が付く。胴部内面はヘラ削りで仕上げるが、削りの及ばない上位には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。41~43は

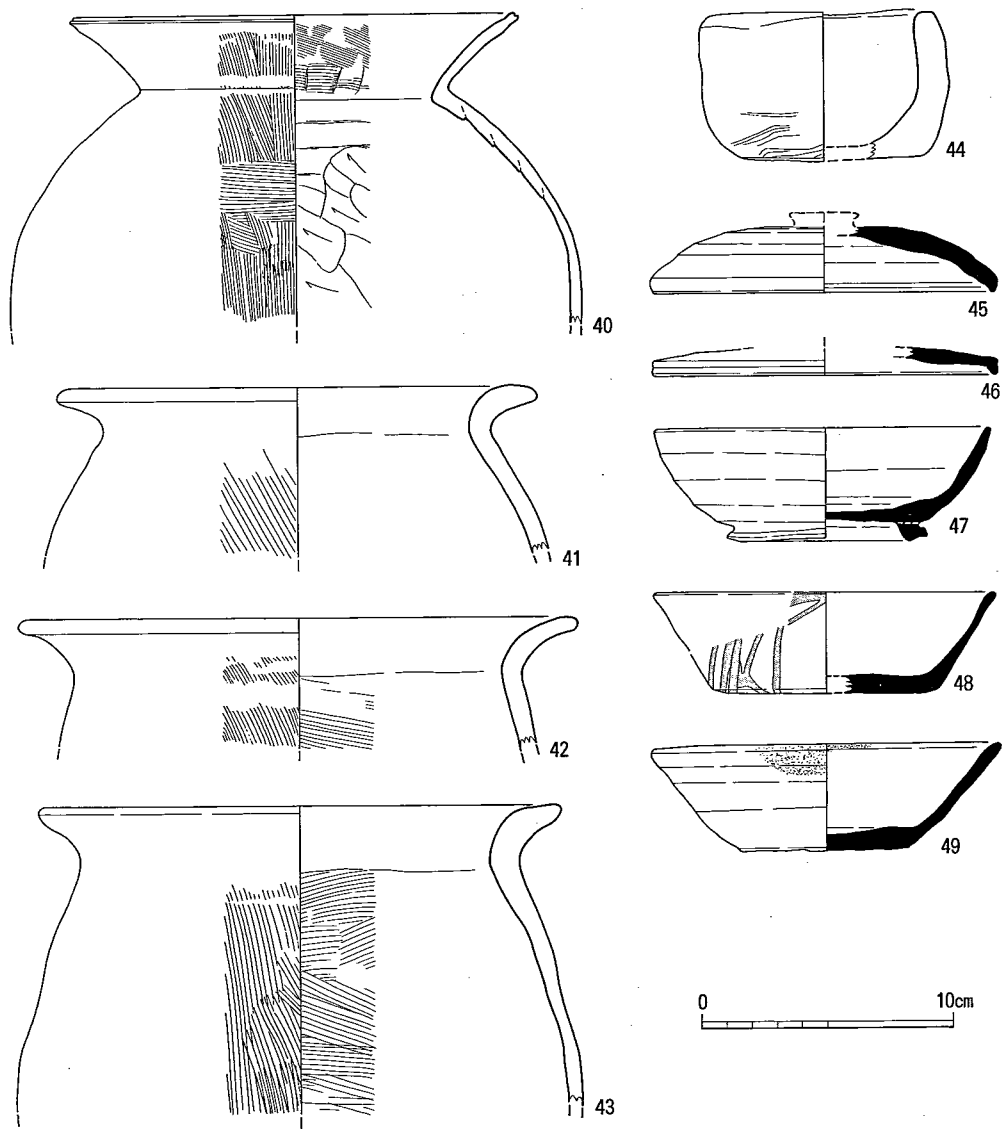


第9図 出土土器実測図② (縮尺1/3)





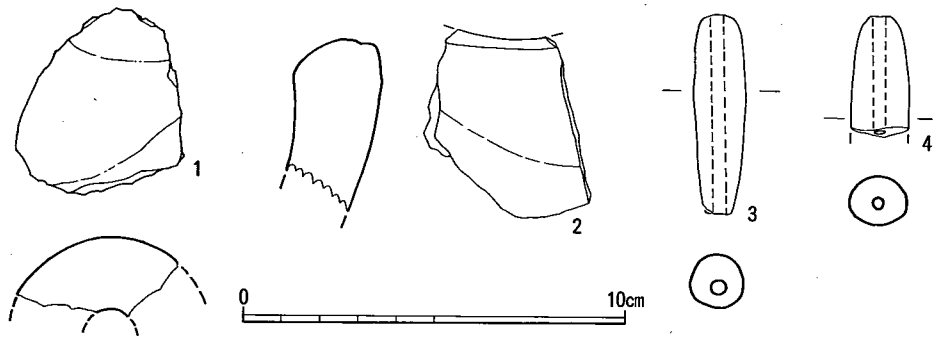
第10図 出土土器実測図③ (縮尺1/3)



第11図 出土土器実測図④ (縮尺1/3)

丸味をもって外反して開く口縁部をもつ。胴部の器面調整は、41の内面が風化のため不明な以外は42・43とも内外面ハケ目調整を施す。

把手(39) 甌・甕等の把手だが、内側に芯のある特殊なもの。剝離した破片を観察すると、胴部に指で穴を開け、内面から芯を差し込んで固定し、外に突き出したこの芯に粘土板を下方から巻き付け、同時に胴部とも接合しながら把手をつくる手順が復原できる。



第12図 出土土製品実測図（縮尺1/2）

椀(44) 器壁が厚く、器形も歪んでいる不細工な作りの椀である。底部は平底で、体部下半と底部外面に不揃いなハケ目状の調整を施す。

土製品（図版4、第12図）

鞆羽口(1) 鞆羽口の先端部付近の破片。胎土は砂粒を多く含み橙色を呈する。先端部に近い部分は熱と炎のために、先端に向かって橙色・黄灰色・暗灰色の順で変色している。

埴 埴(2) 器壁は厚く、外面の下位は1と同様に黄灰色に変色している。内面は黒褐色に変色しているが、カラミの付着は認められない。

土 錘(3・4) 2点出土した。3は両端部をわずかに欠くがほぼ完形。長さ5.2cm、最大径1.4cmで8.9g。

### 3. おわりに

宇野代遺跡2次調査では、縄文時代後期から平安時代までの遺物の出土があった。この場所に何らかの遺構が存在したことは確実と思われ、また縄文時代と古墳時代の遺物の出土は隣接する1次調査との関連が注目される場所であるが、これらに伴う遺構は検出し得なかった。それらは先に述べたとおり友枝川の度重なる氾濫等の活動によって失われたものと考えられる。

# 圖 版

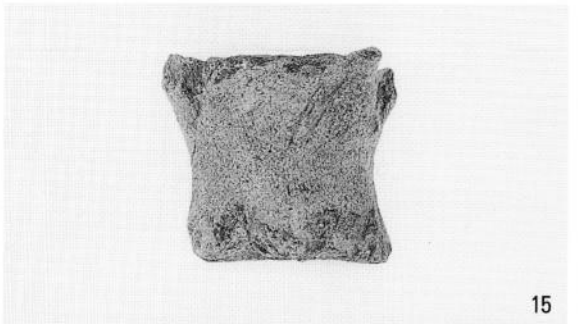
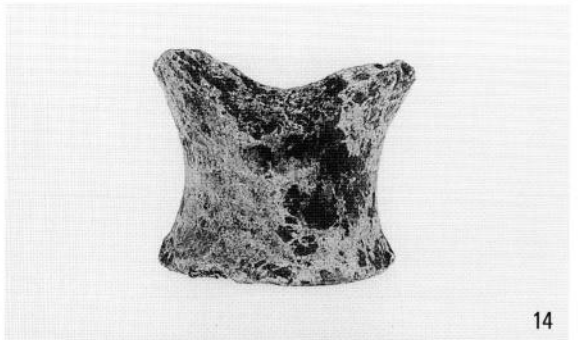
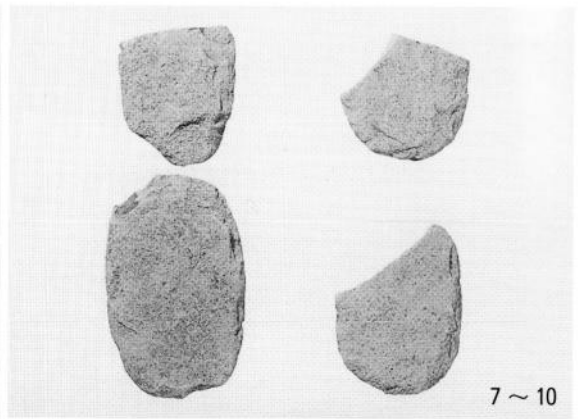
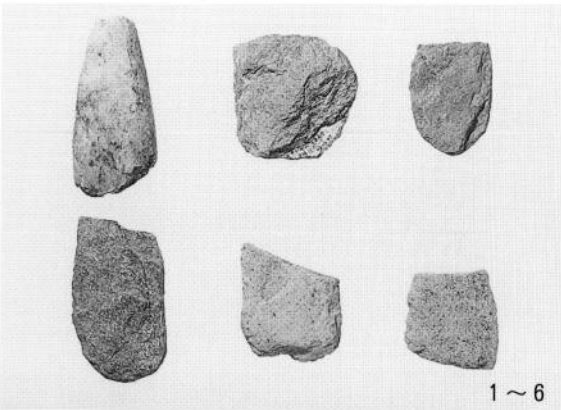
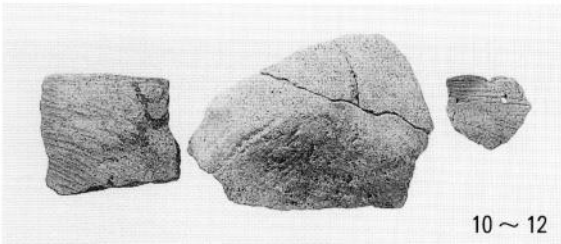
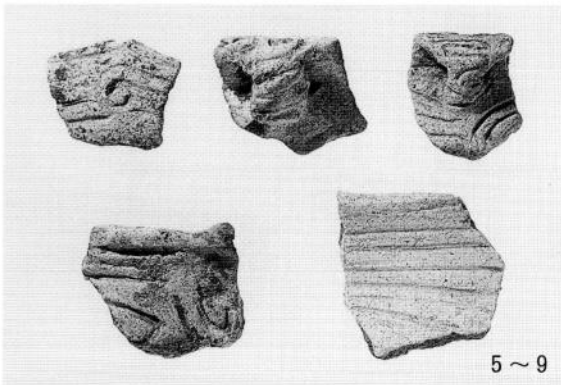
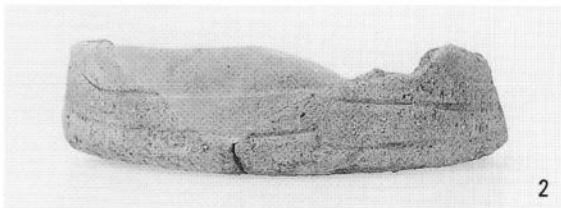
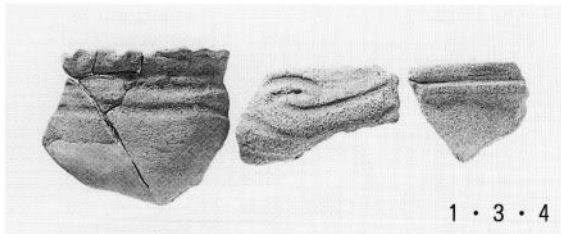




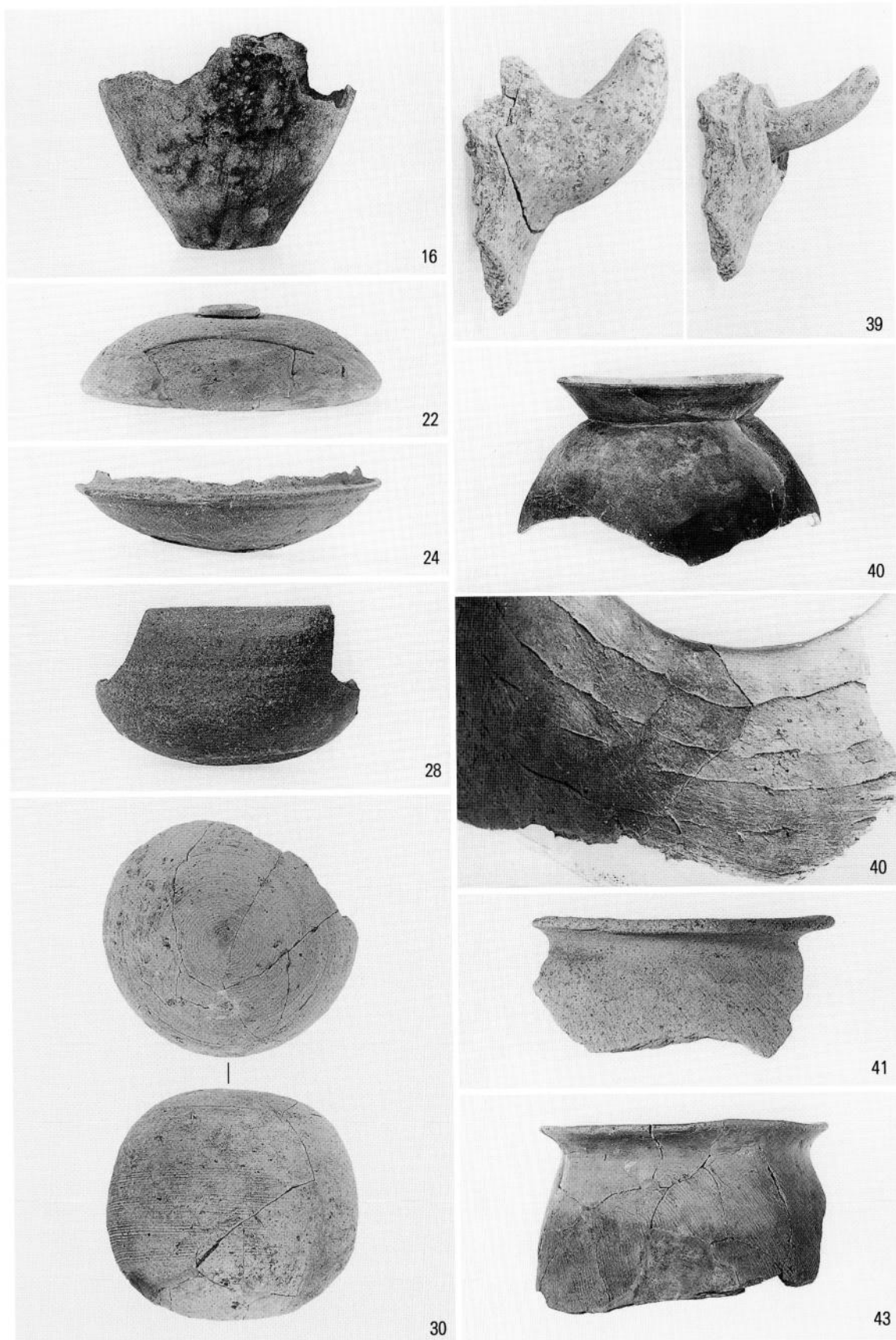
1 宇野代遺跡 2次調査区全景（北西から）



2 1号大溝状遺構・1号溝状遺構（南西から）

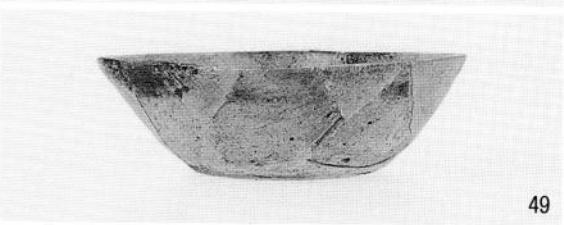
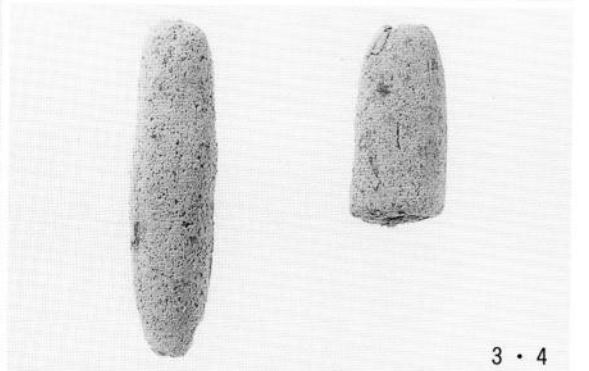
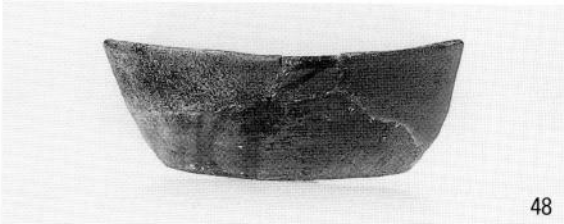
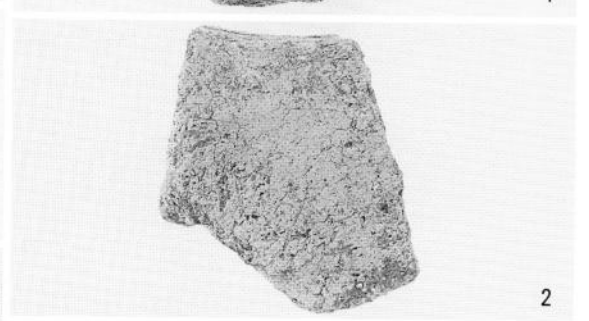
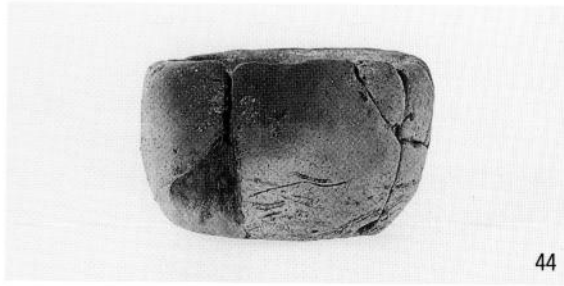


出土遺物 1



出土遺物 2





出土遺物 3

かみ くわ の  
上 桑 野 遺 跡

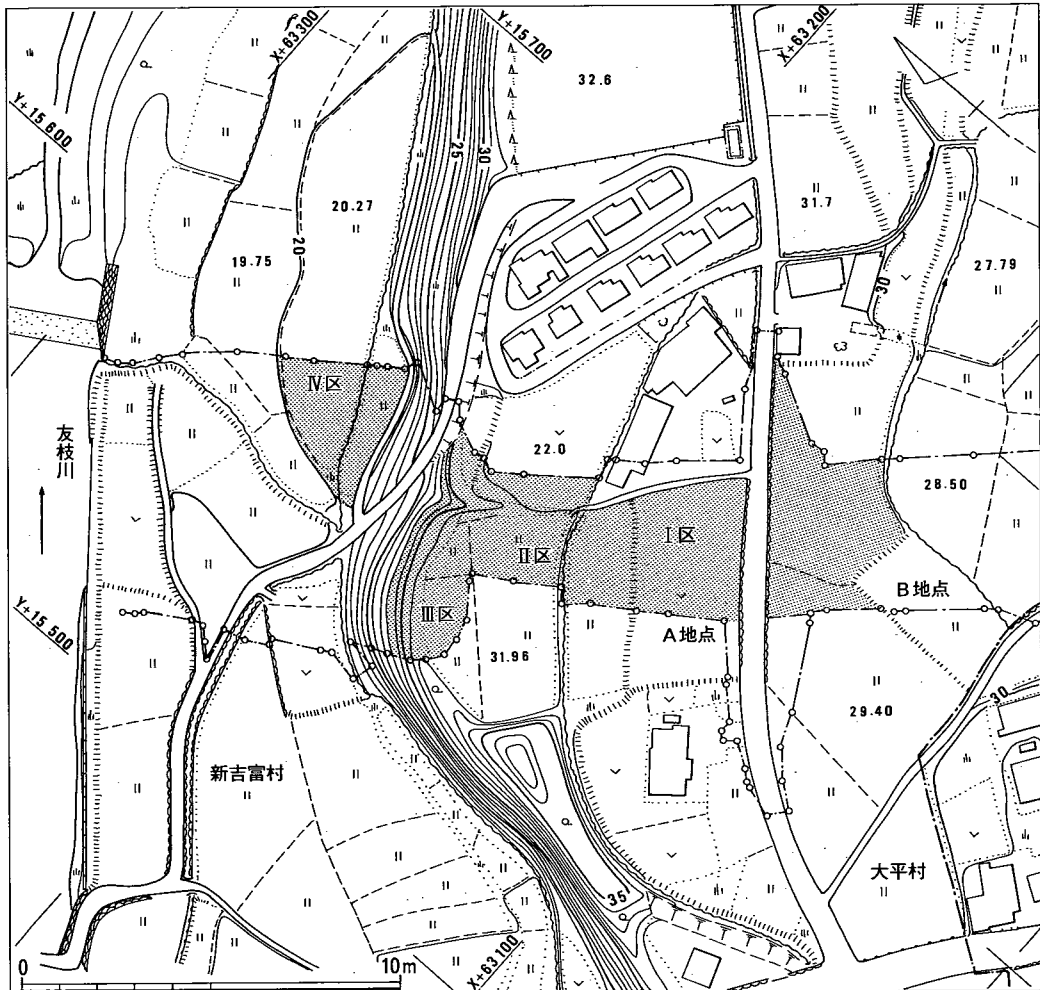


## IV 上桑野遺跡A地点の調査

### 1. はじめに

上桑野遺跡A地点(ⅡA)の調査区は、築上郡新吉富村大字垂水861・876-1・877-1・879-1・880・881-1番地にあり、地名をとって上桑野遺跡と呼称した。遺跡東南側のB地点の調査区とは県道野地塔田線から分かれ友枝川沿いに走る村道によって分断される。

山国川と友枝川に挟まれた大平村梶原地区から下唐原・桑野地区、新吉富村上桑野地区にか



第13図 上桑野遺跡周辺地形図 (縮尺1/2,000)



第14図 I区遺構配置図(縮尺1/200)

けて広大な沖積地と比高20m前後の河岸段丘を発達させる。上桑野遺跡は友枝川右岸の標高約30mの河岸段丘上に位置し、北西側を流れる友枝川との比高は約20mほどである。対岸の段丘上には、6世紀後半代から造営された古墳群を中心とした宇野代遺跡と8世紀代の掘立柱建物群が確認された竹ノ下遺跡がある。南東側には小河川の野地川が流れる小谷があり、大平村側の対岸には弥生中期前半～後半の集落地である桑野遺跡がある。

調査区は水田の開墾のため大きく3段に削平され、さらに中央部を友枝川におよぶ里道がS字状に造られ大きく破壊を受けている。このため遺構の残存する部分は限られていた。周辺部も民家や村営住宅が建設され、旧地形は大きく改変されている。

発掘調査は平成4年4月21日から開始し、6月19日に器材を撤収してすべての作業を終了した。調査面積は約3,000㎡である。

## 2. 遺構と遺物

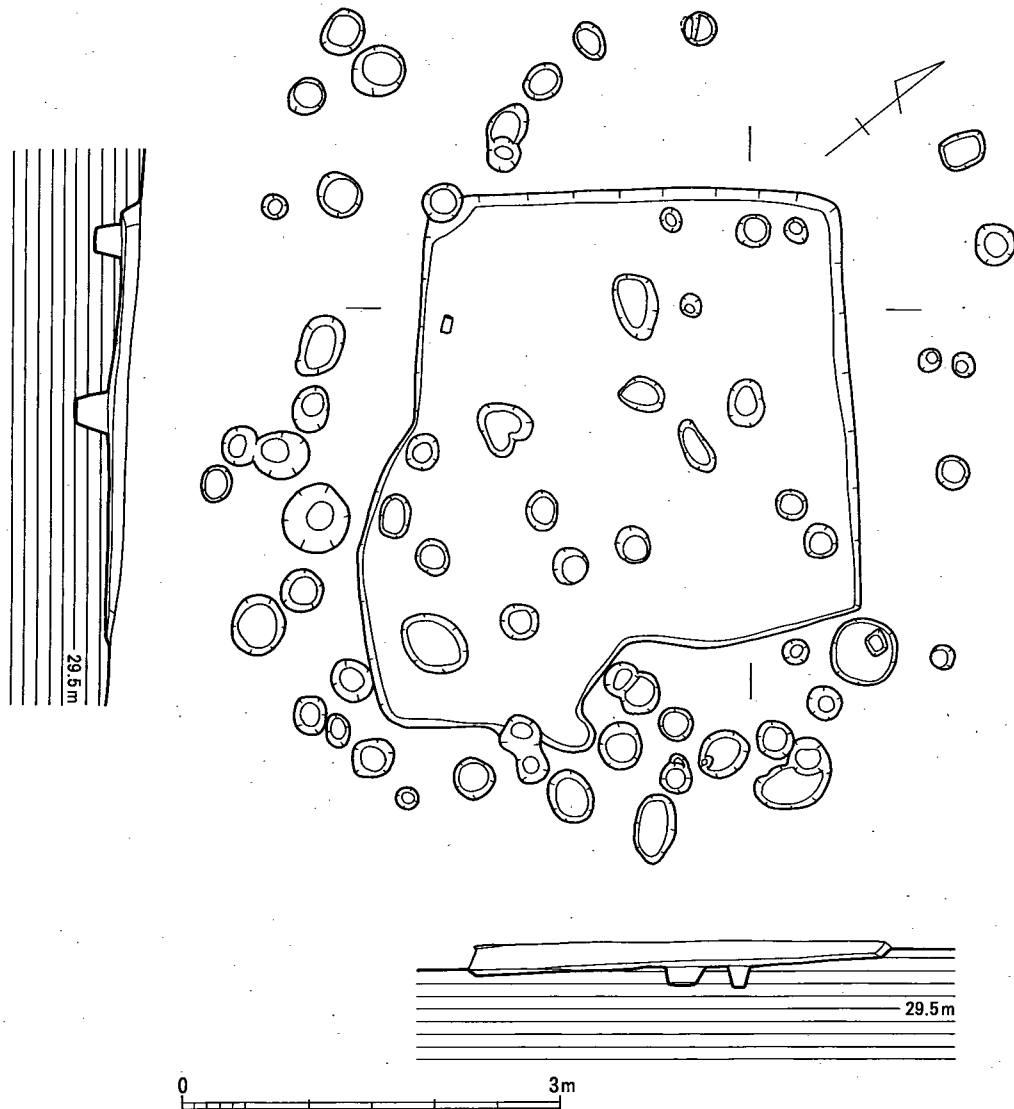
遺構面上部を著しく削平され、遺構の残存状況は悪く、分布する範囲も限られ、検出された遺構遺物は試掘時の予想に反して低いものであった。以下順に説明をおこなっていくが、調査区は段丘上が三段、西側の急斜面下に一段と分けられるため遺跡南東側からそれぞれ、I区・

Ⅱ区・Ⅲ区、Ⅳ区として説明する。(付図1)

### I区の調査(図版4、第14図)

調査区の南東部に位置する。調査面積は約900㎡でこのうち遺構の分布が確認できたのは約300㎡ほどであった。検出した遺構は住居跡と考えられるもの3軒と小ピット群である。

#### 1) 住居跡



第15図 1号住居跡実測図(縮尺1/60)

### 1号住居跡（図版4-2・6-1，第15図）

I区の南西端で確認したもので、北西壁と北東壁は長さ約3.3mを測る。南西壁は南西のコーナーから1.8mで外側へふくらむ。南東壁は不整形で壁もほとんど残っていない。壁高はもつとも残りのいい北東のコーナー付近で約15cmを測る。住居跡として調査したが規模も小さく、形態も不整形で、支柱穴も明確ではなく住居跡とする要素は少ない。遺物は北西壁側の床面から本遺跡で唯一の完形品であるコップ形土器が出土した。

#### 出土遺物（巻頭図版2・図版11-1，第16図）

コップ形土器(1) 口径7.1~7.6cm、底径5.6cm、器高11.3cmを測るコップ形土器の完成品である。口縁端部は丸くつくられる。体部は厚手造りである。外面は磨滅するが縦方向のミガキが観察できる。口縁部内面は横方向のミガキ。底部外面はナデ調整される。体部外面と内面中位にかけて丹塗りが残る。胎土には角閃石、微砂粒を多量に含む。内面は赤色~黄橙色、外面は赤色を呈し、焼成は良好である。重さは308.9gある。

甕(2) 「く」字状の口縁部片である。口縁部はナデ調整。細砂粒を多く含み、茶褐色に焼成される。

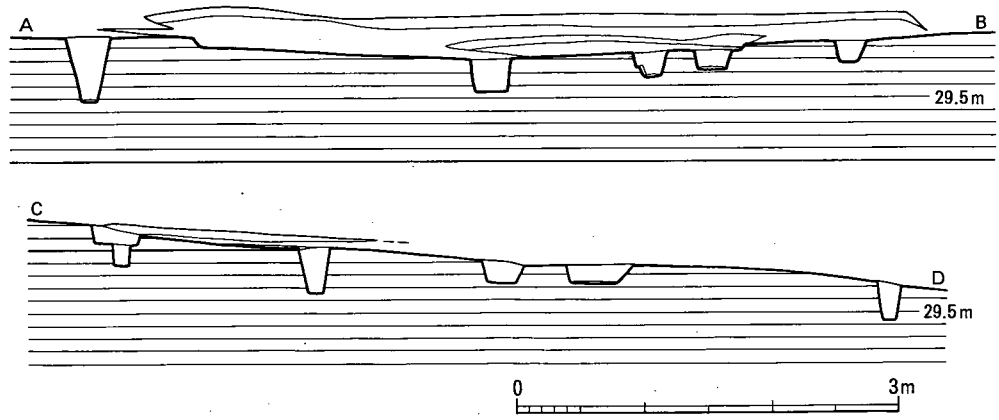
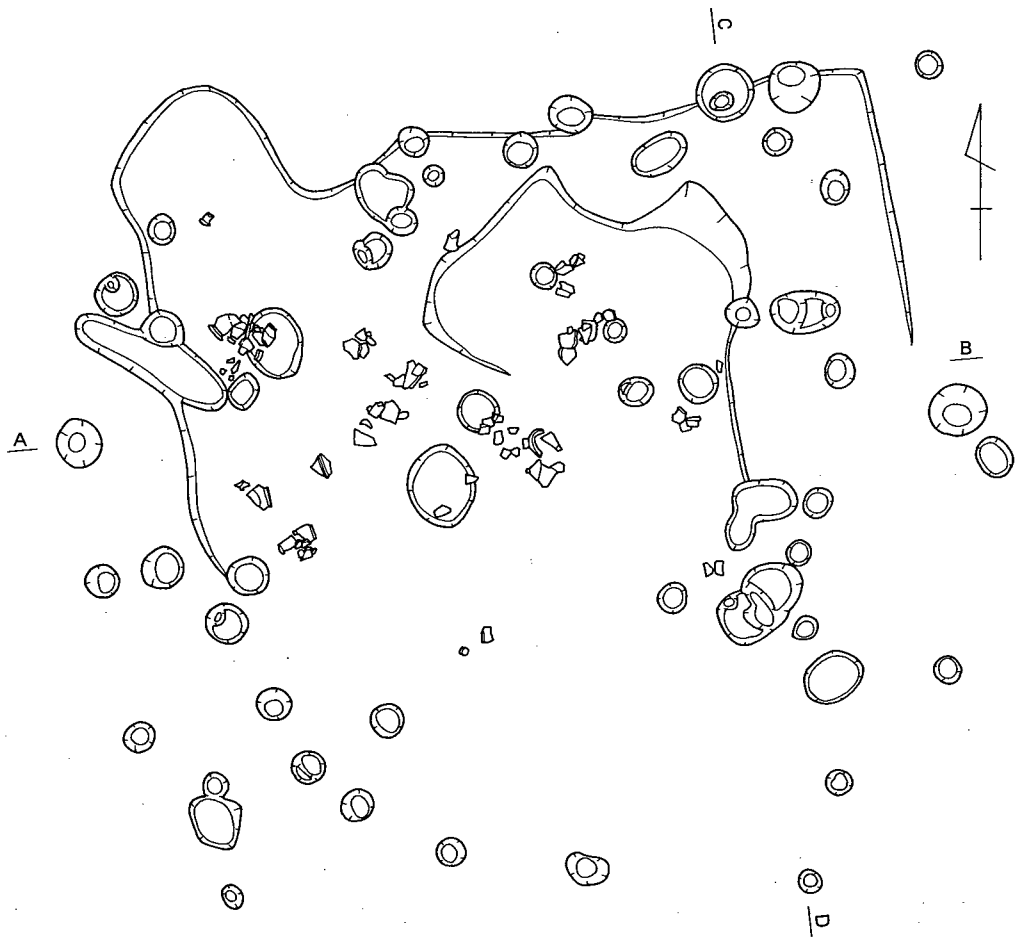
### 2号住居跡（図版5-1・6-2，第16図）

I区南東端中央部で検出した。不整形の北壁と東・西壁を2~3mほど確認しただけで、炉跡、支柱穴等は不明確である。ただ土器が東西5.5m、南北4.0mほどの範囲ではほぼ同レベルで出土したため、方形の住居跡と判断して調査した。

#### 出土遺物（図版11・12・13，第17・18・19図）

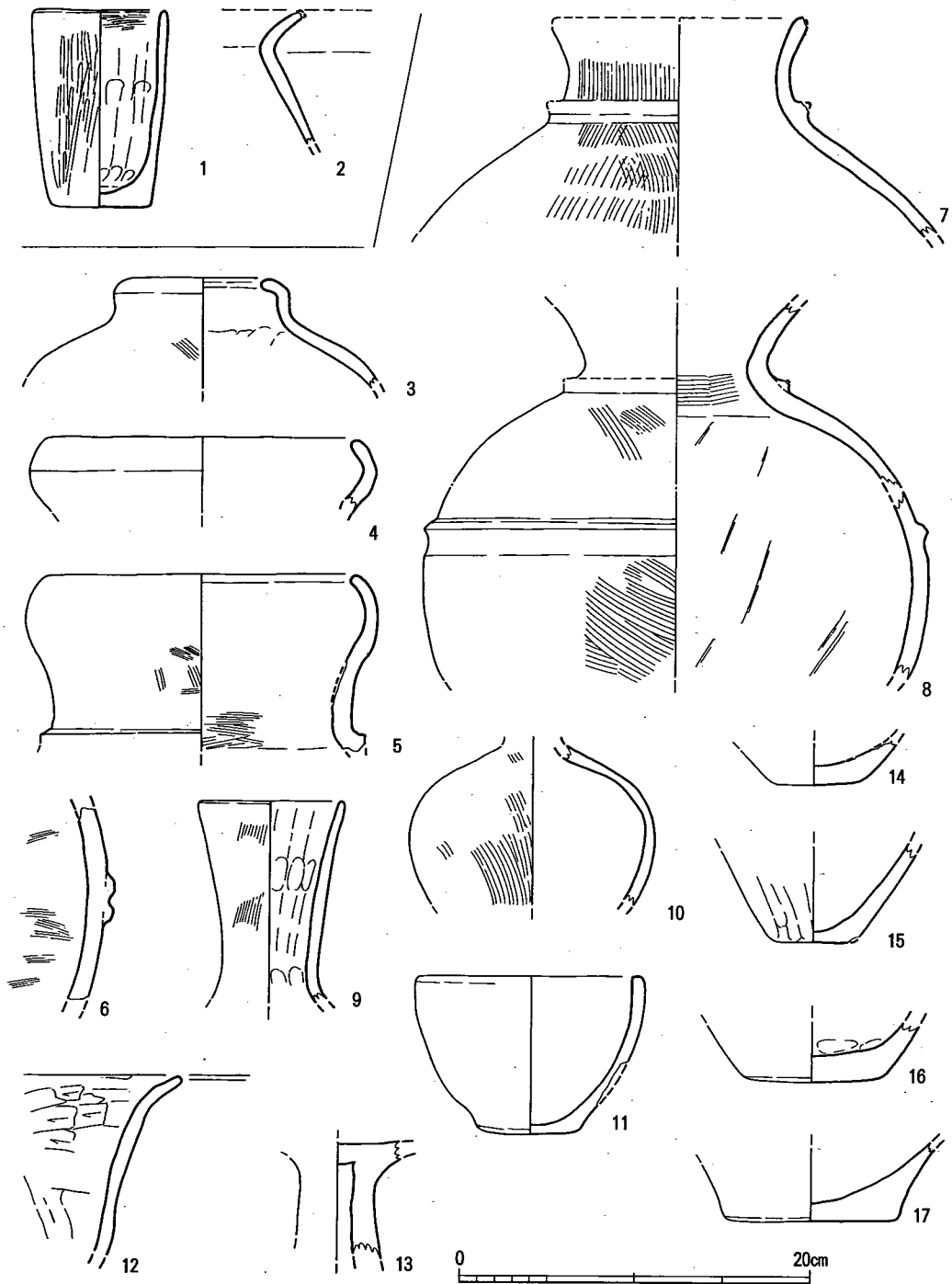
袋状口縁壺(3~6) 3の口縁部は袋状というより直立する口縁部を内側に屈曲させた特異な形態を呈する。復原口径は内径で7.0cmを測る。磨滅のため調整は不明瞭。胎土には、赤褐色粒、砂粒を多く含み、黄橙色に焼成される。3は口縁部片で復原口径17.8cm。細砂、角閃石を多く含み、黄橙色に焼成される。5は残存高10.0cm、復原口径18cmを測る口縁部片である。器壁は剥落や磨滅が著しく調整は不明瞭であるが内外面の一部にハケ目が残る。細砂、粗砂を多く含み、橙褐色に焼成される。6は胎土、色調から5と同一個体と考える。

壺(7~10) 7・8は広口壺である。7は口縁部から肩部にはかけての破片で、短く開く口縁部をもつ。端部は欠損する。頸部は凸帯を施す。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケのちヨコナデ。頸部には縦方向の粗いハケ目が残る。肩部外面は縦方向の粗いハケ目の後部分的にナデられる。胎土には砂粒、角閃石を多く含み、黄茶褐色に焼成される。8は7よりも頸部の屈曲がきつく口縁部も大きく開く。内面頸部に横方向のハケ目、胴部内面はナデ調整されるが一部に工具痕が認められる。胎土には砂粒、角閃石、赤褐色粒を多く含み、橙褐色に焼成される。9は長頸壺である。頸部でややすぼまり、口縁部にかけて開く。口径8.4cm。内面はナデ調整、

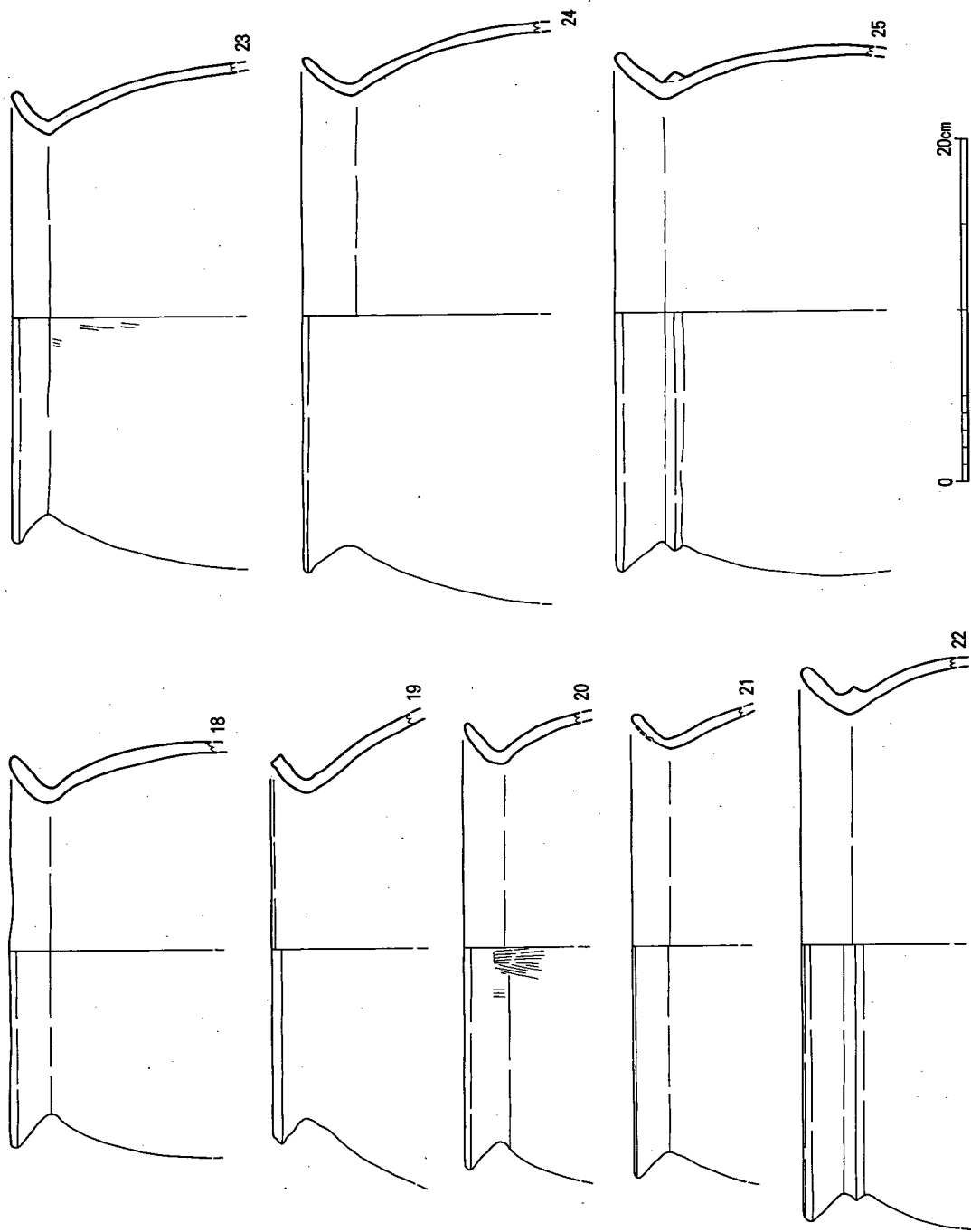


第16図 2号住居跡実測図 (縮尺1/60)





第17图 1·2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

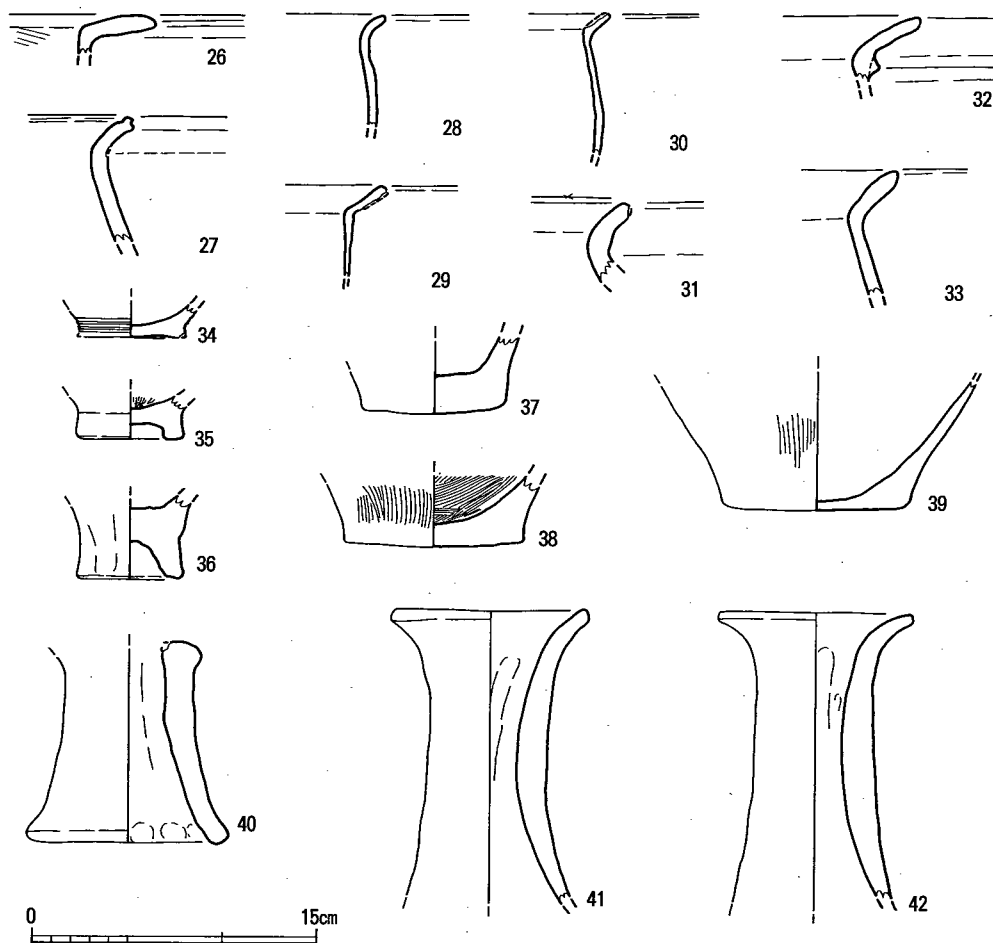


第18图 2号住居跡出土土器実測図(1/4)

一部に指圧痕が残る。外面は磨滅するが縦方向のハケ目が部分的に残る。胎土には砂粒を多く含み、黄茶褐色に焼成される。10は球形の胴部破片で口縁部、底部を欠損するため器形は不明である。内面ナデ、外面にはハケ目がわずかに残る。赤褐色粒、角閃石、砂粒を多く含み、灰黄褐色に焼成される。

椀(11) 復原器高9.0cm、口径13.0cm、底径5.6cmを測る。底部外面は平底を呈し、胴部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がり、口縁端部は平坦面をもつ。調整は磨滅のため不明。胎土には砂粒を多く含み、内面暗灰色、外面灰黄褐色に焼成される。

鉢?(12) 鉢形土器の口縁部片と考えられるが器形は不明である。口縁部内面は工具による横方向のナデ、外面は磨滅のため不明瞭。胎土には細砂粒を多く含み、橙褐色に焼成される。



第19図 2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

内外面ともに媒が付着している。

高 杯(13) 高杯脚部片である。内面ナデ調整。外面は磨滅のための不明瞭である。

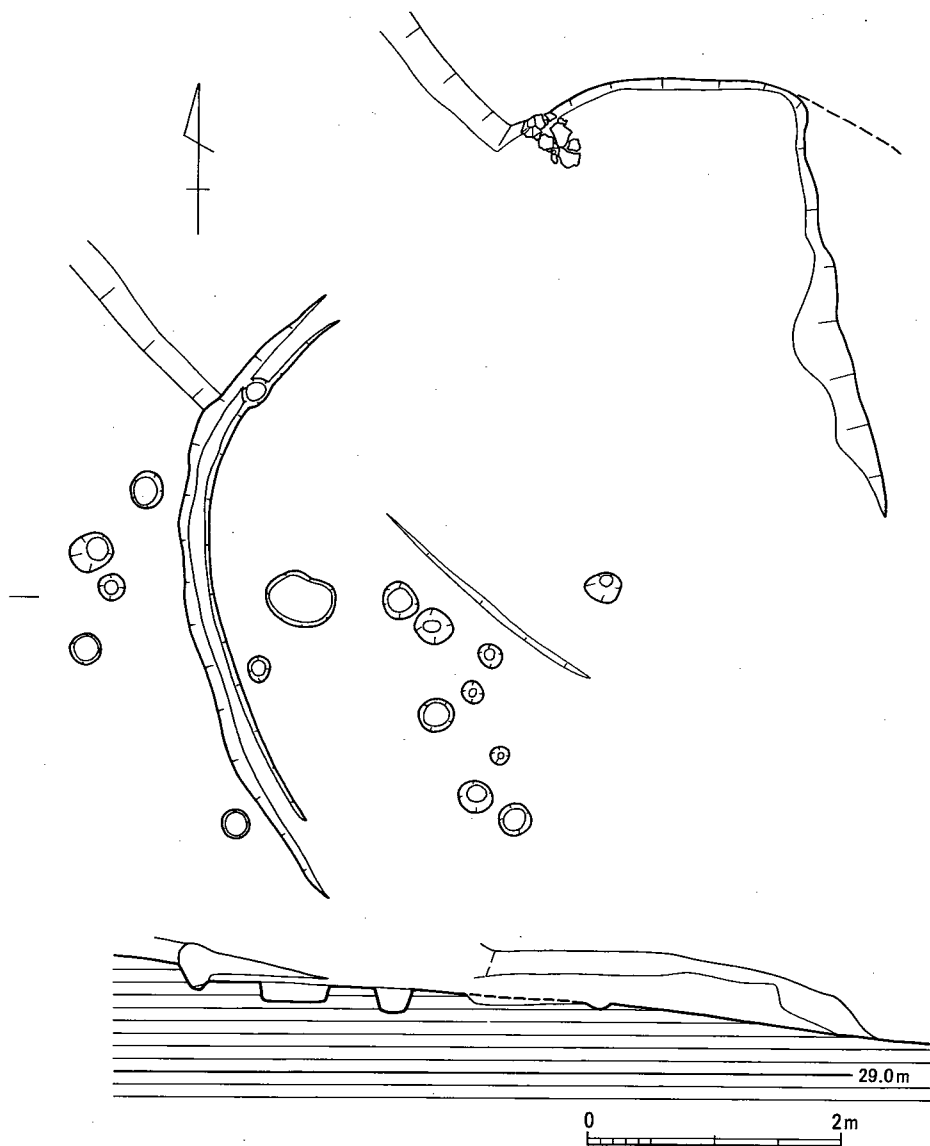
底 部(14~17) 14は底径5.0cm。磨滅のため調整不明。15は内面ナデ、外面は工具によるナデ、底部外面はナデ調整される。外面全体に黒色物付着。復原底径4.5cm。16は内面底部に指頭圧痕が残る。底部径7.8cm。17は底径9.6cmを測る。磨滅のため調整不明。

甕(18~33) 26のほかは「く」字状の口縁部をもつ甕の破片である。18は復原口径22.8cm。内外面ともにナデ調整。外面胴部に媒が付着している。19は復原口径22.6cm。口縁部はヨコナデ調整され、内外面はわずかに窪ませ、端部は平坦である。胎土には粗砂粒、角閃石を多量に含み、茶褐色に焼成される。20は復原口径26.0cm。口縁部はヨコナデ、屈曲部以下の外面にハケ目が残る。胴部内面はナデられる。細砂、角閃石を多量に含み、橙褐色に焼成される。21は復原口径27.0cm。内外面ともに磨滅し調整不明。22は屈曲部に凸帯を施す。口縁端部は丸くつくられる。内外面に黒斑がみられる。23は他に比して屈曲が鋭く内面に稜をもつ。器壁は磨滅のため調整不明瞭。砂粒、角閃石、赤褐色粒を多く含み、灰茶色に焼成される。24は復原口径30.0cm。25は復原口径30.2cm。屈曲部に凸帯を施す。磨滅のため調整は不明瞭。内外面に媒が付着している。26は逆「L」字状の口縁部片。ヨコナデ調整される。27は口縁端部と内面に沈線状の窪みをもつ。28は27と同様の口縁部で屈曲は緩やかである。29の口縁部は屈曲の後内彎気味につくられ、端部は平坦面をもつ。31は短く外反する口縁部で、外面はヨコナデ、内面はナデられる。細砂粒を多量、石英、角閃石、赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。32は口縁下に三角凸帯を施す。器壁は磨滅する。

底 部(34~39) 34は底部側面に3条の沈線を施す。底端部は剥離したようにも見えるが不明。内面はナデ調整。砂粒を多量、角閃石、赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。復原底径5.6cmを測る。35・36は甕の高台状の脚台部と考えられる。35は外面側面はヨコナデ、底部外面はナデ調整。内面はミガキ。復原底径5.5cmを測る。36は脚端部がヨコナデ、他はナデ調整。細砂粒を多量、粗砂、角閃石を若干含み、黄橙色に焼成される。底径5.6cm。37の外面は二次加熱のため調整不明瞭、内面はナデ調整。底径7.2cm測る。38は底部外面は粗いハケ目、底部側面はヨコナデ調整。砂粒を多量に含み、黄褐色に焼成される。底径9.4cmを測る。39は復原底径9.8cmを測る。器壁は磨滅、剥離のため調整不明瞭。外面の一部にハケ目が残る。胎土には白砂粒、角閃石を多量、赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成される。

器 台(40~42) 40は復原脚部径10.6cm。内外面ともに磨滅が著しく調整不明。胎土には砂粒、角閃石を多量に含み、橙褐色に焼成される。41・42は筒状器台で受部は大きく外反する。ともに外面の調整は不明。内面はナデられる。

### 3号住居跡(図版5-2、第20図)

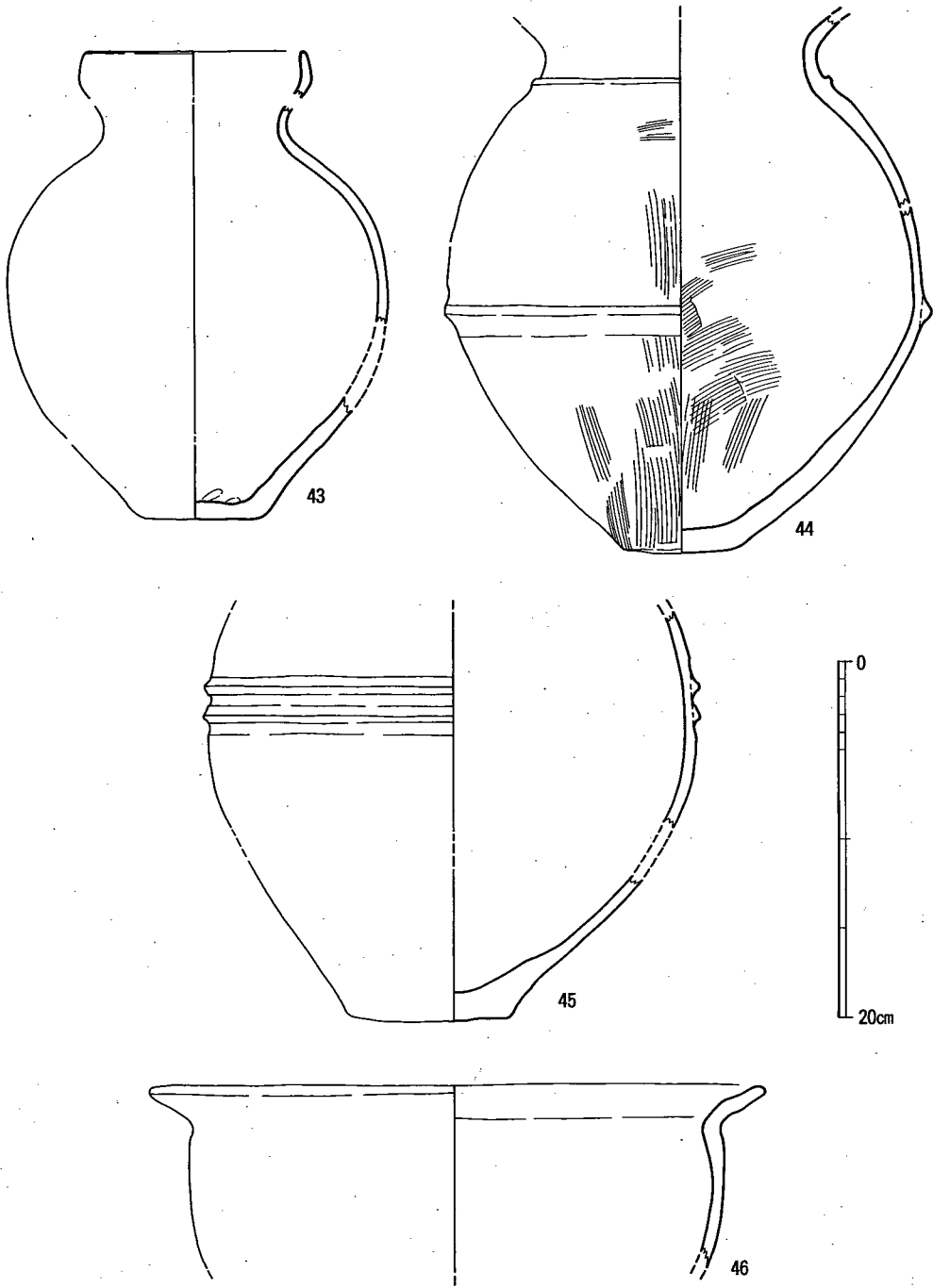


第20図 3号住居跡実測図 (縮尺1/60)

I区調査区の南東側から検出した住居跡である。西側から北側にかけて隅丸方形に近い弧状の壁体を確認した。しかし、北側を試掘時のトレンチで、東側を含む南半部は削平され、炉跡や支柱穴等は不明である。西側の壁下には溝が確認できた。遺物は北東部の壁下と埋土から壺形土器が出土した。

出土遺物 (図版13・14、第21図)

壺(43~45) 43は埋土中から出土した3片を接合し、器高25.5cm、口径12.0cm、最大胴径21.0cm、底径7.5cmに復原した。袋状口縁をもち、胴部は卵形を呈する。口縁部はヨコナデ、胴部



第21図 3号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

内外面は磨滅のため調整不明瞭。底部内面はナデられる。胴部外面は二次加熱を受けている。媒の付着も認められる。胎土には細砂粒、角閃石、石英を多く含み、黄橙色～赤褐色に焼成される。44は北壁下から出土した壺で口縁部を欠損する。頸部径14.8cm、最大胴径27.2cm、底径7.4cmを測る。頸部と最大胴部直上に凸帯を施す。内外面ともに磨滅し調整は不明瞭であるがハケ目が部分的に観察できる。凸帯はヨコナデ、底部内外面はナデ調整される。胎土には細砂粒、角閃石を多く含み、橙褐色に焼成される。内外面に媒が付着している。45は埋土中から出土したもので底部片と胴部片が胎土・色調から同一個体と考えられるため図上で復原した。胴部上位と口縁部を欠損する。最大胴径27.0cm、底径9.2cmを測る。胴部中位に2条の凸帯を巡らす。内外面ともに磨滅のため調整不明瞭。胴部下位の外面は二次加熱を受け赤変している。一部媒の付着がみられる。胎土には細砂、粗砂を多く、角閃石を含み、橙褐色～黒褐色に焼成される。

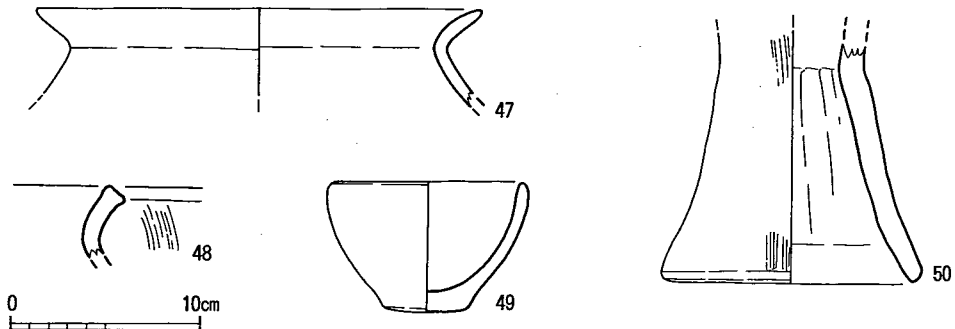
甕(46) 埋土中から出土した「く」字状の口縁部片である。復原口径25.6cm。調整は磨滅のため不明瞭。胎土には細砂、粗砂、角閃石、石英を含み橙褐色に焼成される。

#### I 区のピット出土遺物 (図版14、第22図)

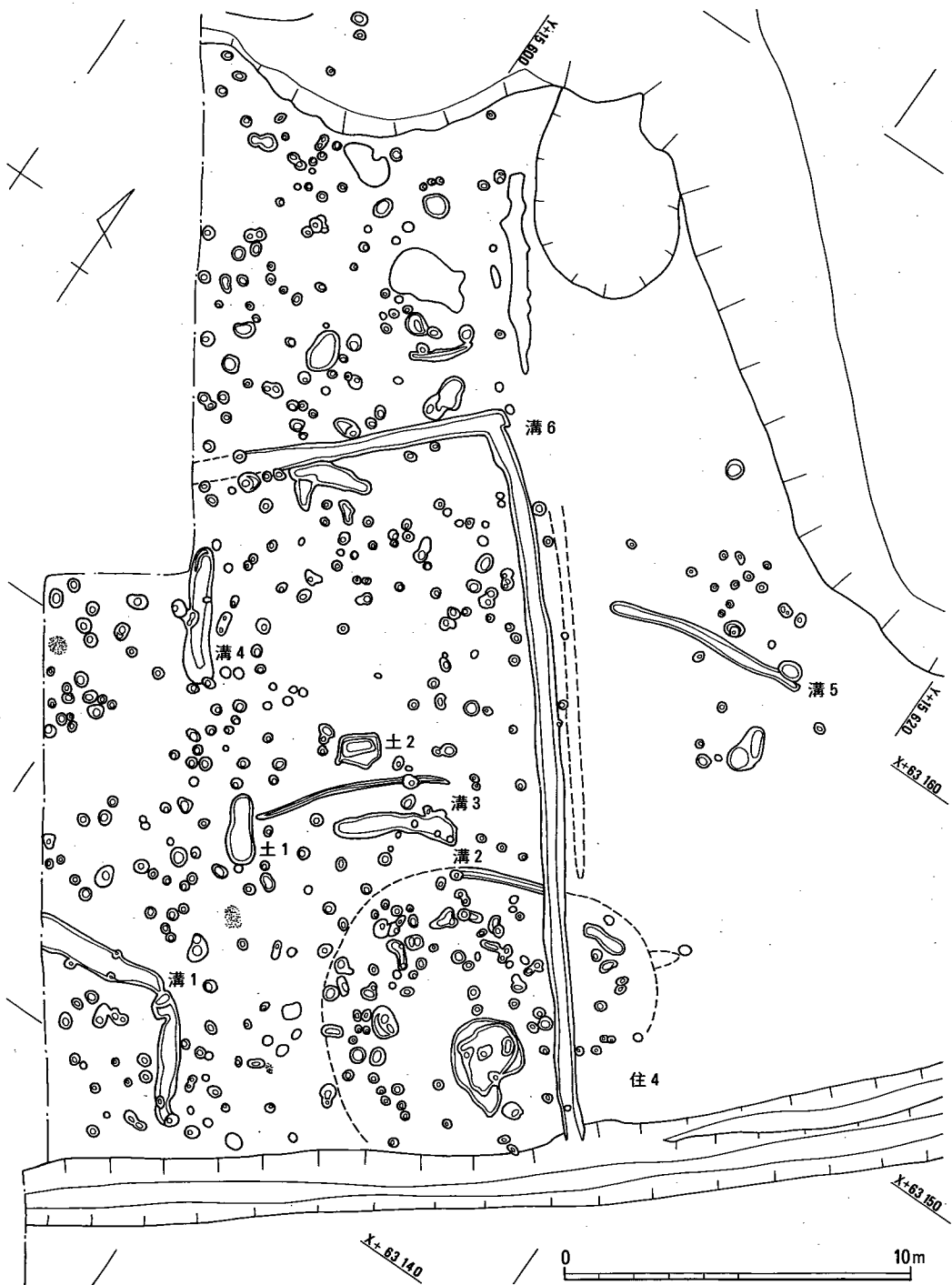
甕(47・48) 47は復原口径23.6cm。器壁は磨滅しており調整不明瞭。胎土には細砂粒、石英、角閃石を含み、茶褐色に焼成される。48は小片で口径不明。口縁部外面は縦ハケの後ナデ、内面はナデ、端部は平坦にヨコナデ調整される。胎土には細砂、角閃石、石英、赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。

椀(49) 復原口径10.0cm、器高6.8cm。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げ上げる。器壁は磨滅しており調整は不明。細砂粒多め、石英、角閃石を含み、黄橙色に焼成される。

器台(50) 受部を欠損する。残存高13.0cm、脚部径15.8cm。外面にハケ目が残る。内面はナデ、脚裾部はヨコナデされる。胎土には細砂、粗砂を多量に含み、赤橙色に焼成される。

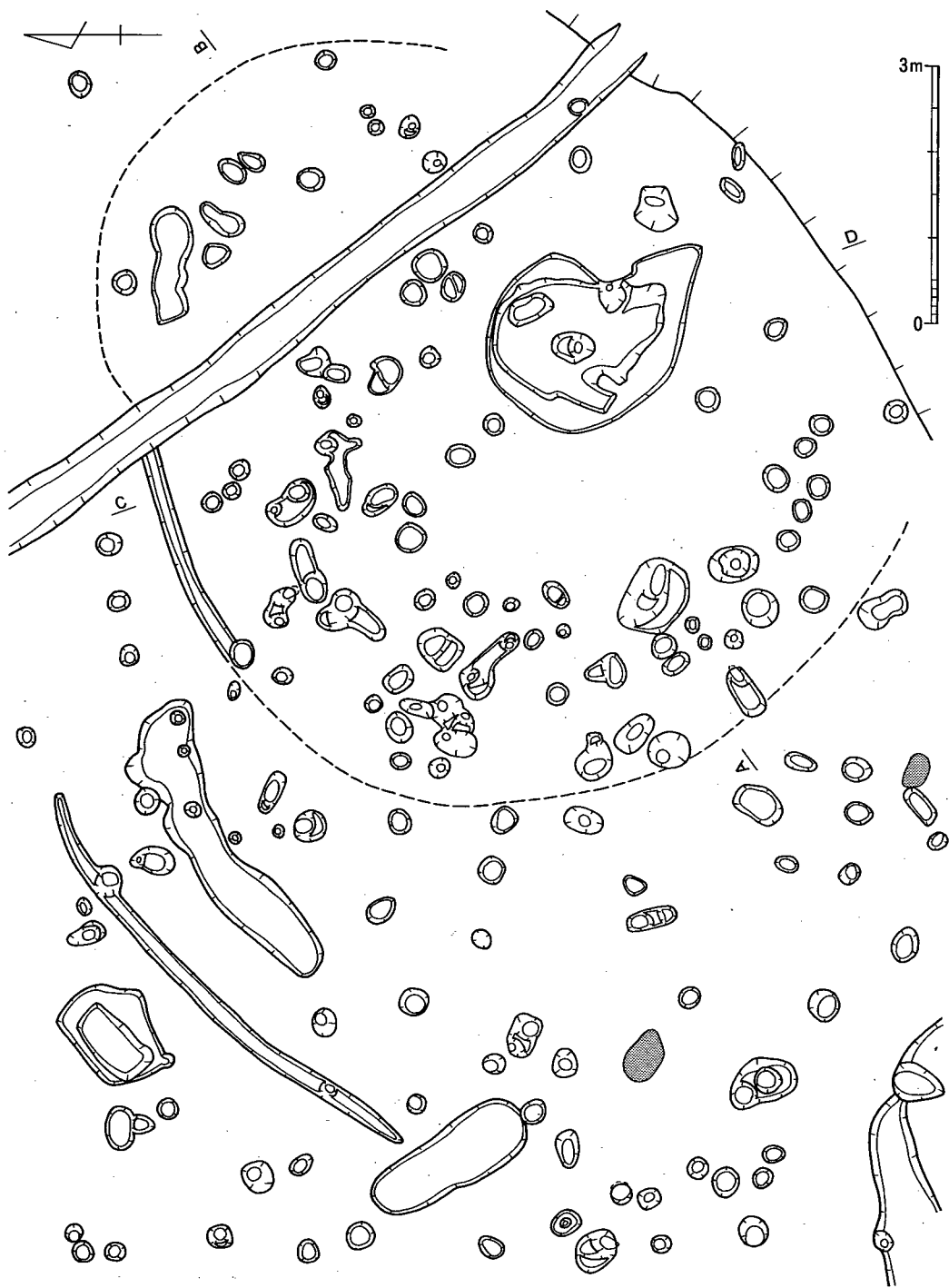


第22図 I 区ピット出土土器実測図 (縮尺1/4)



第23図 II区遺構配置図(縮尺1/200)





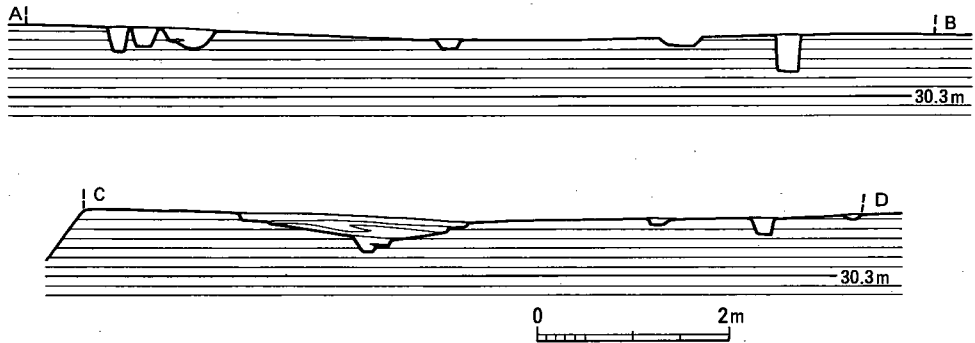
第24图 4号住居跡実測図(縮尺1/80)

II区の調査（図版2・3-1、第23図）

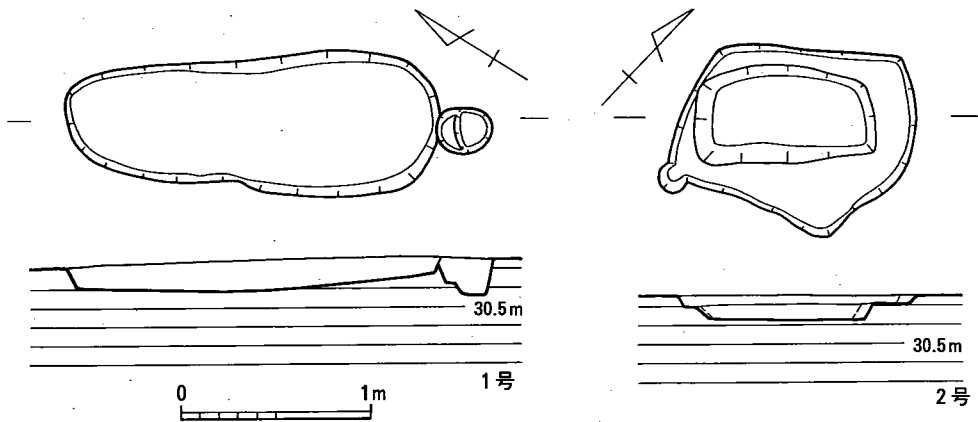
II区は段丘上の調査区中央部で、標高は30.8mほどでもっとも高い位置にあつて、I区の遺構検出面より1m弱高い。調査区西側は水田のため平坦に削平されているが、辛うじて遺構が残存していた。遺構が検出できなかった東側は、里道や民家の敷地にあたる部分で、削平や攪乱を受けていた。調査面積は約1,200㎡であるが、遺構等が分布していたのは半分約600㎡である。検出した遺構は、住居跡、土坑、溝状遺構、ピット群と後述する古墳1基である。

4号住居跡（図版7-2、第24・25図）

II区の東南端に存在する。南東側を水田の溝によって破壊され、東側も水田に伴う溝（溝6）が走っている。図上に示した破線は北側の住居跡の周溝と考えるものから調査した結果、土色の変化が確認できた線である。形態はほぼ円形に近いものの不整形である。中央やや南よりの不整形の穴には焼土が詰まっており、これ中心に柱穴の割出しも行ったが支柱穴を断定することができなかった。また周辺には焼土の塊が3カ所（スクリントーン部）、ピットも多数検出されており、数軒の住居が存在した可能性が高い。



第25図 4号住居跡断面実測図（縮尺1/80）



第26図 土坑実測図（縮尺1/40）

遺物は埋土から弥生土器の小破片が出土したが図示できない。

## 2) 土坑

### 1号土坑 (第26図1)

4号住居跡の西側3.5mから検出した土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-32°-Eを示す。規模は内法で長さ1.9m、幅は中央部で53cm、北側幅約45cm、南側幅約62cmを測る。床面は水平ではなく中央部が低く、幅の広い南側が若干高い。中央部での深さは15cmを測る。埋土から底部片が出土した。性格その他については不明である。

### 2号土坑 (第26図2)

4号住居跡の北西側3.5mから検出した二段掘込の土坑である。一段目の長さ1.25m、幅90cmの長方形の坑の中央に、長さ95cm、幅50cmの長方形の二段目の坑を掘り込んでいる。深さは一段目上縁から13cmほどで床面は水平である。主軸方位はN-47°-Eを示す。性格等は不明である。

## 3) 溝状遺構

### 1号溝状遺構 (図版3-1、第27図)

4号住居跡の西側から検出された溝状遺構である。2条の溝が重なった形態であるが、上部が削平されており詳細が不明であるためここでは1条として取り扱う。溝は西側の調査区外から東に向かって長さ4m延び、さらに南東方向に屈曲して長さ4m延びる。溝の幅は45~60cmで、深さは15~24cmを測る。最も浅い東側と南東側の比高は約10cmである。

### 2号溝状遺構 (図版3-1、第27図)

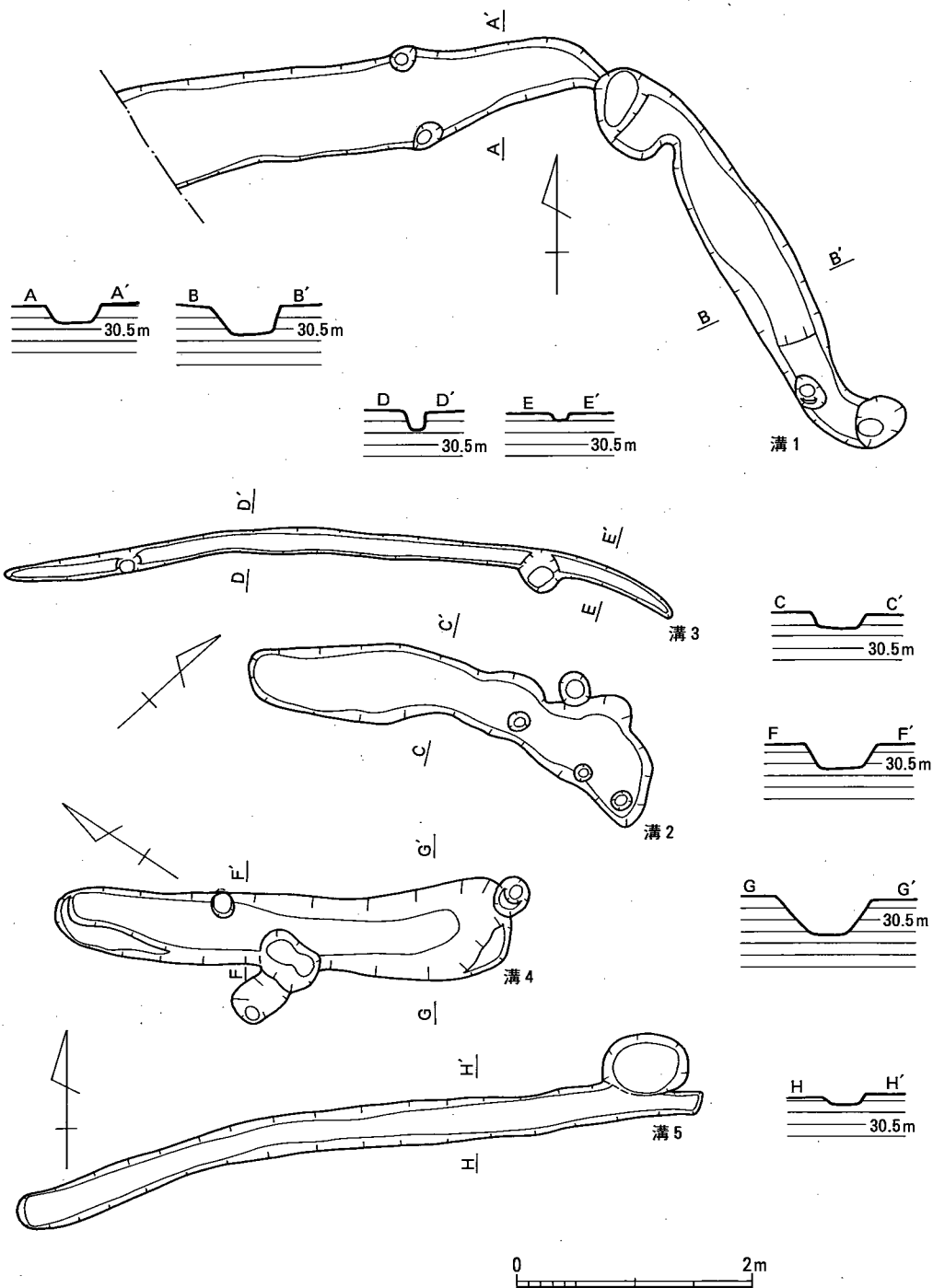
4号住居跡の北側から3号溝状遺構と北西から南東方向に並んで検出した、幅の差があるがやや弧を描く形態も同様である。長さ約3.5m、幅は中央で50cm、深さは12cm前後である。

### 3号溝状遺構 (図版3-1、第27図)

幅とやや弧を描く形態は住居跡の壁下を巡る周溝を連想させる。主柱穴との関係を調査したが住居跡にはむすびつかなかった。長さ約6m、深さは6~16cmである。

### 4号溝状遺構 (図版3-1、第27図)

調査区の中央西側から検出した。残存する形態は隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-29°-Wである。溝幅は60~80cm、深さは20~30cmで北西側が浅い。埋土からは弥生式土器が数点出土した。



第27図 溝状遺構実測図 (縮尺1/60)

5号溝状遺構 (第27図)

調査のほぼ中央から検出した。ほぼ東西方向に延びる。長さ6m弱、幅約35cm、深さは6～8cm程である。

6号溝状遺構 (図版3、第23図)

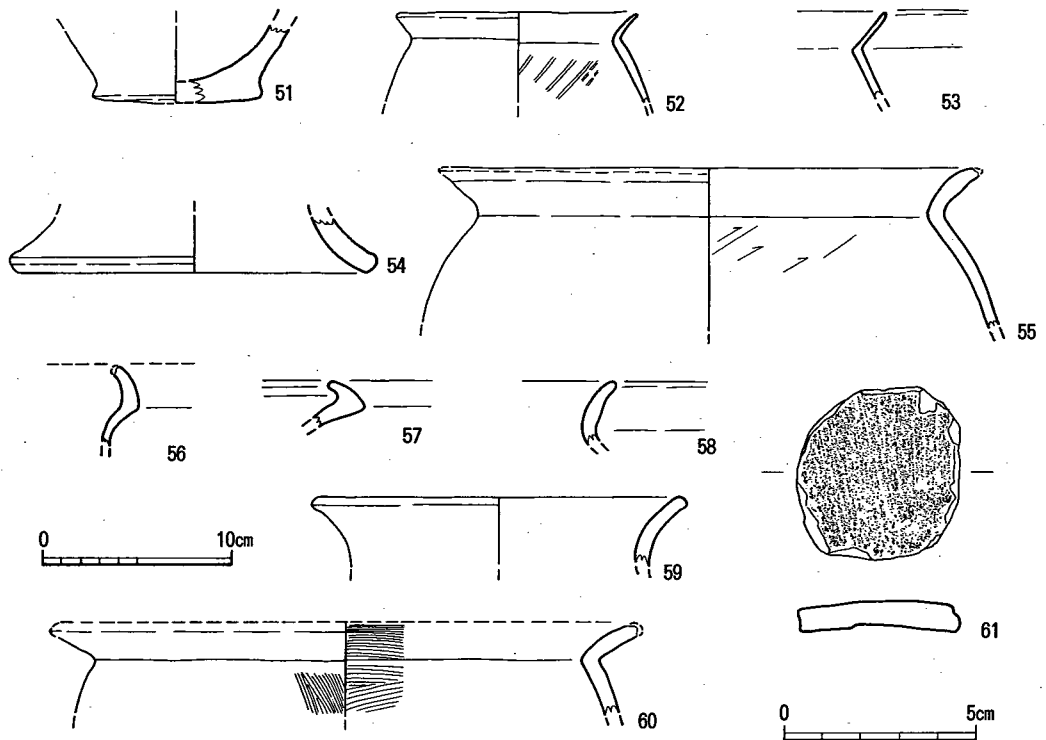
現代の水田に付設する溝である。埋土から石鏝が一点出土している。

Ⅱ区土坑・溝状遺構、ピット出土遺物

出土土器 (図版14、第28図)

底部(51) 1号土坑の埋土中から出土した約1/2弱の底部片である。復原底径9.0cmを測る。底部縁部端が外方へ突出する。外底部はやや凹凸がある。胎土には細砂粒を多め、粗砂粒、角閃石を若干含み、橙褐色に焼成される。底部の特徴から縄文土器と考える。

高杯(52) 高杯の脚裾部の破片である。裾部径18.5cmに復原できる。器壁は全体に磨滅しており調整は不明瞭である。胎土には細砂粒、角閃石を含み、黄橙色に焼成される。4号溝状遺構からの出土である。



第28図 Ⅱ区土坑・溝状遺構・ピット出土土器実測図 (縮尺1/4)

土師器甕(53~55) 53は復原口径13.5cmを測る。短く「く」字状に屈曲する口縁部で端部は丸い。口縁部内面はナデ、外面はヨコナデ調整される。胴部内面はヘラ削りの後ナデられる。外面は調整不明。胎土には細砂粒、角閃石、石英を含み、黄褐色に焼成される。54は口縁部片である。「く」字状に屈曲させ、内彎気味に整形している。端部は丸い。口縁部はナデ調整されるが他は不明。胎土には細砂粒、角閃石、石英、長石を含み、黄褐色に焼成される。55は復原口径28.4cmを測る口縁部片である。口縁端部は横外方につまみ出される。器壁が磨滅しており調整は不明。胎土には細砂粒、角閃石、石英を含み、茶褐色に焼成される。53~55は4号溝状遺構の埋土中出土である。

袋状口縁壺(56・57) 56は小砂片で口径不明。ナデ調整される。胎土には細砂粒を多く含み、黄橙色に焼成される。57は14~15cmほどの口径に復原できる。内外面ともにナデ調整。胎土には細砂粒を多く含み、茶褐色に焼成される。

甕(58~60) 58は小破片のため口径は復原できない。ナデ調整され、胎土には細砂粒を多量に含み、黄橙色に焼成される。59は復原口径19.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整され、端部は横外方へ若干つままれる。胎土には細砂粒を多め、角閃石、石英、長石を含み褐色に焼成される。60は鋭く屈曲し、内面に稜をつくる。口縁端部は欠損する。口縁部内面はハケ目、外面はヨコナデ、頸部以下は内面ハケ目、外面はハケ目の後ナデられる。復原口径は26.6cmを測る。

土器片円盤(61) 土器片を打ち欠き調整して、4.2~4.5cmのほぼ円形に仕上げる。周縁部は磨耗している。重さ19.2gである。

#### 4) その他の遺物

##### I・II区の表面採集資料

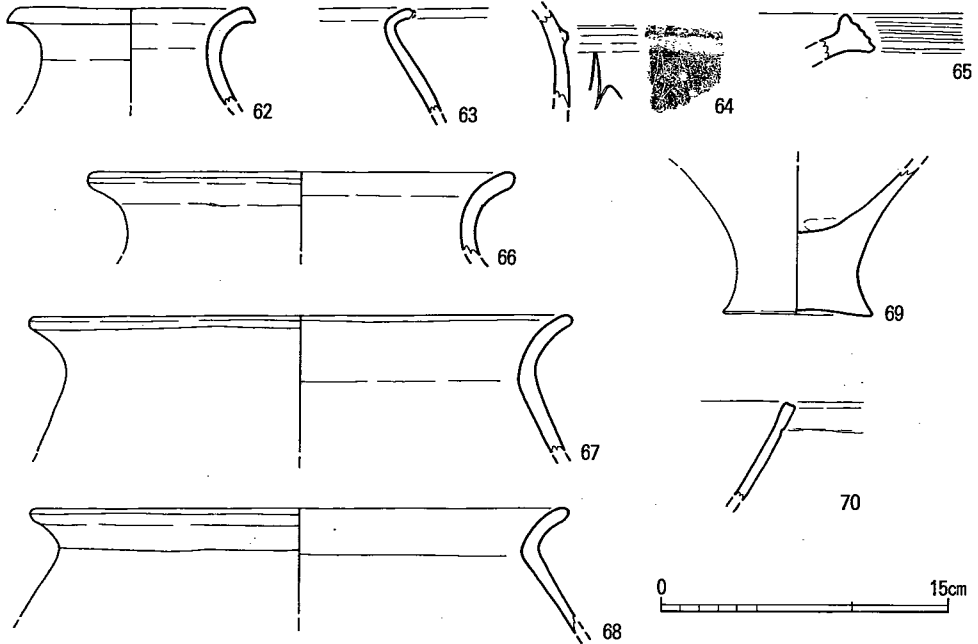
採集土器 (図版14・15、第29図)

壺(62~65) 62は大きく外反する口縁部片で、端部を下外方につまみ出す。ナデ調整される。胎土には細砂粒を多く含み、黄橙色に焼成される。復原口径12.0cm。63は短い口縁部をもつ壺で、口縁部はヨコナデ、他はナデ調整される。胎土は細砂粒、角閃石、赤褐色粒を含み、黄褐色を呈する。64は胴部片で凸帯直下にヘラ描きが施されている。65は瀬戸内系統の壺の口縁部片で、凹線文を施す。器壁は磨滅して調整不明。胎土に細砂粒を多く含み、灰黄褐色に焼成される。

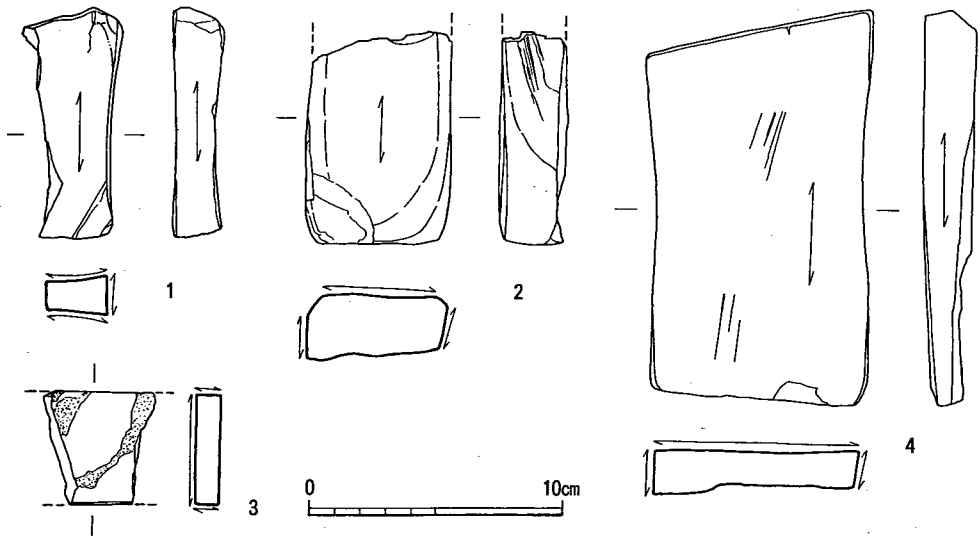
甕(66~68) 66は復原口径22.6cm。胎土に細砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。67は復原口径28.6cm。内外面ともにナデ調整。68は復原口径28.4cm。口縁部はヨコナデ調整。他は磨滅のため不明瞭。胎土に細砂粒を多く含み、黄橙褐色に焼成される。

底部(69) 肉厚の底部で、縁部は強くナデられる。内面には一部指頭圧痕が残る。底部径は7.8cmである。

鉢？(70) 中世の鉢形土器であろうか、小片のため器形は不明。薄手造りで、口縁端部は平坦面をもつ。外面口縁下に段をもつ。胎土には微砂粒を含み、黄橙色を呈する。



第29図 表採土器実測図 (縮尺1/4)

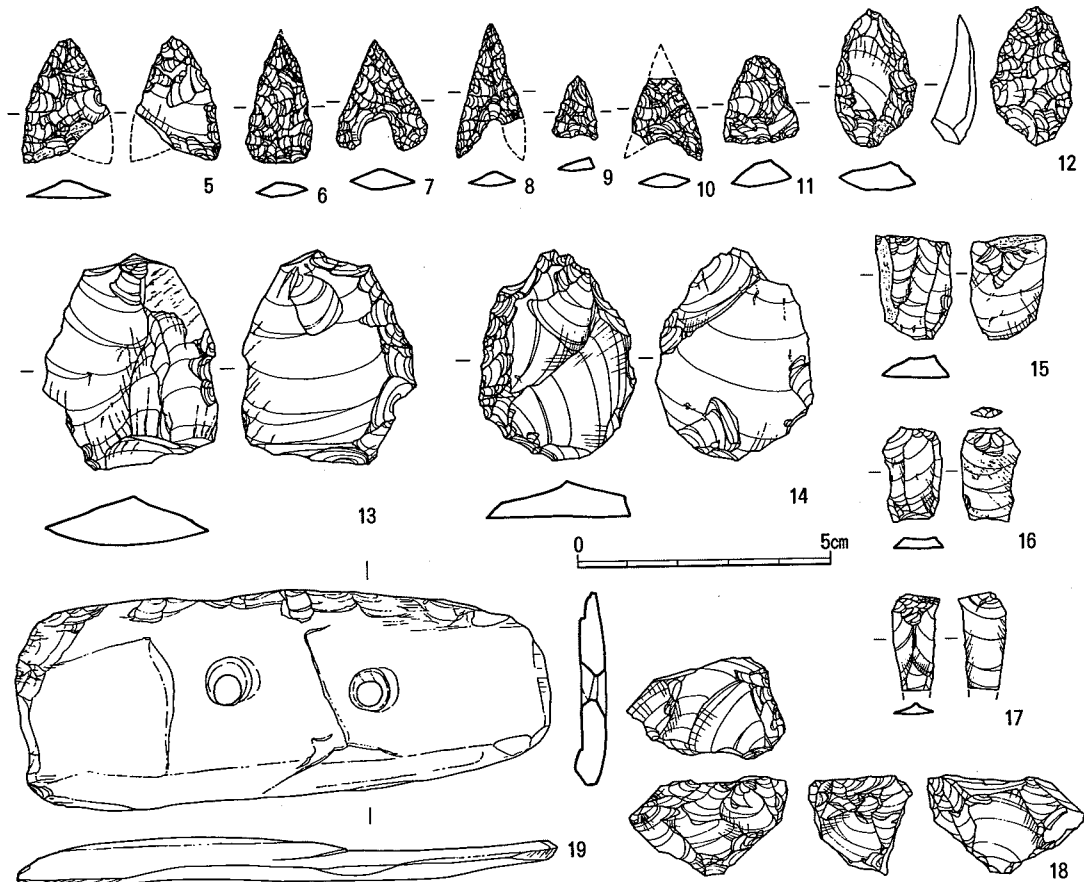


第30図 出土石器実測図① (縮尺1/3)

石器 (図版17・18、第30・31図)

砥石(1~4) 1はⅡ区表採である。粘板岩製の砥石片で、両面と片縁が磨耗する。現存長9.1cm、幅3.9cm、厚さ1.6cm、重さ85.6gを測る。2もⅡ区表採である。粘板岩製の砥石片で、片面と両縁を磨耗する。現存長は8.4cm、幅5.7cm、厚さ2.15cm、重さ174.5g。3は1号墳周溝からの出土である。粘板岩製の砥石片で片面と両縁を磨耗する。現存長4.4cm、幅4.3cm、厚さ1.1cm、重さ33.8gである。4も古墳周溝からの出土である。粘板岩製の扁平な砥石で、片面と両縁が磨耗する。長さ15.6cm、幅8.8cm、厚さ1.8cm、重さ367.2gを測る。

石 鏃(5~12) 5は押圧剥離によって調整が行われているが、腹面には素材面を大きく残している。凹基式で、右基部を欠損している。最大長2.45cm、現存幅1.75cm、厚0.45cm、重さ1.2gを測る。黒耀石製でⅠ区表採。6は両側縁部を押圧剥離によって丁寧に整形している。先端から右側縁部をわずかに欠損する。平基式である。現存長2.50cm、最大幅1.30cm、厚0.40cm、重さ1.0gを測る。姫島産黒耀石製で表採資料。7は丁寧な押圧剥離によって両側縁部を



第31図 出土石器実測図②(縮尺2/3)



調整し、先端部を鋭く作出している。基部に大きく抉りの入る凹基式だが、右基端部はやや幅広に整形されている。最大長2.20cm、幅1.75cm、厚0.45cm、重さ1.1gを測る。黒耀石製で表採資料。8は先端部と基部が鋭く作出された凹基式で右基端部を欠損する。黒耀石製でI区2号住居出土。最大長2.55cm、現存幅1.40cm、厚0.30cm、重さ0.6gを測る。9は左側縁部を欠損するが、その一部に再調整が加えられている。基部にわずかに抉りが入る。姫島産黒耀石製でI区2号住居出土。最大長1.20cm、幅0.95cm、厚0.55cm、重さ0.3gを測る。10は丁寧な押圧剥離によって仕上げられている凹基式である。先端部と左基端部を欠損する。黒耀石製で1号溝出土。現存長1.65cm、幅1.75cm、厚0.50cm、重さ0.5gを測る。11は押圧剥離が行われているが、先端部と両基端部の作出は明瞭でない。また、断面を厚く残すことから未製品と考えられる。黒耀石製で2号溝出土。最大長1.75cm、幅1.50cm、厚0.50cm、重さ1.1gを測る。12は押圧剥離が行われているが、背面に素材面を残し基部中央付近は厚みを残している。姫島産黒耀石製でI区2号住居出土。最大長2.70cm、幅1.60cm、厚0.80cm、重さ2.8gを測る。

スクレイパー(13・14) 13は無調整打面を加撃し、剥離されたやや幅広剥片の側縁部に刃部加工を施している。この刃部をはじめ、もう一方の側縁や端部の使用に関わると考えられる微細剥離が認められる。姫島産黒耀石製でI区表採。最大長4.15cm、幅3.50cm、厚1.25cm、重さ15.3gを測る。14は左側縁部と右端部付近に刃部加工が行われている。左側縁刃部には微細剥離が連続する。黒耀石製でI区表採。最大長4.25cm、幅3.15cm、厚0.95cm、重さ9.4gを測る。

剥片(15~17) 15は礫打面を加撃したややすづまりの剥片である。背面には同一方向の剥離面を残す。黒耀石製でA地区表採。最大長1.50cm、幅1.65cm、厚0.55cm、重さ1.5gを測る。16は無調整打面を加撃している縦長剥片である。黒耀石製でI区2号住居出土。最大長1.58cm、幅1.25cm、厚0.30cm、重さ0.7gを測る。17の打面形状は不明である。黒耀石製でI区2号住居出土。最大長1.90cm、幅0.95cm、厚0.25cm、重さ0.30gを測る。

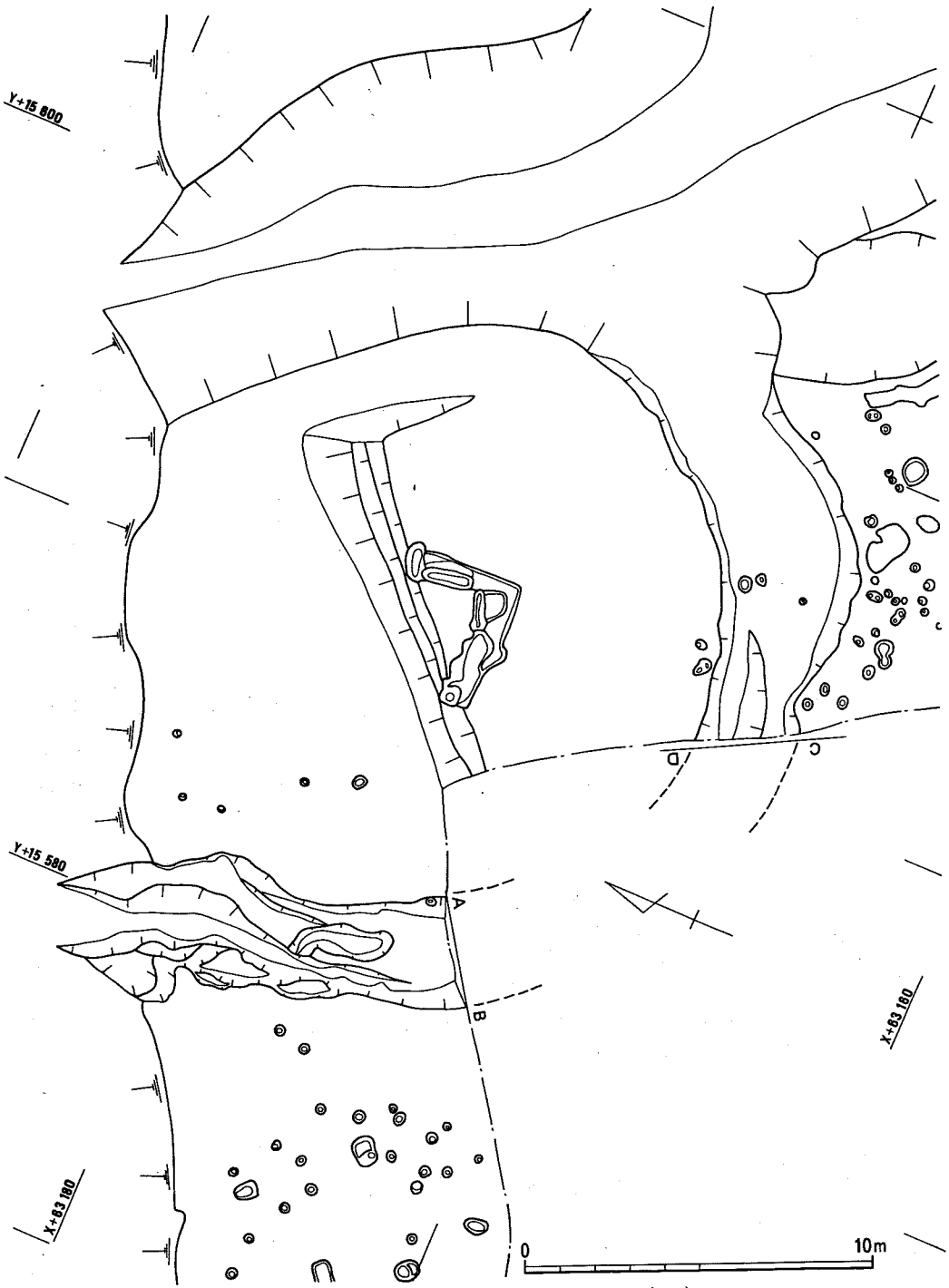
石核(18) 打面を頻繁に転移し、すづまりの剥片を剥離している石核である。黒耀石製で表採資料。作業面幅3.00cm、高さ1.80cm、厚さ1.95cm、重さ9.4gを測る。

石庖丁(19) 19は2つの穿孔を持つ石庖丁である。器面は、磨かれているが一部には成形加工面を残している。刃部研磨は、両側縁部にわずかに認められるだけである。また、2つの穿孔はいずれも丁寧だが、紐ずれの痕は認められない。以上のことから、未製品と考えられる。表採資料。ホルンフェルス製。最大長4.30cm、幅10.60cm、厚0.95cm、重さ30.0gを測る。

## 5) 上桑野1号墳

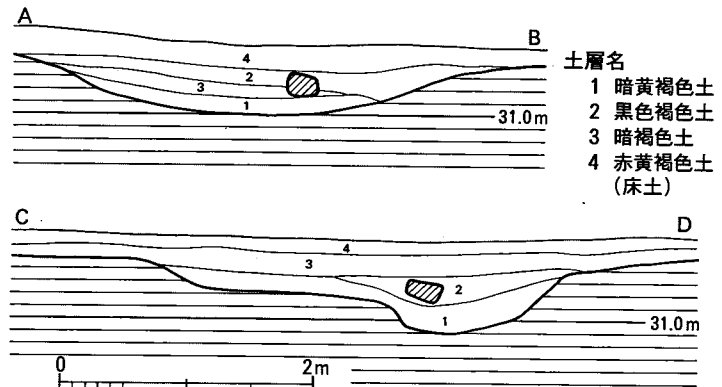
上桑野1号墳は、II区の北西端で周溝の一部と石室掘方、III区で周溝の一部を検出した。

本墳の位置する地区の現状は水田で、墳丘の高まりも残っておらず、過去の分布調査、事前の試掘調査においても、古墳の存在については確認されていなかった。II・III区の遺構検出作



第32図 上桑野1号墳地形実測図（縮尺1/200）

業で主体部の掘方部分で床面の敷石と考えられる小石とガラス製の小玉を発見し古墳と断定することができた。



第33図 周溝断面実測図(縮尺1/60)

#### 墳丘(図版8-1、第32・33図)

水田の開墾により墳丘は全く残っていない。現状ではⅡ区で標高30.7m前後まで、Ⅲ区で標高30.25m前後の高さまで削平を受けている。石室掘方もⅡ区で数cmの掘込みを確認できたがⅢ区では完全に消滅している。したがって墳丘の規模等の詳細については不明である。

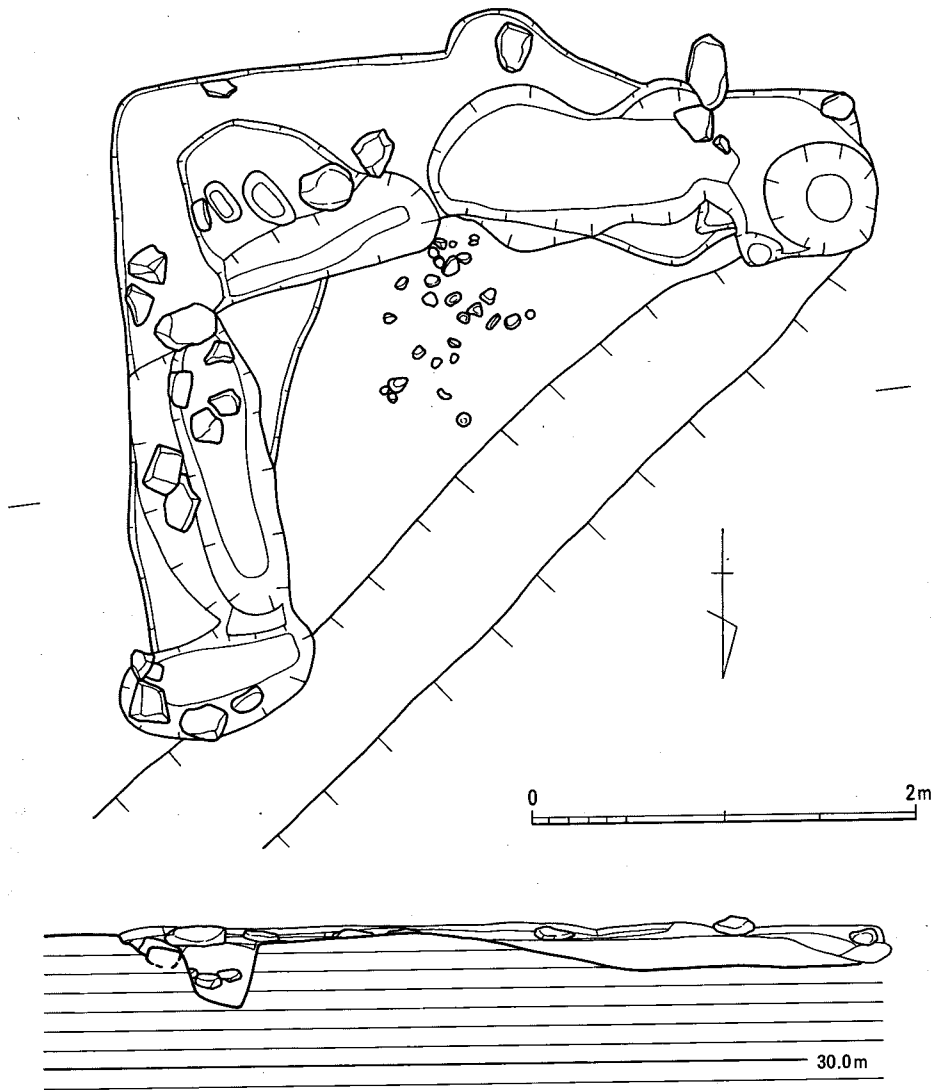
周溝は墳丘西側(Ⅲ区)と南東側(Ⅱ区)で確認できた。北側は涯の崩落、北東側については、水田の区画、里道等で削られている。西側で確認した周溝は南側の調査区外から、2.3m前後の幅で弧状に延び北側の涯面に続く。長さ約10mを測る。溝底は侵食され複雑な段を形成し不整形である。水のぬけ水となっており、調査中も絶えず水が流れていた。埋土からは石室の石材と考えられる大石のほか、須恵器片、石器、弥生式土器等が出土している。南東側の周溝は3~3.5mほどの幅で弧状に約10m確認できた。ほぼ原形を保っていると思われる。検出した周溝から図上で墳形を復原すると、径15m前後の円墳であったと推定できる。

#### 主体部(図版8-2、第34図)

主体部は上部と北西側を削られ、石室掘方の約半分と腰石の抜き跡、根締に使用された石が残存しているだけである。この残存状況から判断して、内部主体は、主軸を東西にとり、略西に開口する横穴式石室と考えられる。石室の規模は抜き跡から推測して、奥壁幅約1.80m、石室長2.65mほどと考える。使用された石材は抜き跡から奥壁1枚、南側壁2枚である。床面には5cm前後の小石が残っていたが詳細は不明。この部分からガラス丸玉13個、ガラス小玉61個、ガラス管玉1個、碧玉管玉1、鉄器片が出土した。

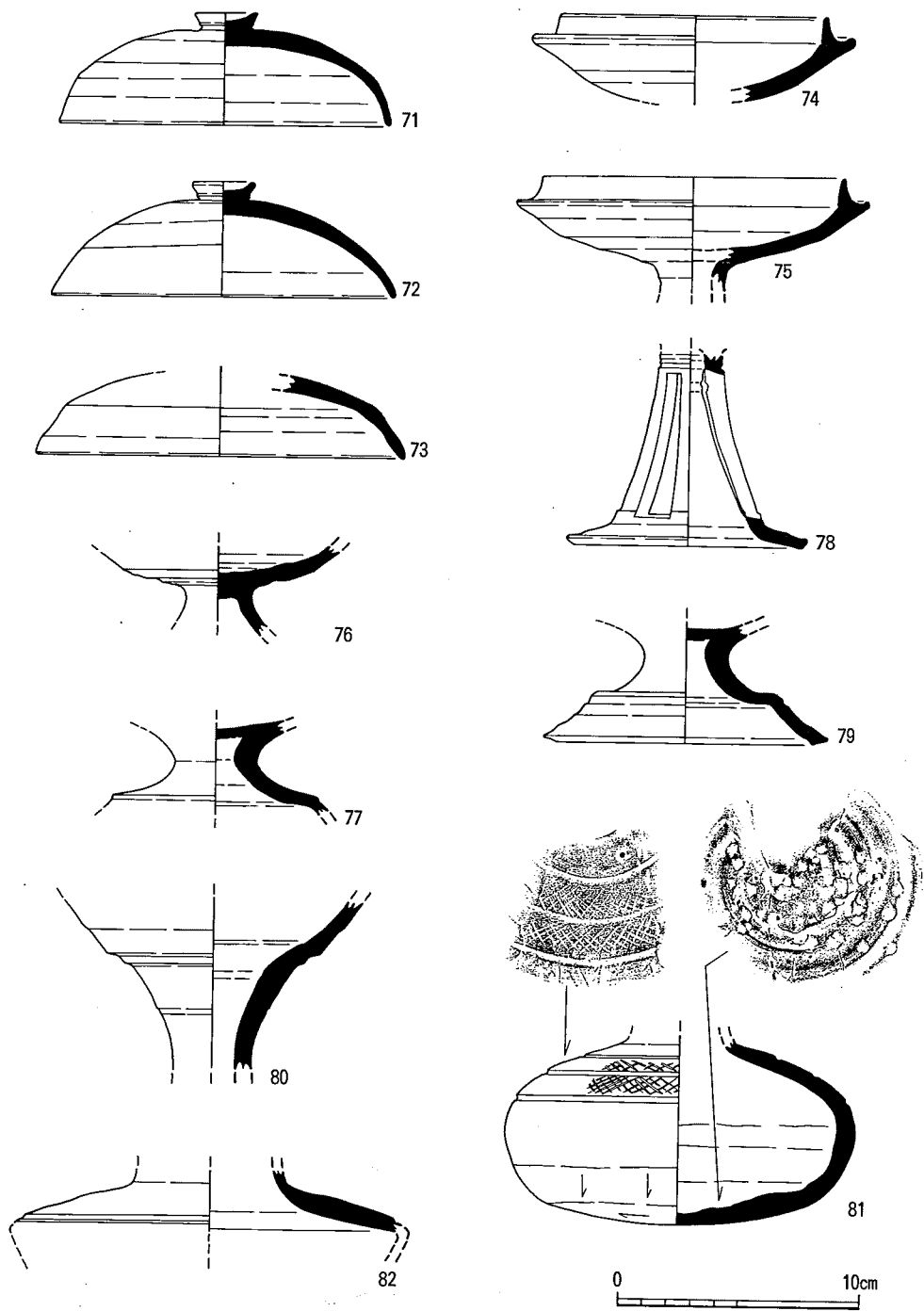
#### 出土遺物

須恵器(図版15・16、第35図)

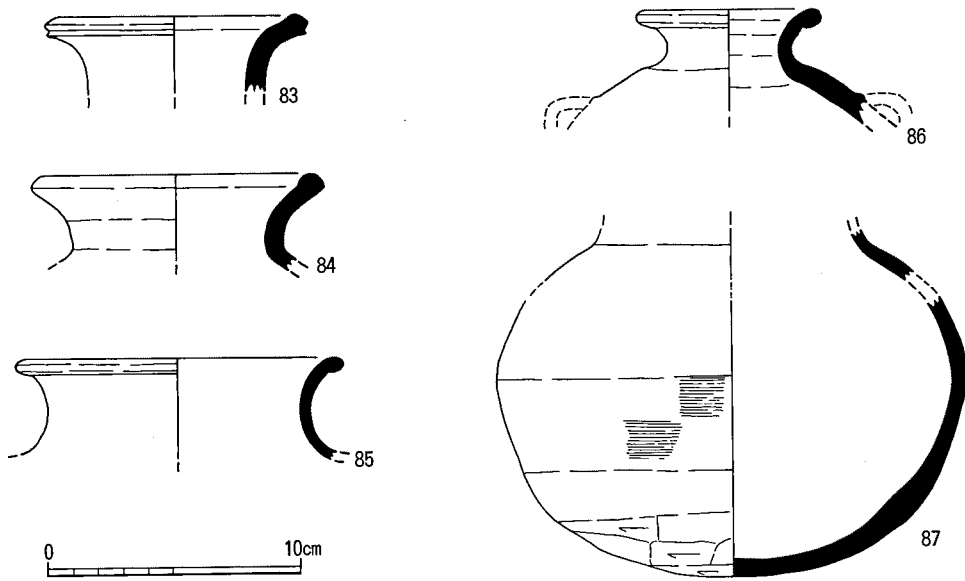


第34図 石室実測図 (縮尺1/40)

蓋(71~73) 71は口径13.8cm、器高4.6cmで宝珠形状の撮がつく。天井部は高く、体部との境でわずかに内側へ屈曲する。口縁端部は丸くつくられる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、他は回転ナデ調整される。胎土には細砂粒を含む。灰色～黒灰色を呈し、焼成は良好である。Ⅲ区周溝下層出土。72は口径14.4cm、器高4.8cmで宝珠形状の撮を持つ。天井部から口縁部にかけて丸味を持つ。口縁端部は丸くつくられる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、他は回転ナデ調整される。胎土に細砂粒を含む。灰色を呈し、焼成は良好である。73は天井部を欠損する。天井部と体部の境は屈曲する。体部は窪む。口縁端部は丸くつくられる。



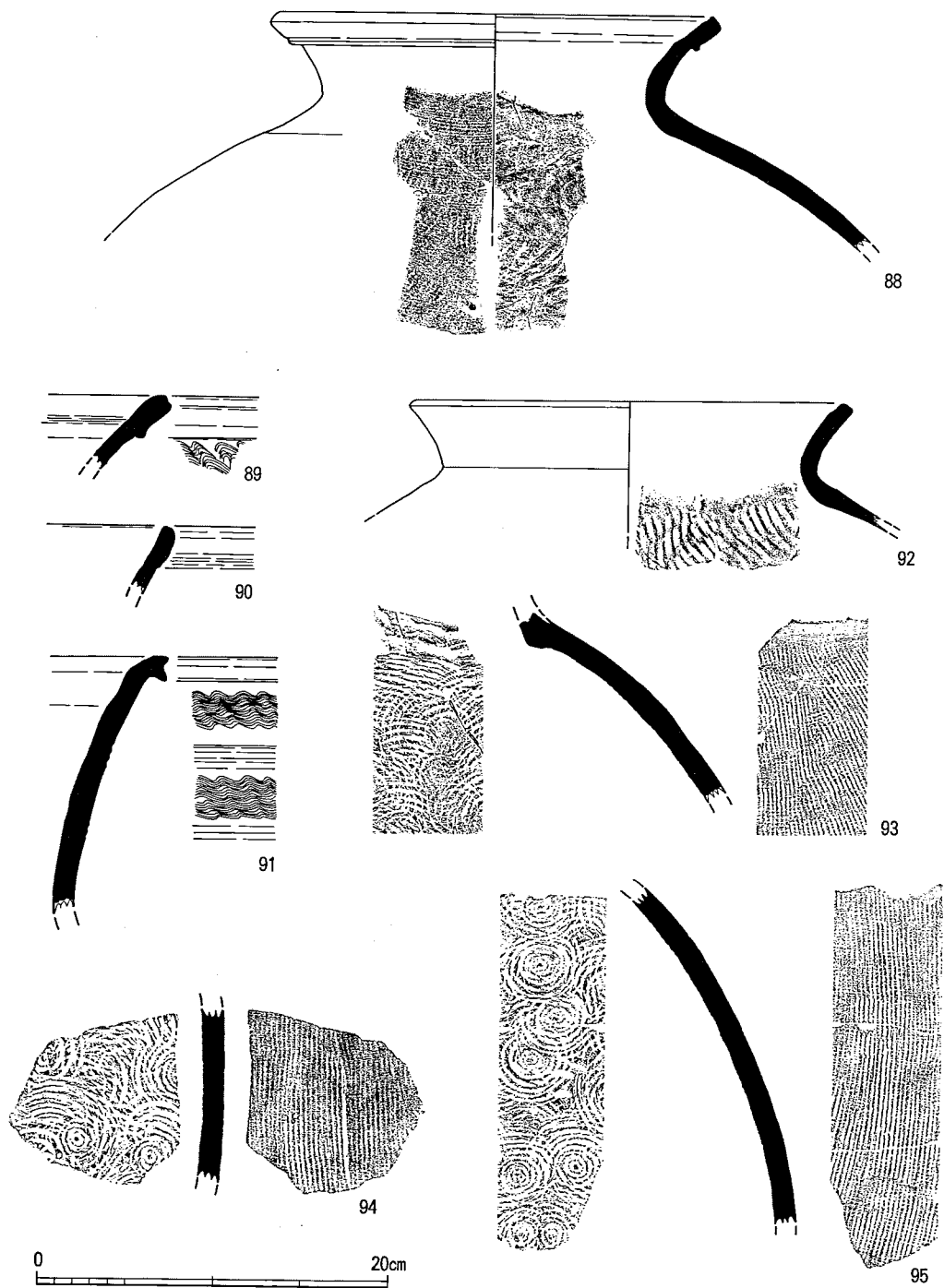
第35图 出土土器实测图① (縮尺1/3)



第36図 出土土器実測図② (縮尺1/3)

胎土には細砂粒を含み、緑灰黄色～暗灰色を呈する。焼成は良好である。72はⅢ区周溝下層、73は周溝埋土中の出土。

高杯(74～79) 74は高杯の杯部破片である。Ⅲ区周溝埋土中出土。復原口径10.8cm、蓋受部径13.4cm、立ち上がり高1.0cm。立ち上がりは直立し、端部は丸い。立ち上がりとは体部内面との境は稜が入る。杯底外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、他はヨコナデ調整される。灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。75は高杯杯部片でⅢ区周溝下層出土。口径12.5cm、蓋受け部径14.6cm、立ち上がり高1.1cmを測る。立ち上がりは直立し、端部はやや尖る。立ち上がりとは体部内面との境は稜がつく。杯底部とは体部との境は段がつく。杯底外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ、内面はナデ、他は回転ナデ調整される。胎土に細砂粒を含み、緑灰色を呈する。焼成は良好である。76は周溝埋土中の出土。杯上部と脚下部を欠く。杯底外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整。杯部と脚部の境は回転ナデ調整される。青灰色を呈し、焼成は良好である。77は周溝埋土中出土。杯部と脚裾部を欠く。脚裾部は大きく開く、途中に段をもつ。杯部との接合面に同心円の沈線が認められる。黒灰色を呈し、焼成はあまい。78は高杯脚部片である。Ⅲ区周溝下層からの出土。脚裾径10.0cm、現存高8.0cmを測る。長脚で上部に沈線、中位に長方形の透しが3ヶ所にはいる。脚裾部は大きく開く。内外面ともに回転ナデ調整される。胎土は精良で暗灰色を呈する。79は高杯脚部で、Ⅲ区周溝下層出土。脚部は短く大きく開く。途中に段をもち、裾端部は平坦面をつくり内側で接地する。内外面ともに回転ナデ調整。現存高4.9cm、裾部径11.8cmを測る。



第37图 出土土器実測图③ (縮尺1/3)

甗(80・81) ともにⅢ区周溝下層出土。80は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は大きく開く。頸部との境に明瞭な段をもつ。内外面ともに回転ナデ調整。胎土には細砂粒を少し含む。灰黄色～暗灰色を呈し、焼成は良好である。81は甗の胴部である。扁平気味の球形で最大径よりやや上位に3条の沈線がめぐり、沈線間に細いヘラによる斜格子文が施される。胴部内面は回転ナデ。底部内面には棒先でつづいた跡が残る。外面は頸部が回転ナデ、胴部中位は回転ヘラ削り調整。下位は縦方向の雑なヘラ削り、底部は一定方向の雑なヘラ削り調整。胎土には細砂粒を多め、黒色熔融粒を含む。黒灰色を呈し、焼成は良好である。最大径14.4cm、現存高7.7cmを測る。

埴(82) Ⅲ区周溝出土。肩部片で、胴部との境に1条の沈線がめぐり、内外面ともに回転ナデ調整される。胎土に細砂粒を含む。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

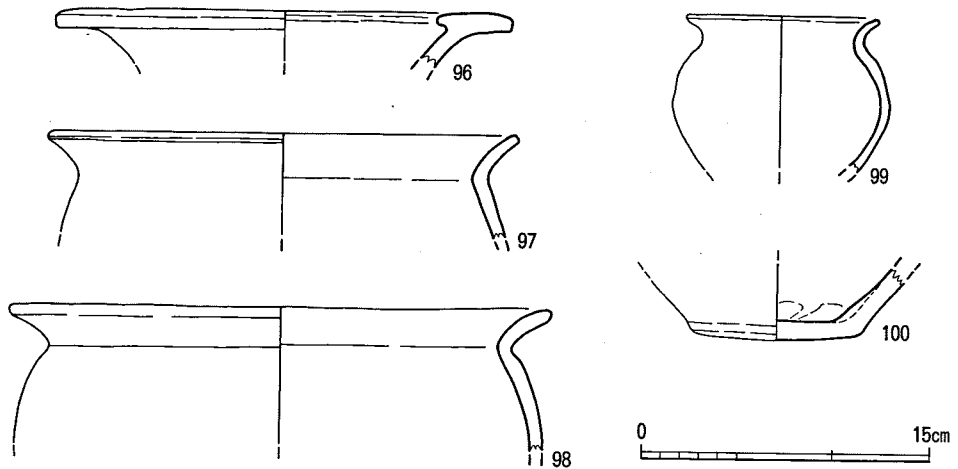
横瓶(83) 口縁部片で、口径10.4cmを測る。口縁部に1条の沈線を配する。内外面ともに回転ナデ調整。胎土には細砂粒を含む。黒灰色を呈し、焼成は良好である。Ⅲ区周溝埋土中出土。

提瓶(84・86) 84は口縁部に粘土を貼付して若干肥厚させる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含む。淡灰黄色を呈し、焼成は軟質である。口径10.6cm。Ⅲ区周溝出土。86は口縁部から肩部の破片である。頸部は短く外反し、口縁部は粘土を貼付して外面を肥厚させる。肩部に把手の跡が認められる。内外面ともに回転ナデ調整。頸部に灰かぶりが見られる。胎土は精良で、焼成は良好である。口径7.2cm。Ⅲ区周溝下層出土。

壺(85・87) 85は口縁部片で復原口径13.0cmを測る。口縁部は肥厚させる。内外面ともに回転ナデ調整。胎土には細砂粒を少し含む。一部灰かぶりがみられる。青灰色を呈し、焼成は良好である。87は胴部片で2片が接合した。現存高10.9cm、胴部最大径18.4cmを測る。胴部中位までは内外面ともに回転ナデ調整。中位下部にカキ目を施すが灰かぶりのため不明瞭、外面胴部下位は回転ヘラ削り調整。底部は一定方向のヘラ削り、底部内面はナデられる。胎土には細砂粒を少し含む。灰色～黒灰色を呈し、焼成は良好である。ともにⅢ区周溝出土。

甗(88～99) 88は口縁部から肩部にかけての破片で復原口径24.4cmを測る。口縁部を若干肥厚させ、断面は方形を呈する。口縁部から頸部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整。肩部以下は平行の叩きの後、上部にカキ目調整を施す。内面は同心円の叩きである、胎土に細砂粒を多く含む。黒灰色を呈し、焼成は良好である。Ⅲ区周溝出土。89は肥厚させた口縁下に波状文を施す。Ⅲ区周溝出土。90は口縁部片。I区3号住居出土。91は口縁部片である。カキ目の後頸部に沈線2条と1条を二ヶ所に配して区画し、間に櫛描波状文を施す。内面は回転ナデ調整。Ⅲ区周溝出土。92は復原口径25.0cmを測る。口縁部は回転ナデ調整。頸部以下は叩き。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は軟質で不良、淡緑灰色を呈す。Ⅱ区周溝出土。93は肩部片。外面は平行叩き、内面は同心円の当具痕。Ⅲ区周溝下層出土。94の外面は縦位の平行叩き、内





第38図 出土土器実測図 (縮尺1/4)

面は同心円の当具痕。Ⅲ区周溝下層出土。94は95と同一個体。

古墳周溝出土土器 (第38図)

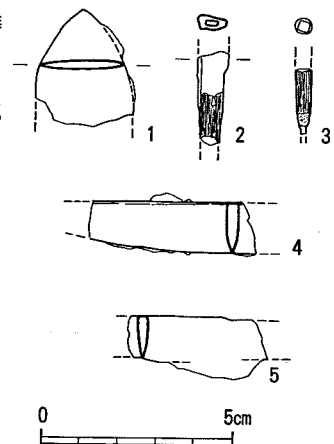
壺(96・99) 96は鋤先状口縁を有する大型の壺の口縁部片である。復原口径24.0cmを測る。器壁は磨滅のため調整不明瞭。胎土には細砂粒を多め、角閃石、石英を含み、橙褐色に焼成される。Ⅱ区周溝出土。97は小型の壺で底部を欠く。復原口径10.0cm。口縁部は短く外反し、胴部は球形をなす。胎土には細砂粒を多め、角閃石を含み、黄橙色に焼成される。調整は磨滅のため不明。Ⅱ区周溝出土。

甕(97・98) とともにⅡ区周溝出土。97は復原口径24.7cmの口縁部片である。内外面ともにナデ調整される。胎土には細砂粒を多く含み、黄茶褐色に焼成される。98は復原口径28.6cmを測る。口縁部はナデ調整。他は磨滅のため不明。細砂粒を含み、黄褐色に焼成される。

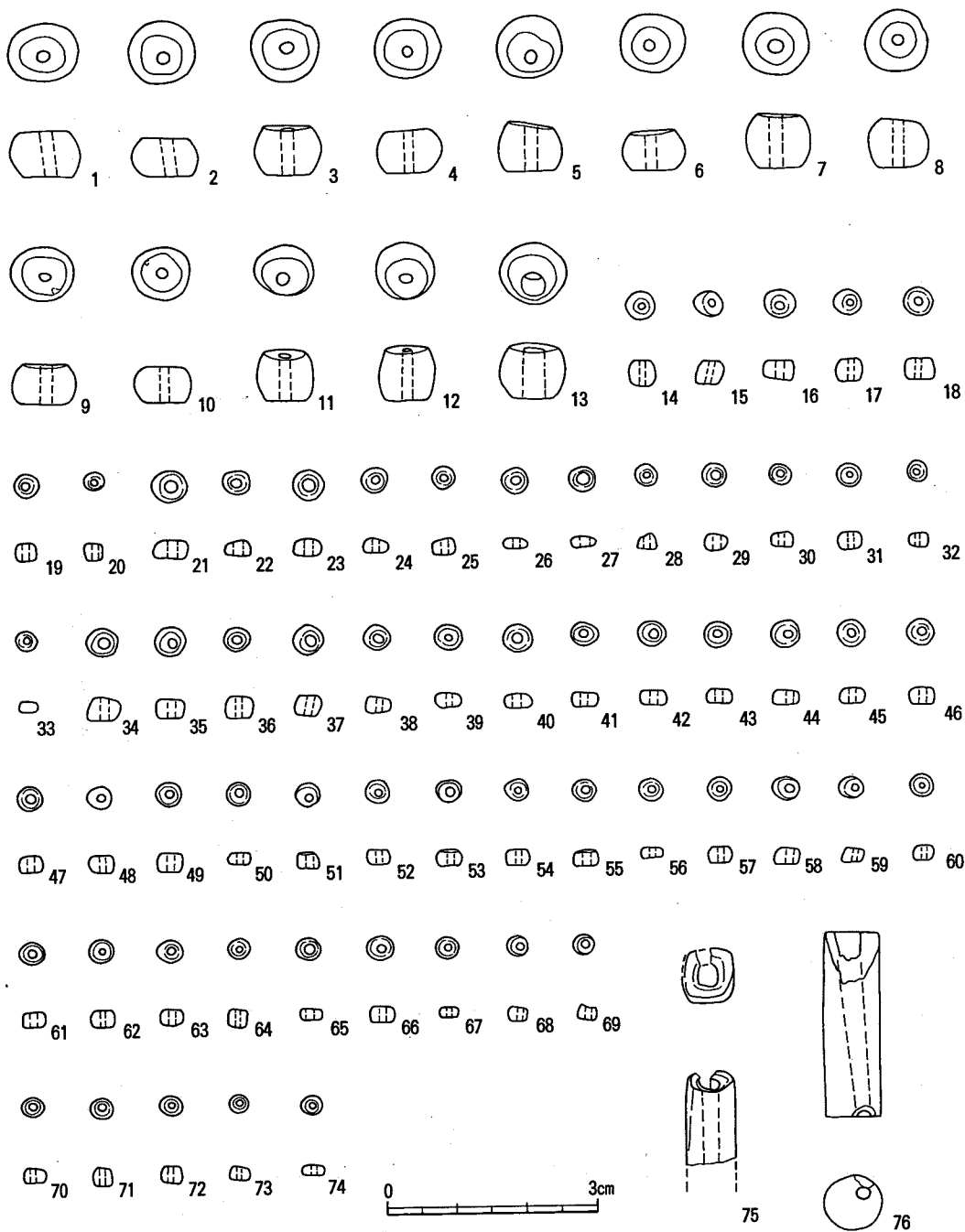
底部(100) Ⅲ区周溝下層出土。復原底径8.8cm。外面縁部はヨコナデ調整、内面底には指頭圧痕が残る。胎土には細砂粒、角閃石を多く含み、赤茶褐色に焼成される。

鉄器 (第39図)

鉄 鎌(1～3) 1は平根系の三角形式の鎌である。残存長2.90cm、最大幅2.50cm、中央の厚さは0.2cmである。Ⅰ区から出土。2・3は茎部で、2は現在長2.46cm、幅0.76cmを測る。3は現存長1.72cm、幅0.40cmで断面は方形を呈す。主体部床面からの出土。



第39図 鉄器実測図 (縮尺1/2)



第40图 出土玉類実測图 (実大)

刀子(4・5) いずれも破片である。4は現存長4.28cm、幅3.70cm。5は現存長3.50cm、幅は断面で1.20cmを測る。

玉類(巻頭図版2、図版17、第40図)

ガラス丸玉(1~13) 完形13個と破片が少量ある。上下端に平坦面をもつガラス製の丸玉である。13個の平均値は、径9.15mm、厚さ6.66mm、孔径1.73mmの大きさである。色調は紺色の半透明で気泡が多く、表面が荒れている。気泡は孔に平行に連続し、表面に白色の極細線となって現われる。総重量は10.0gである。計測値は表2に示すとおりである。

表2 ガラス丸玉・小玉計測表

(単位mm)

No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色
1	10.13	6.46	1.77	紺	26	3.86	1.91	1.16		51	3.80	2.58	1.10	紺
2	9.74	5.76	1.94		27	3.60	1.54	1.48		52	3.34	2.08	1.14	
3	9.85	7.08	1.89		28	3.23	2.47	1.08		53	3.47	2.16	1.25	
4	9.54	6.22	1.59		29	3.40	2.58	1.14		54	3.78	2.34	0.91	
5	9.10	7.16	1.99		30	3.23	2.16	0.98		55	3.48	2.51	1.34	
6	9.06	5.80	1.72		31	3.54	2.39	0.95		56	3.64	1.94	1.00	
7	9.57	7.67	1.57		32	2.93	2.52	0.85		57	3.64	2.46	0.82	
8	8.73	7.12	1.44		33	3.01	1.84	0.97		58	3.70	2.79	1.27	
9	8.96	5.72	1.80		34	4.58	3.31	1.46	紺	59	3.56	2.28	0.89	
10	8.44	5.08	1.58		35	4.43	2.93	1.00		60	3.56	2.42	0.88	
11	8.36	7.33	1.79		36	3.93	3.07	1.10		61	3.50	2.06	1.00	
12	8.30	7.36	1.74		37	4.22	2.96	1.14		62	3.64	2.58	0.85	
13	9.18	7.83	3.37		38	3.96	2.50	1.18		63	3.70	2.42	0.89	
14	4.18	3.58	1.09	黄	39	4.00	2.12	0.88		64	3.19	2.83	0.97	
15	4.24	3.28	1.14		40	4.11	2.02	1.54		65	3.34	1.88	1.20	
16	4.56	2.80	1.40		41	3.69	2.20	1.28		66	3.84	2.20	1.08	
17	3.68	3.26	1.20		42	4.08	2.20	1.17		67	3.08	1.73	0.97	
18	4.32	3.16	1.48	青緑	43	3.97	1.84	1.16		68	3.25	2.20	0.83	
19	3.32	2.46	0.90		44	4.03	2.11	1.08		69	3.10	2.28	1.03	
20	2.80	2.55	1.32		45	3.98	2.06	1.20		70	3.32	2.28	1.02	
21	4.95	2.56	1.49	淡青	46	3.72	2.66	1.12		71	3.29	2.68	0.80	
22	4.40	2.44	1.38		47	3.42	2.28	1.16		72	3.32	2.48	0.77	
23	4.21	2.44	1.55		48	3.38	2.33	1.24		73	2.87	2.04	1.02	
24	3.68	2.26	1.05		49	3.80	2.75	1.18		74	3.20	1.69	0.83	
25	3.39	2.68	1.03		50	3.76	1.81	1.30						

ガラス小玉(14~74) 完形品61個と少量の破片がある。いずれも主体部床面から出土したガラス製の小玉である。形態は上下端が平滑になっており、径に比して厚みあるものと薄手のものがある。色調は不透明の濃い黄色(14~17)、半透明の青緑色(18~20)、半透明の淡青色(21~33)、紺色(34~74)がある。紺色には半透明のものと不透明の濃い色のものがある。半透明の小玉で、気泡が孔と平行方向に連なる状態を観察できるものがある。大きさの平均値は、径3.67mm、厚さ2.41mm、孔径1.10mmであった。総重量は2.7gである。個々の計測値は表2に示す。

ガラス管玉(75) ガラス製小玉・丸玉と同様に主体部床面から出土した青緑色のガラス製である。破片で出土したが、図のように復原できた。本体の断面は円形ではなく、方形に近い隅丸方形を呈する。孔は同一の大きさである。気泡は多く観察できるが、走る方向は不明瞭である、表はかなり荒れている。現存長12.30mm、幅7.17mm、孔径2.67mmを測る。

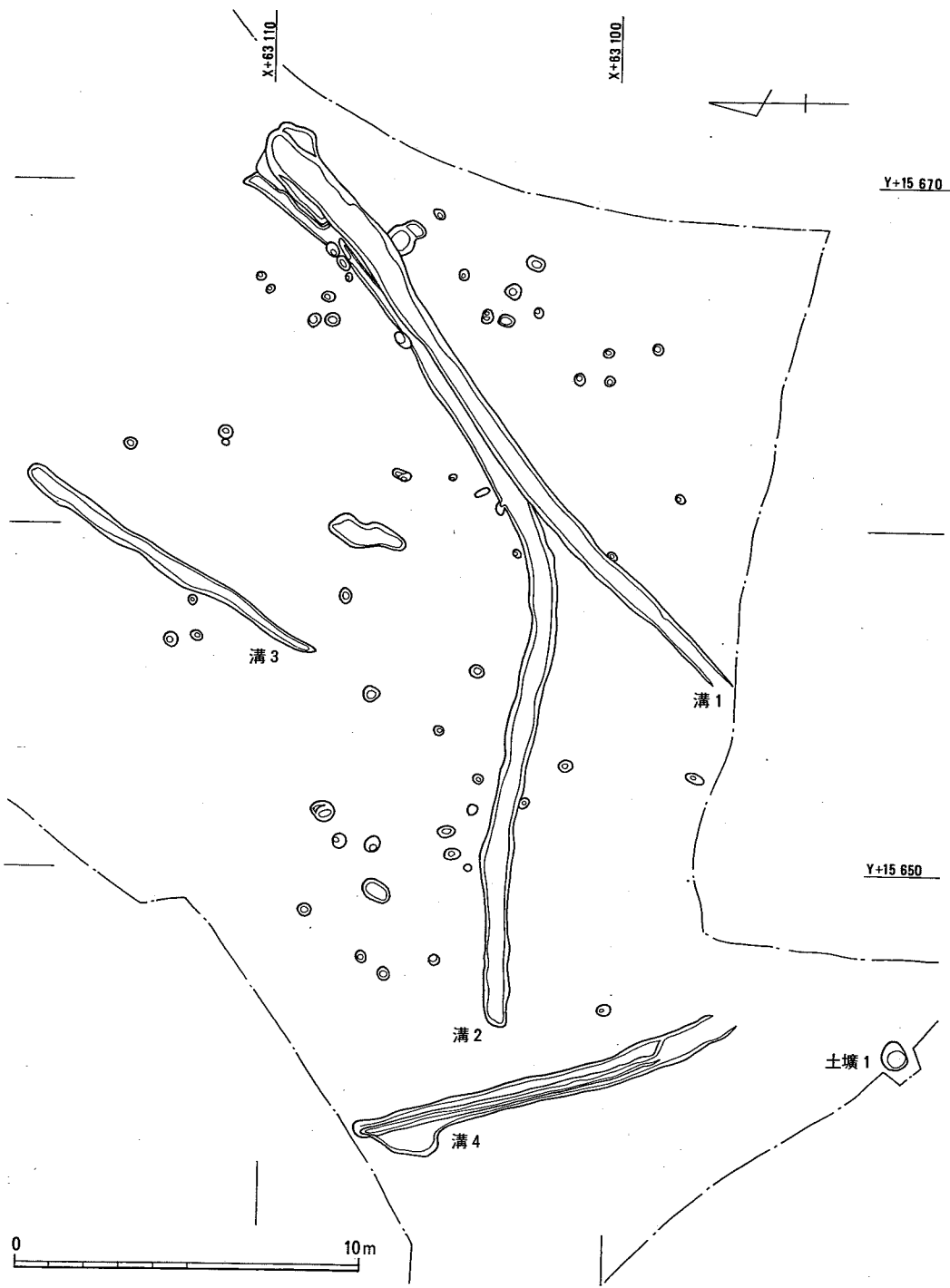
碧玉製管玉(76) 淡緑色を呈する碧玉製の管玉で主体部床面からの出土。両端部をわずかに欠損する。長さ26.23mm、径8.01mm、孔径3.54~1.89mmの大きさで、孔は片側穿孔である。

### 3. おわりに

今回の調査では、調査面積の2/3程が開墾等によって削平され、辛うじて遺構が存在した所でも遺構上部を大きく破壊されている状況であった。不確かではあるが、少なくとも4軒の竪穴式住居と土坑、溝状遺構などを検出した。ピット群や焼土跡など等の残存状況を考えれば、本来はより多くの竪穴式住居や掘立柱建物跡が存在していたと思われる。出土した土器もそのほとんどが小破片で細部まで検討できる資料ではないが、弥生時代中期後半から後期前半に属する資料が得られた。中期前半から後半の集落遺跡である牛頭天王遺跡や豊前バイパスで調査した桑野遺跡につづく遺跡として捕えられる。やがて明らかになるであろう近隣の遺跡を含めた総合的な判断が必要である。

古墳については、墳丘・主体部がまったく残存しておらず、周溝と石室掘方の一部の調査となった。調査状況から推測して、近年調査された、宇野台古墳や宇野題古墳と同様の単室の横穴式石室を主体部にもつ円墳と考える。

周溝から出土した須恵器のもつ特徴は、蓋は天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描き、口縁端部は丸く仕上げられている。有蓋高杯や無蓋高杯も脚部等の特徴から同時期のものと考えられ、この古墳の築造は、6世紀末ごろと判断できる。



第41図 B地点遺構配置図 (縮尺1/200)

## V 上桑野B地点の調査

### 1. はじめに

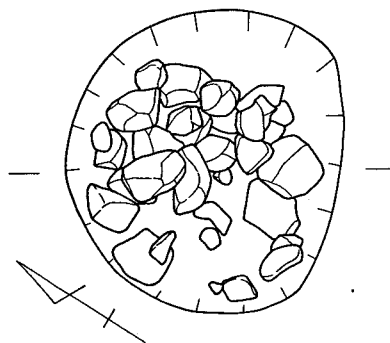
B地点は上桑野遺跡の南東端にあたる約880㎡の部分で、上桑野838～844番地に所在する。A区とは村道で区画される。平成4年1月7日に重機による表土除去作業を開始し、1月17日までに全ての調査作業を終了した。

### 2. 遺構

#### 1) 土坑

##### 1号土坑 (図版20-2、第42図)

調査区の南西端で検出した。平面円形のプランで、上縁部で径70～80cm、底部で55cm、深さ65cm。土坑内には5～20cm大の自然石を詰める。遺物の出土はない。



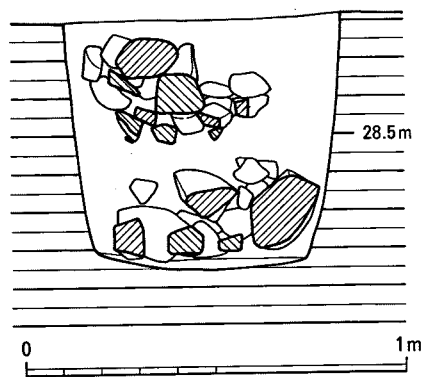
#### 2) 溝状遺構

##### 1号溝状遺構 (第41図)

調査区の南東部で検出した。南西から北東に向かって伸び、約21mの所で途切れる。最大幅1.0m、深さは現状で10～15cm。北東側にわずかに傾斜する。

##### 2号溝状遺構 (第41図)

4号溝の東側から東に向かって伸び、約14mの部分で「く」の字に曲がり、1号溝状遺構に切られながらこれと平行してほぼ同じ部分で途切れている。全体で約28mあり、幅と深さは1号溝状遺構とほぼ同様である。



第42図 1号土坑実測図 (縮尺1/20)

### 3号溝状遺構 (第41図)

調査区のほぼ中央にある。長さ9.8m、最大幅0.6mで、南西から北東に延びる。

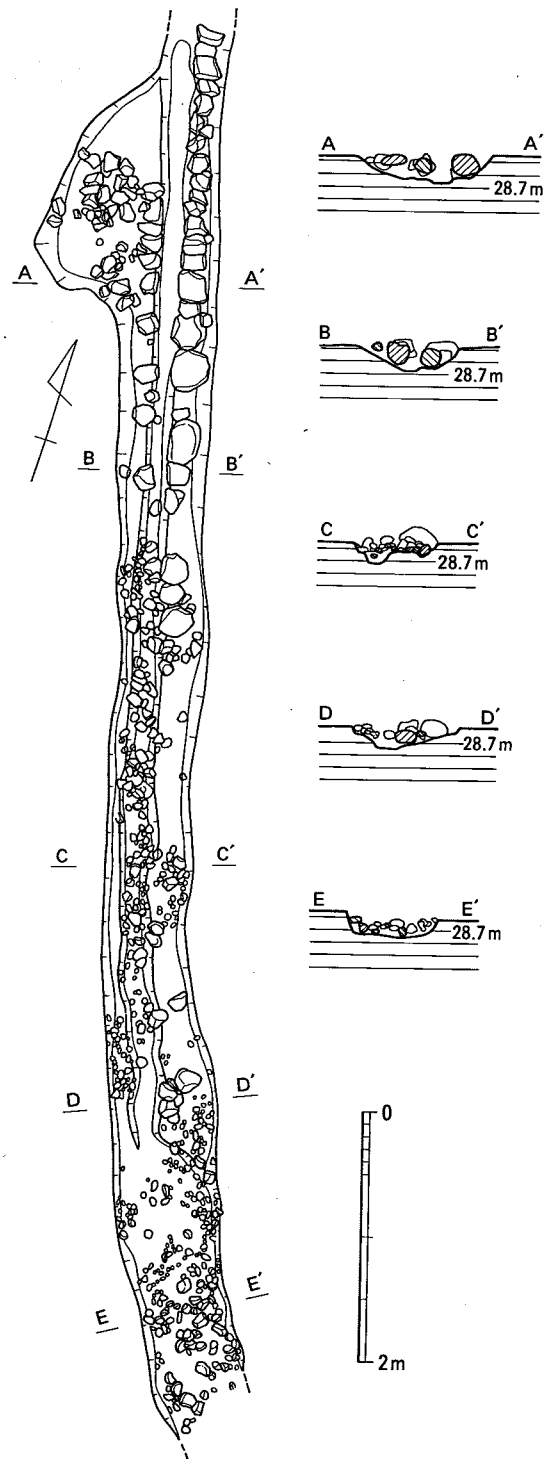
### 4号溝状遺構

(図版19・20、第41・43図)

調査区の西側で検出した石組の溝で、約11m分を調査したが北側はさらに調査区外に延びる。幅65~85cmの溝内に15~30cm大の自然石を内側に面を揃えて並べる。石組の内法は10~20cmで、この部分の床面は水流のためか5cm程低くなっている。溝の北半部は比較的石組の遺存状況が良いが、南半部ではほとんどの石が失われており、代わりに礫が多く混入する。

## 3. おわりに

調査区内で検出した主な遺構は溝状遺構4条と土坑1基であるが、いずれの遺構からも時期を示す遺物の出土がなく、遺構の評価は困難である。



第43図 4号溝状遺構実測図 (縮尺1/60)

## 付編 <sup>おさだ</sup> 長田遺跡出土の黒色土器

### 1. はじめに

筑上郡新吉富村大字垂水所在の長田遺跡は、豊前バイパス建設に伴い1993年に福岡県教育委員会によって調査が行われた。その調査成果については、既に報告している（第6集）。ところが報告時、所在不明の遺物があり全てを報告したわけではなかった。報告後、その所在不明の遺物については発見した。そのため、ここで改めて報告しその責任を果たしたいと思う。また、このことにより一部報告に混乱が生じたことをこの場を借りてお詫びしたい。

資料は、黒色土器2点と土師器杯1点である。

### 2. 遺物について（第1図）

資料は、8号土坑と1号溝より出土している。8号土坑は、C地区南側の1号溝の北側で検出された。幾つかきり合う土坑群の内の一つで、長軸は約1.4mを測り、深さは0.58mを測る。他の出土遺物には瓦がある。一方、1号溝は、C地区北を東西に流れている。調査では、約30m分を検出した。主軸はN-4°-Eを測り、溝幅平均1.0m、深さ40cm前後である。出土遺物には、須恵器片のほか、土師器杯片等がある。

8号土坑出土土器（1）1は黒色土器A類碗で、復原口径15.2cm、器高6.5cmを測る。体部下位付近は丸味を持ち、端部付近で外反する。高台は高く、「ハ」の字に開く。内面は磨滅しており明瞭でないが、ミガキを施している。外底部についてはヘラ先の刺突痕があり、ヘラ切り後に内面から底面を押し出して刺突が行われたと考えられる。外面の色調は橙褐色である。

1号溝出土土器（2・3）2は黒色土器A類碗で、復原口径15.8cm、器高5.3cmを測る。体部上位には丸味を持ち、端部はわずかに外反する。高台は低く直立に取りつく。外底面は糸切り放しで内面は磨滅し不明瞭であるがミガキを施している。外面の色調は淡肌色である。3の

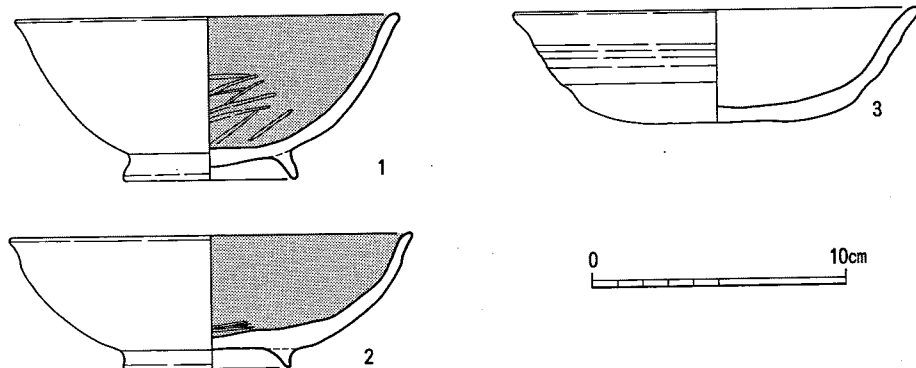


図1 長田遺跡8号土坑・1号溝出土土器実測図（縮尺1/3）



杯は復原口径15.8cm、器高4.5cmを測る。体部には内面からの押し出しと強いヨコナデにより外面に沈線状の痕が入る。そこから端部にかけては丸味を持ちながらも直立ぎみに立ち上がる。外底面はヘラ切りの後にナデ調整。色調は淡肌色である。

### 3. 小 結

報告した1・2の黒色土器はいずれも内面のみを黒色に燻したA類であり、体部が丸味を持つという共通する特徴を持つ。その一方で、外底面の調整法に差があり、1はヘラで、2については糸切り放しである。また、両者の色調は異なる。

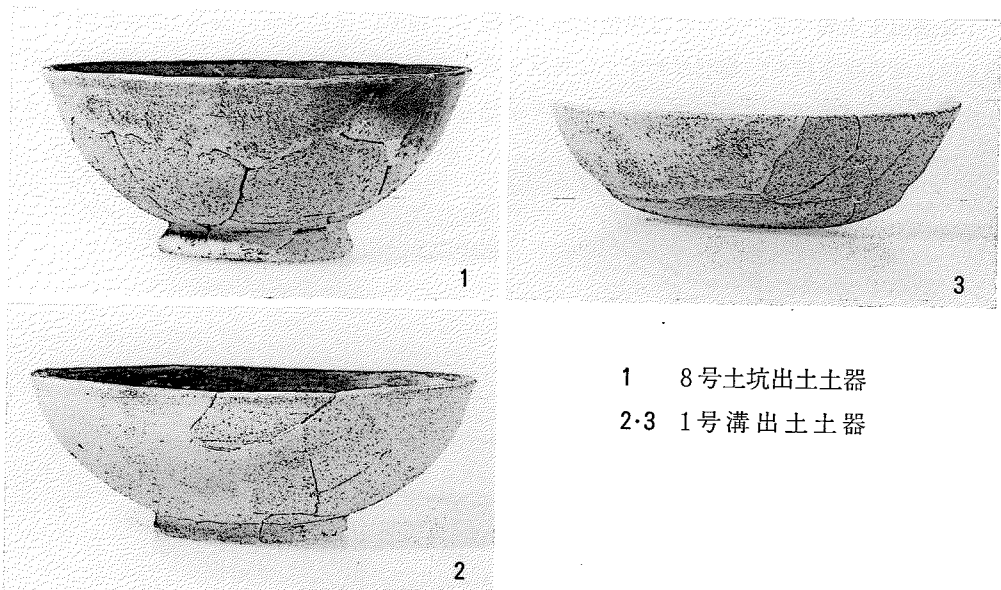
豊前地域の黒色土器の変遷については、佐藤浩司氏によりその地域の特徴がまとめられている(佐藤1991)。それによれば、黒色土器A類の体部の丸味や糸切り放しは10世紀以後の技術的特徴であり、この技術的影響を受けた杯の出現や白っぽくなる色調の変化は、11世紀以後の特徴であるという。このことから、2については、糸切り放しの特徴と白っぽくなる色調の変化、さらに高台の直立化と小形化から11世紀前半から中頃の年代が与えられよう。これに対し、1は年代的にやや先行すると考えられる。

以上のことから、8号土坑については、10世紀代後半から11世紀代前半の年代が、1号溝については11世紀代前～中頃の年代がそれぞれ与えられよう。

#### 引用・参考文献

佐藤浩司 1991「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会

福岡県教育委員会 1997「長田遺跡」『一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第6集



1 8号土坑出土土器

2・3 1号溝出土土器

# 版 图

1 友枝川と宇野代遺跡（南東上空から）

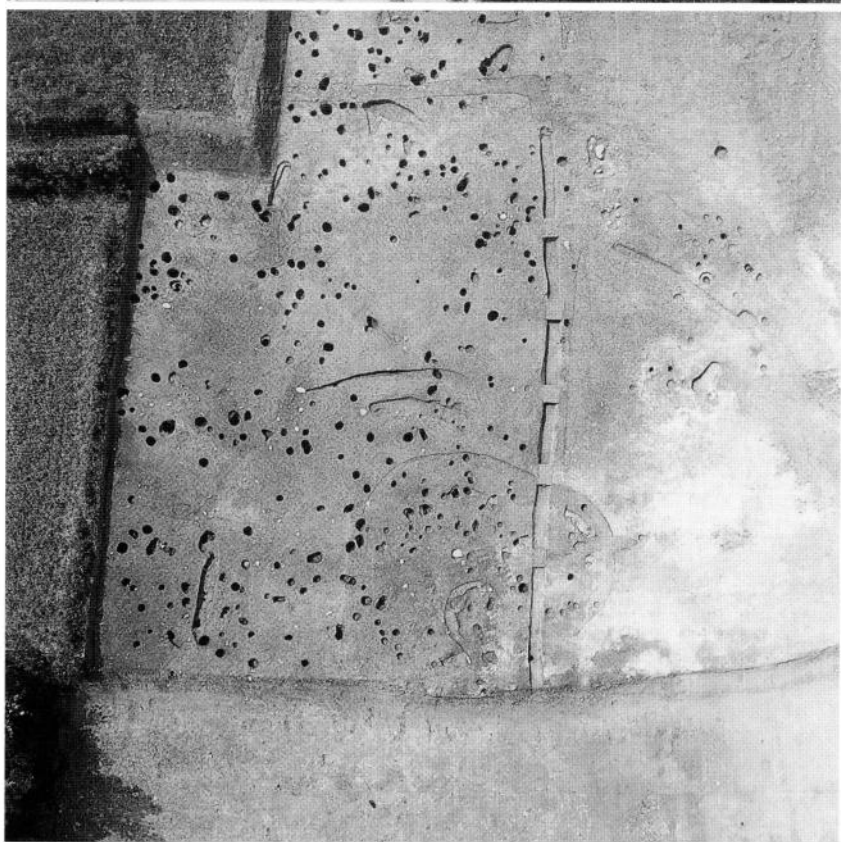


2 上桑野遺跡A地点全景（南東上空から）



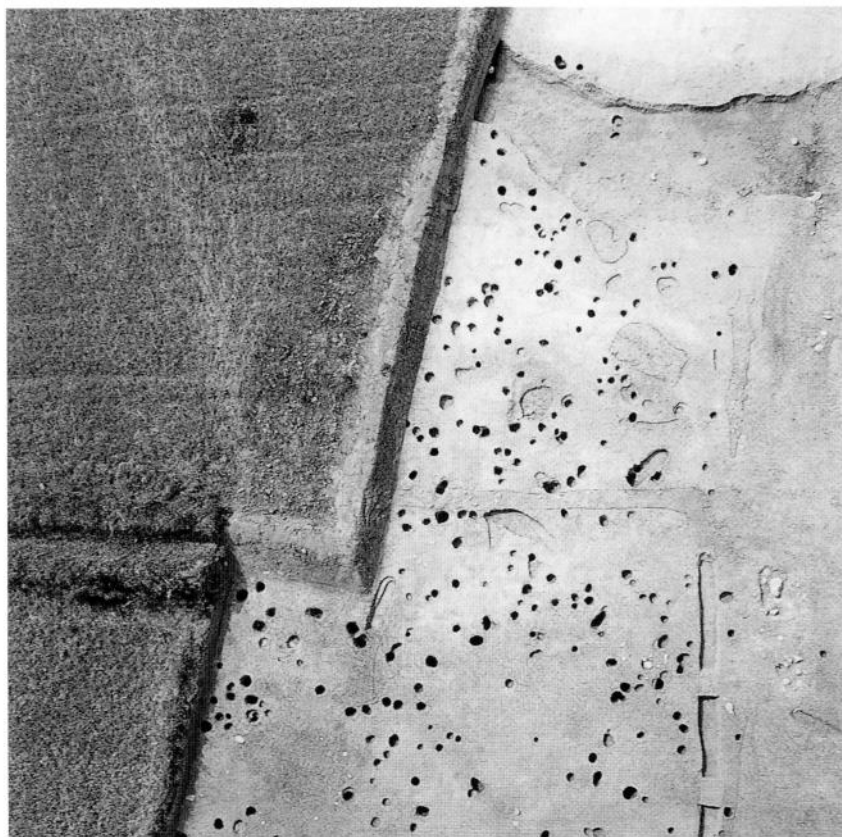


1  
II区全景（北東上空から）



2  
II区南半部（南東上空から）

1  
Ⅱ区北半部（南東上空から）



2  
Ⅲ区全景（南東上空から）





1 I区全景（北東から）



2 I区西半部（南東から）

1 I区2号住居跡周辺(南から)



2 I区3号住居跡周辺(北東から)



1 1号住居跡（南東から）



2 2号住居跡（南から）



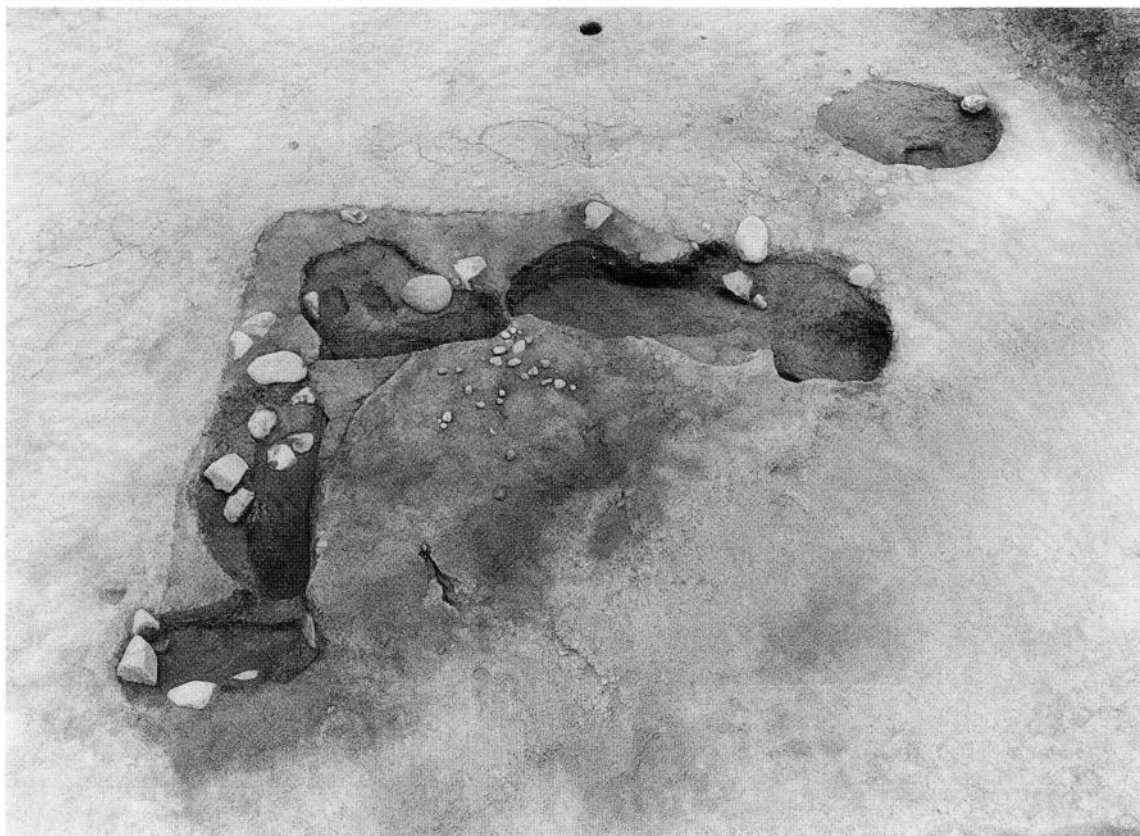
1  
Ⅱ区全景（北西から）



2 Ⅱ区全景（南東から）



1 上桑野1号墳全景(南東から)



2 1号墳石室(北から)

1 石室と南側周溝（北西から）



2 西側同溝（北東から）

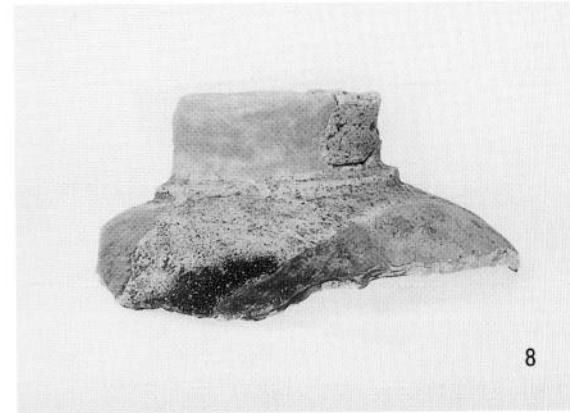
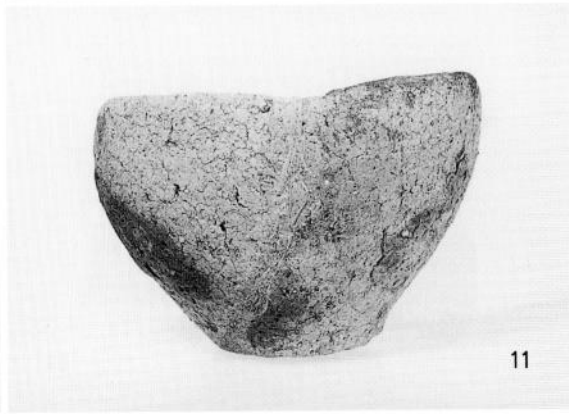




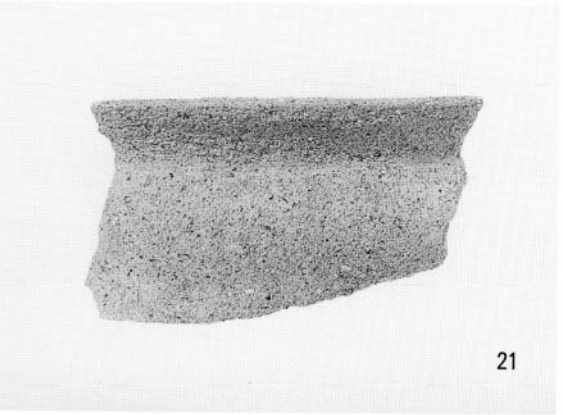
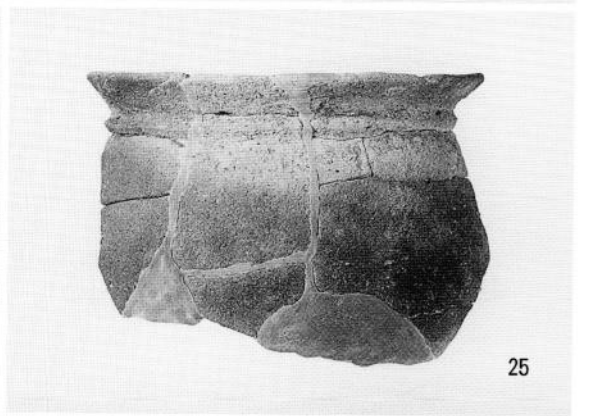
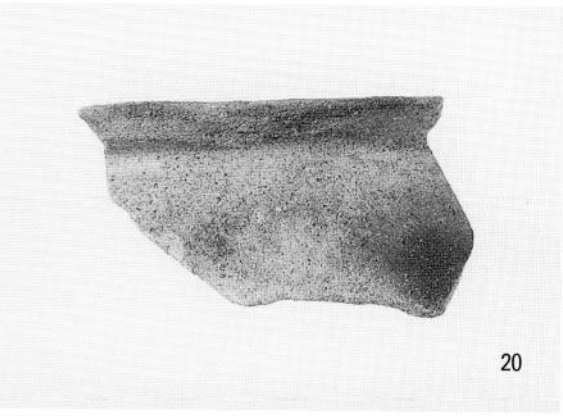
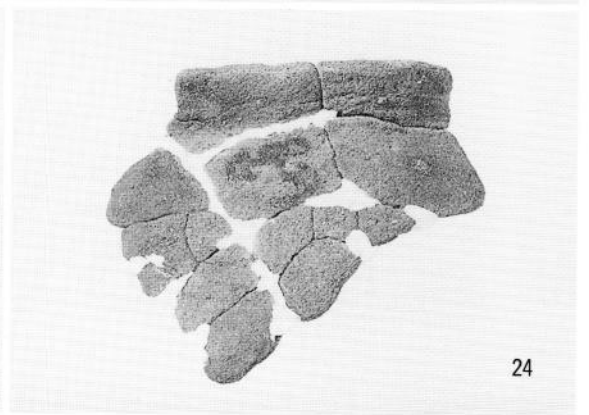
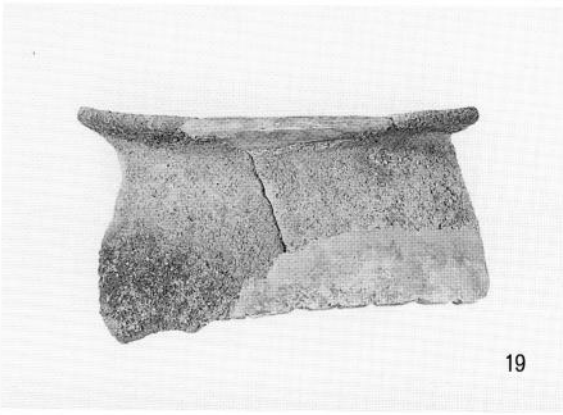
1 南側周溝断面

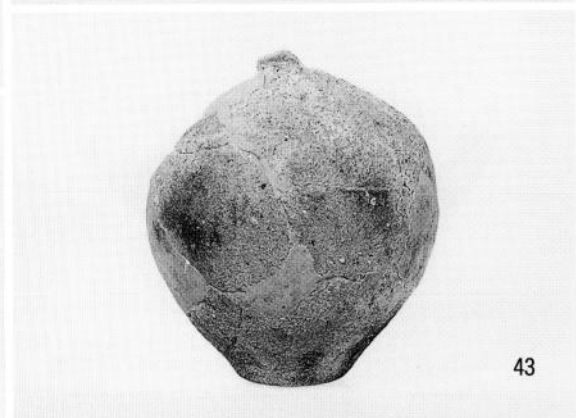
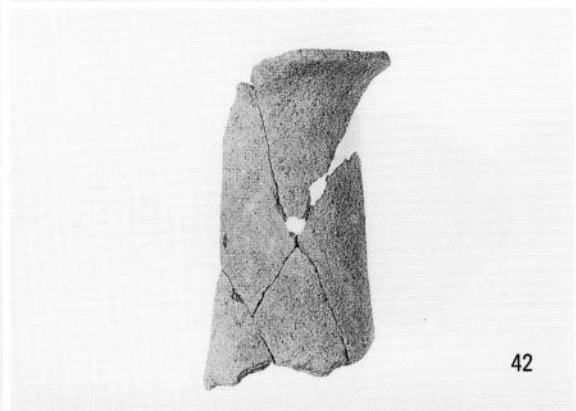
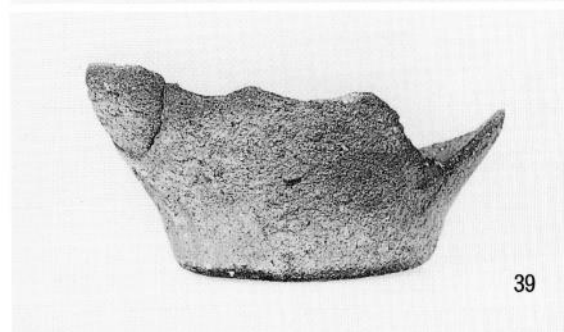
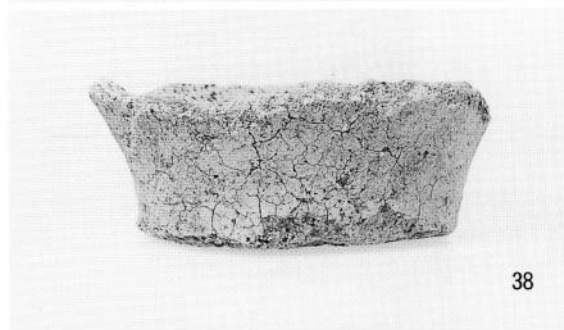
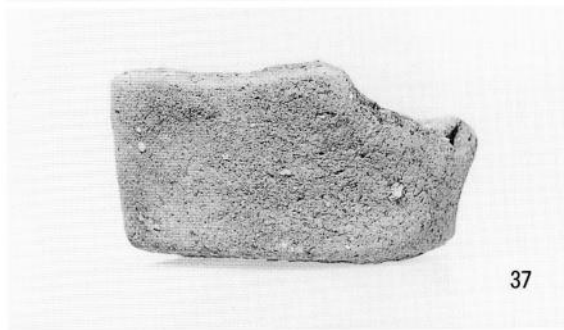


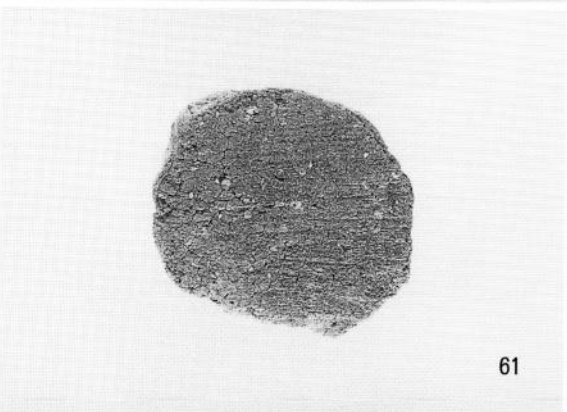
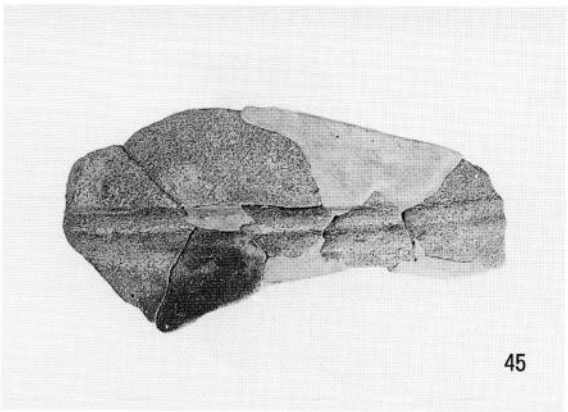
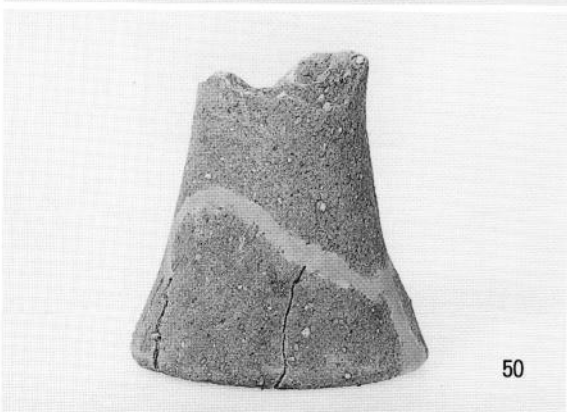
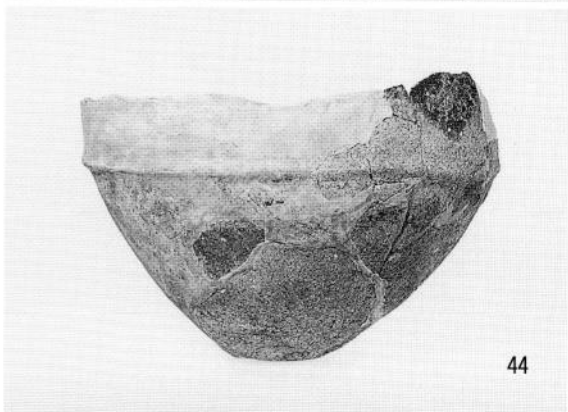
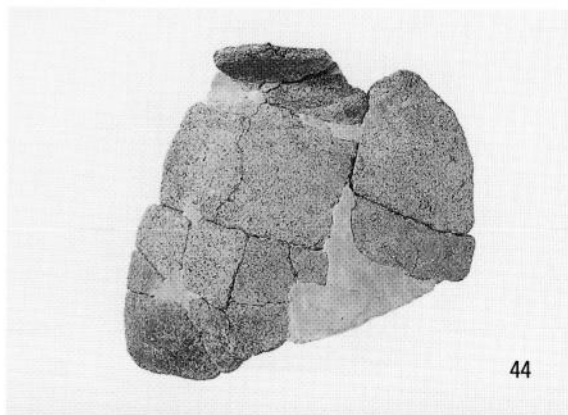
2 西側周溝断面



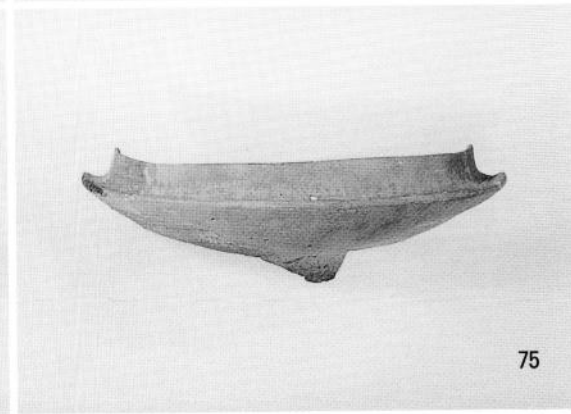
出土遺物 1

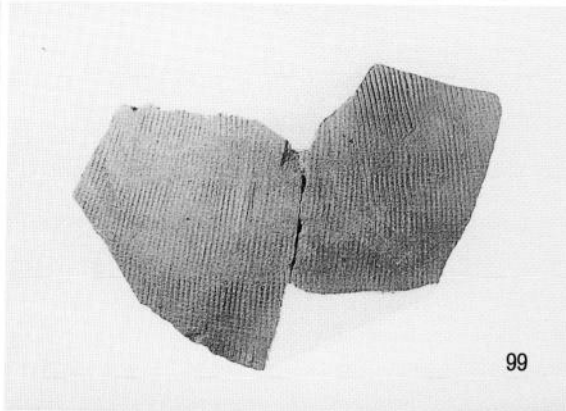
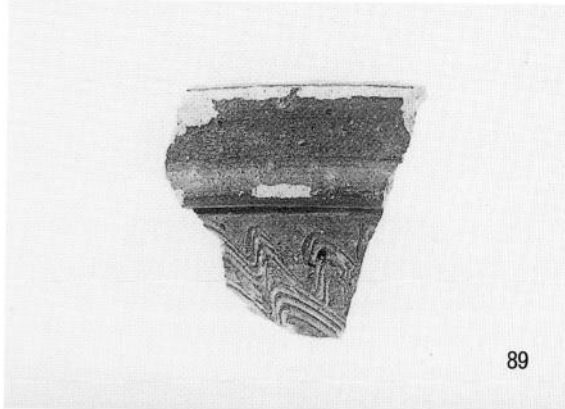
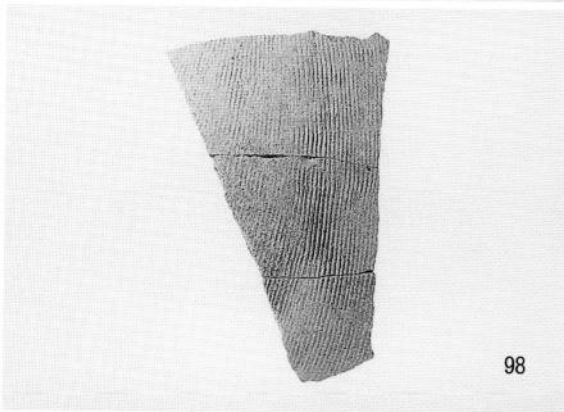
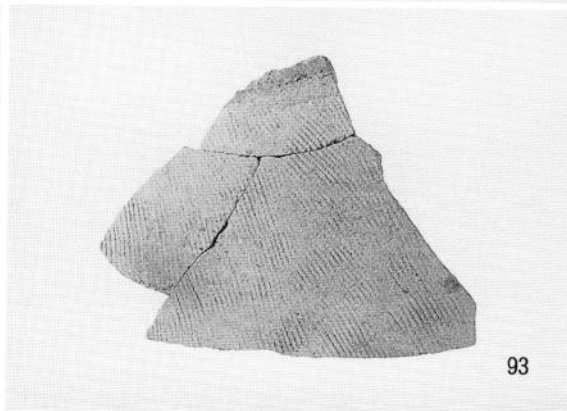
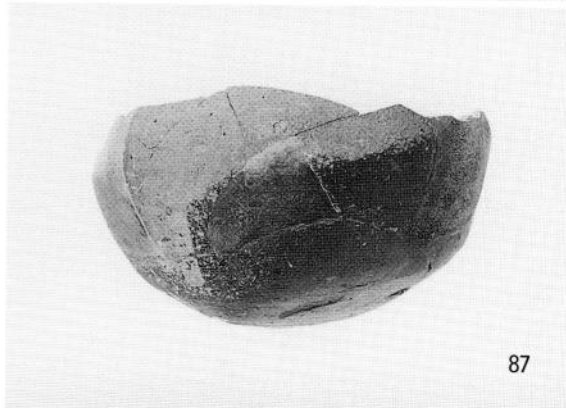
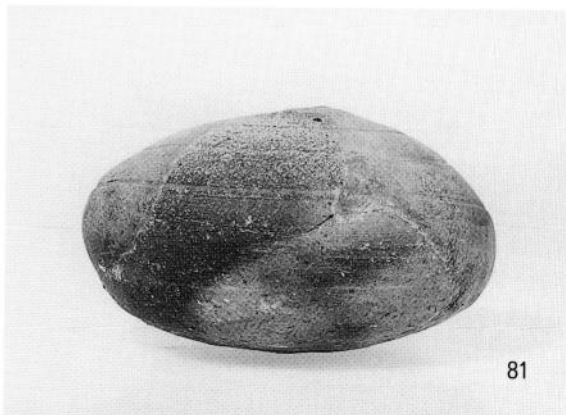


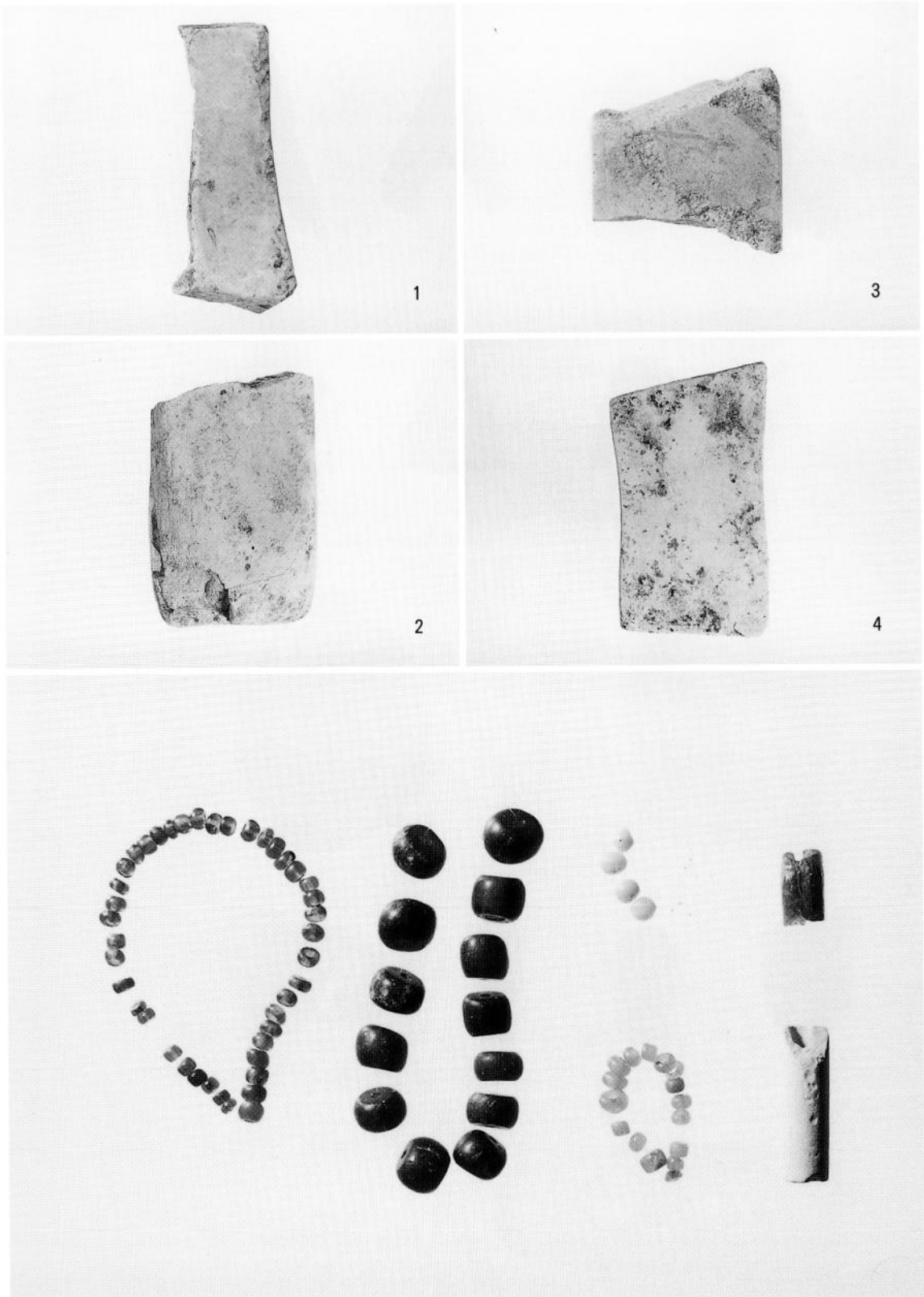




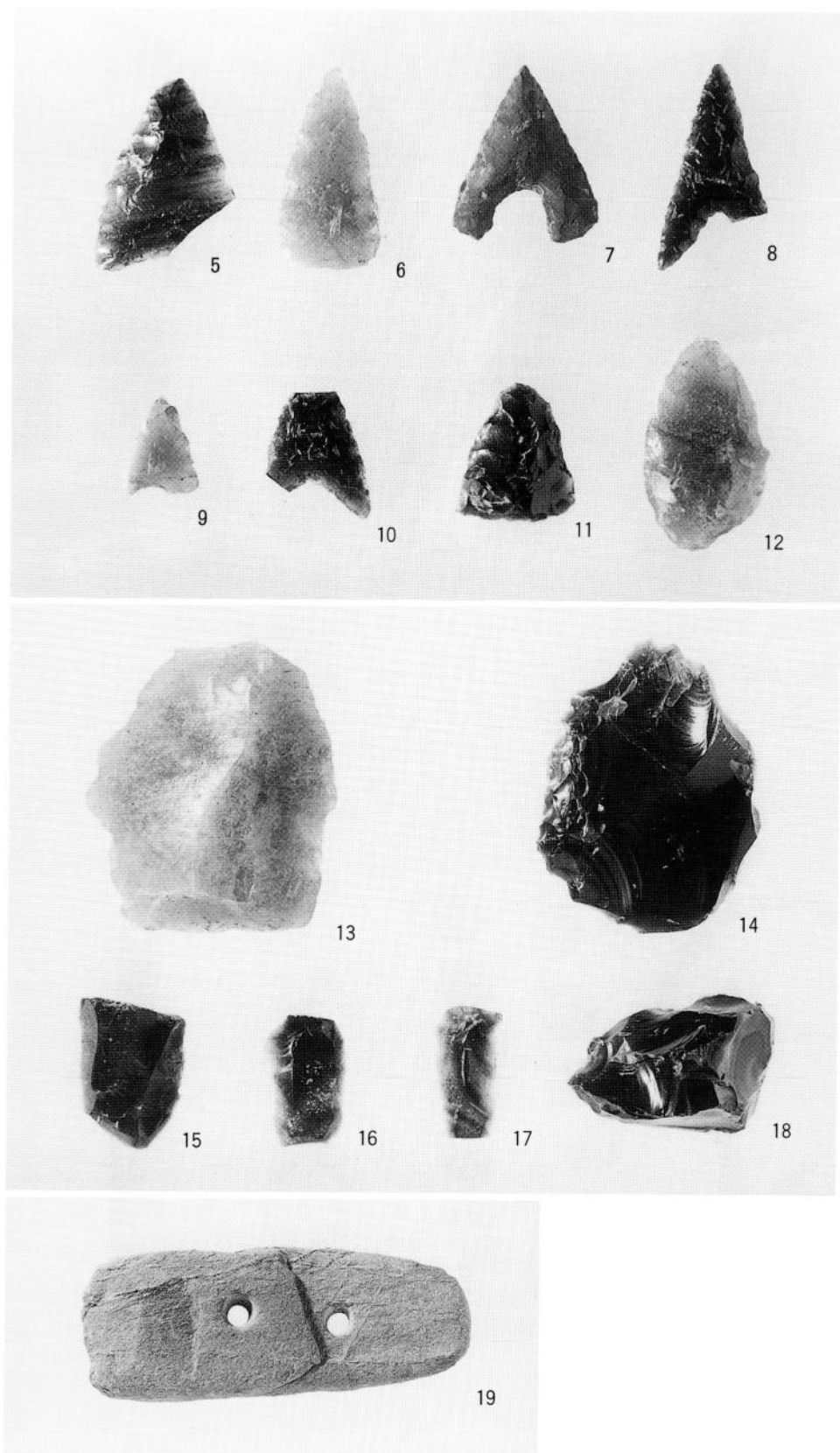








出土遺物 7



出土遺物 8



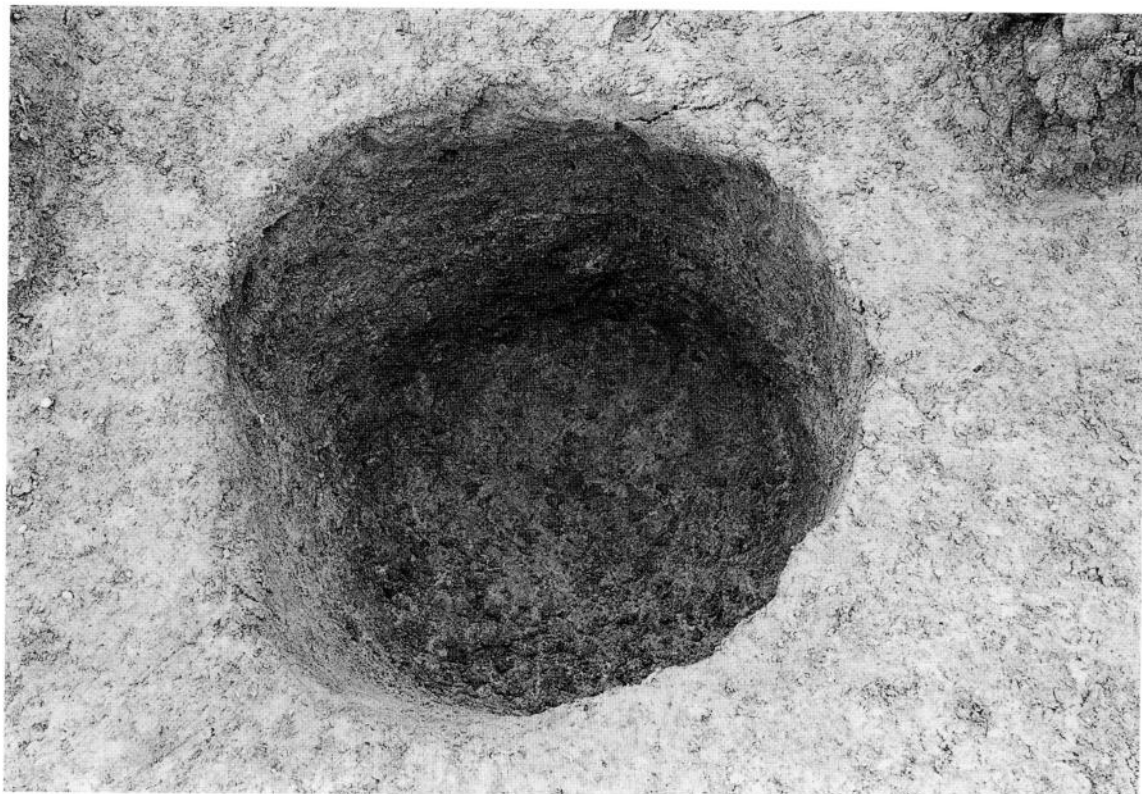
1 B区全景（南西から）



2 4号溝状遺構（北西から）



1 4号溝状遺構（石除去後）（南西から）



2 1号土坑（北東から）

# 報告書抄録

ふりがな	かみくわのいせき・うのだいいせき							
書名	上桑野遺跡・宇野代遺跡Ⅱ							
副書名	福岡県築上郡新吉富村所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	池邊元明・小川泰樹							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-0045 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うのだい 宇野代 (2次)	ふくおかけんちくひげん 福岡県築上郡 しんよしとみわたるみ 新吉富村垂水 1131他	40644	970074	33° 34' 16"	131° 09' 59"	19930107	1900㎡	豊前バイ パス建設
						19930326		
かみくわの 上桑野	ふくおかけんちくひげん 福岡県築上郡 しんよしとみわたるみ 新吉富村垂水 861他	40644	970015	33° 34' 10"	131° 10' 05"	A地点 19920421	A地点 3000㎡	
						19926619		
						B地点 19920107	B地点 880㎡	
						19920117		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宇野代 (2次)		縄文時代 } 平安時代	溝状遺構 土壙	縄文式土器 石器 弥生式土器 土師器 土製品				
上桑野 A地点	集落 墓地	弥生時代 (中期～後期) 古墳時代	住居跡 溝状遺構 円墳	弥生式土器 須恵器 玉類		コップ形土器出土		
B地点		近世以降	溝状遺構 土壙					

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 9	登録番号 12

## 上 桑 野 遺 跡

(宇野代遺跡Ⅱ)

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 8 集

1998年(平成10年)3月31日発行

発 行 福岡県教育委員会  
〒812-0045 福岡市博多区東公園7-7  
電話 (092) 651-1111

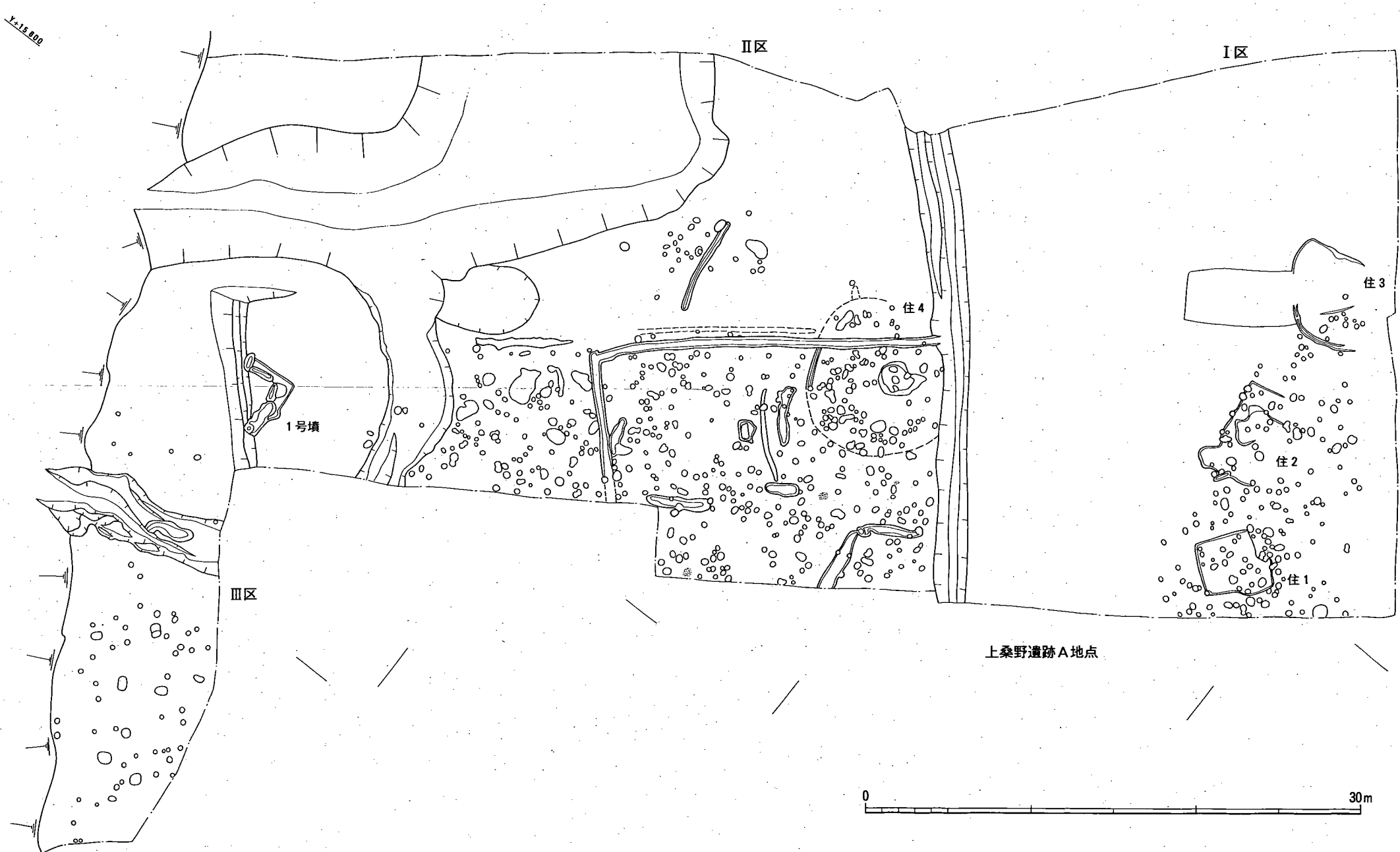
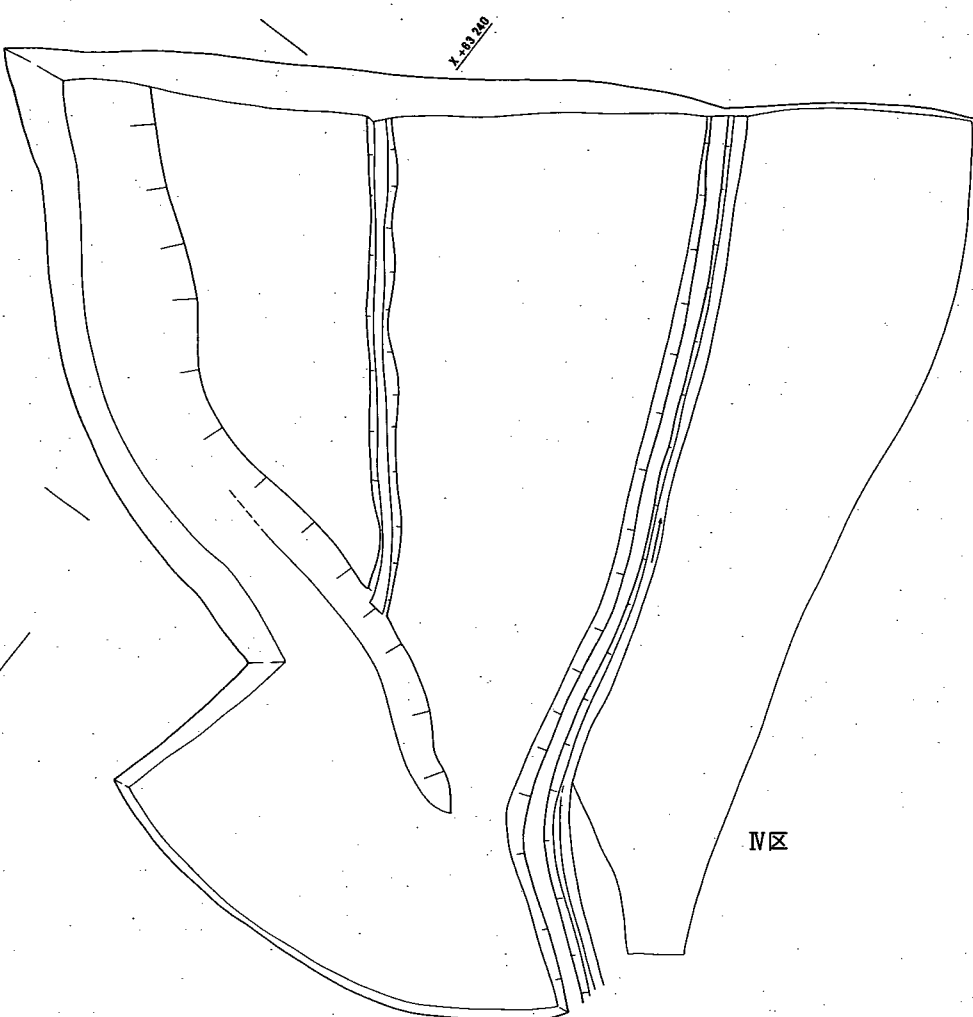
印 刷 マツオ印刷株式会社  
〒821-0012 福岡県山田市大字上山田1338-9  
電話 (0948) 52-0144



# 上桑野遺跡

## 付 図

上桑野遺跡遺構配置図 (縮尺1/300)



付図 上桑野遺跡遺構配置図 (縮尺1/300)